

清水長一郎遺文集  
(1)

清水長一郎遺文集  
1

目

次

一、	随想狂騒時代	1
一、	山路郷の少年少女達に	3
一、	山路郷の少年少女達を讀んで	4
一、	芝口先生の表彰に寄せて	5
一、	日高濱の回顧	7
一、	若野古墳と小林翁	10
一、	日高珍姓録	12
一、	明治初年の世相の一斑	14
一、	お願い一つ	15
一、	森彦太郎先生遺文集	16
一、	水車今昔譚	20
一、	失われた郷土誌	21
一、	瀧法寺行	23
一、	御坊町の諸氏よ	27
一、	考古資料展を観て	28
一、	夏休みを迎えて	29
一、	再び御坊町の諸氏に	31
一、	おどり四方山話	32
一、	夏日艶話	33
一、	てんごの川	35
一、	矢田八幡の石棒	37
一、	續日高珍姓録	39

一、	光源寺の鐘	41
一、	故人今人	45
一、	故人今人を讀んで	47
一、	郷土の地名二、三	49
一、	安政の大地震津浪話の記	52
一、	矢田村の大字名	56
一、	清水長一郎氏の矢田村	
	大字名義考に蛇足を加う	60
一、	六郷堰雜考	61
一、	日高川渡し畧考	66
一、	南方熊楠翁余聞	70
一、	山口華城翁のことなど	74
一、	明治初年の御坊	77
一、	選舉回顧録	79
一、	至誠縣民のために監獄せよ	
	西川事件最後の途	81
一、	講書談	82
一、	鳳生寺	84
一、	玉置韜光師を思う	86
一、	他人のこと自分のこと	88
一、	秋風清和	90
一、	秋風清和後日譚	91
一、	七・一八水害覺書の一頁	93
一、	御坊町付近の浸水状況	93

	災害地走行記	101
	續災害地走行記	109
	天田橋上の二十四時間	113
	續天田橋上の二十四時間	117
	藤井の話	119
一、	土木責任者に望む	
	天田橋はあれでよいのか！	124
一、	馬をよんだ俚謡	126
一、	御坊市への希望	128
一、	ウサキもツノ姫物語	129
一、	地主の今昔	130

# 随想騷狂時代

「紀州新聞」昭和二十五年八月三・四日掲載

今から四五年前、大阪に住んでいた時分のことである。ある年も三月の末近くの田舎町に旅行したことがあった。ちょうど卒業式の始まる時季で、小高い丘の上の小學校の窓から「螢の光」の合唱が聞こえてきた。私はいそがしい出張中のひと時であることも忘れて、その澄んだ合唱に聞き入ったのであった。

大阪の「天神の森」や「天下茶屋」界限は、面白いところで、妙に藝人やお妾さんの住居多く、晝間でもあの邊を歩いているとひっそりした生垣の中から三味線の音などもれてきたものであった、近頃は彼方仕込みのハイカラな音楽全盛時代で、お琴などという古臭いものは、さっぱりかえりみられなくなったが、一昔し前はお琴といえれば良家の子女の教養の一つであって、新派の小説の挿画にはきまってお嬢さんがきれいなお座敷でお琴を弾いている憂し氣な場面が出るし、事實また結婚前の婦女のたしなみとしてお茶やお花とともにお琴を習ったものである。上手下手にかゝわらず、あのポロン／＼と單調ではあるが妙に憂を合んだ音色は聞く人の心をゆすぶったものである。

私がこんなつまらぬことをくどくどしく書き並べたのは外でもない、私も矢張り音楽を解し音楽を愛好するということ云いたかったのである。もちろん三味線やお琴というものは、何れは亡び行く運命のものであるうし、また難しい音楽論を振りかざす人々からみれば取るにも足らぬ卑しいもので第一あんなものが音楽と云えるかどうかも疑問であるが、私などのように頭の古い人間には無闇と新しい軽々しい洋樂よりも、しつとりと落ち着いた三味線やお琴の音色の方がはるかに哀れ深く感じるのである。

現代は何といつても科學萬能の時代で、食料品の罐詰はもとより、音の罐詰もともいふべきレコードや近頃は**評長**や**局長**の罐詰まで流行する始末であるが、どこまで行っても所詮罐詰は罐詰で、手輕で安直であるが、一向に感心出來ない。ラジオにしても同じことであって、町を歩いていると朝から晩まで休みなしに鳴らしている家や、町中びゞきわたるような高い音で鳴らしているのを聞くが、あれは一体どういう譯であろうか。聞いている人はあれで味いたのしんでいるのであろうかと不思議である。

由來音樂などというものは極めてデリケートなものであるから、これを味うには味うだけの心の華備や靜かな雰圍氣が必要であろう。如何なる名曲でも朝から晩まで休みなしに聞かされたものでは食傷してしまし、第一藝術に對する冒瀆でもある。浪費というのは何もお金や品物に限られたものではない。目にみ

えぬ時間でも音楽でも同じことである。食べ物にしても牛飲馬食は食通のとらざるところである。

私は今までレコードやラジオの悪口を書き並べたが、それではラジオやレコードは丸つきりきらいかといえばそうではない。何時頃のことであつたか、御坊の横町に石橋という喫茶店があつたがその店でソード水を飲みながら、犬吠崎の土用波の放送を聞いた。マイクを通じて流れてくるドウトウたる土用波の響は、さながら身を二百里の彼方、怒濤逆巻く太平洋の巖頭にたつ思いをおこさせた。彼のときの印象は今に忘れられない。その他今はもう無くなつたが「全国の皆様お早うございます」というラジオ体操の挨拶も、あの「全国の」というのに獨特のひびきがあつてすがくしい気分をおこさせた。天気概況を聞くのも好きなものゝ一つで「御前崎では北の風、快晴、風力三、札幌薄曇り、小雨」などいうのを聞くと此方も気分が大きくなって、神経衰弱的な考えなど恥しくて吹き飛んでしまう。近頃では學校でも評会科を重視しているが、天気概況の時間に地圖と對象しながら授業をやれば兒童も一入興味をもつであらうし、學力も増すのではなからうか。

×

×

要するにラジオやレコードは自分の欲するときに、欲するものを聞くとところにたのしみがあるのであつて、どんな名曲といえども聞きたくない時に聞かされたのでは迷惑以外の何物でもない。まだ少し季節が早い、やがて九月も半ば近くなると、祭ばやしの笛や太鼓の音が静かな秋の氣をふるわして聞えてくる。私はあれを聞くとときまつて、「あゝ、又今年もお祭りがきた」と懐舊の情にとらわれる。そうして私達の父や母がすごしたであらう遠い昔の生活を思い出す。それと前後して運動會の季節ともなれば、どこの學校でもジャンクと樂隊を入れ景氣象をつけるし、町は町で町中が酒場になつたかと思ふ程、どこでもこゝでもレコードやラジオで流行歌を氾濫させるし、更に大都市になればその外に自動車、汽車、電車、工場の騒音が加わつて、たゞもうわんくくと騒音のルツボである。近代機械工業の發達は世界をあげて騒狂の巷と化してしまつた。これがもう一步進歩して防音施設が完備し、世の中が静かになつて、私のような氣の弱い人間も、ほんとと安心出来るのは何時のことか。文明だとか文化國家だとか、大きなことをいうが、云いかえてみれば、現代文化は騒音文化である。騒音の中からどうして深い思想や藝術が生れ得よう。近ごろ世の中が上つすべりで、今日は裸ダンス、明日は競輪と目の色變える連中ばかりで、一向落ちつきのないのは案外こういふところに原因があるのではないか。近代人に最も欠けているのは、わい／＼と騒ぎ廻る調子づいた時間ではなく、落ちついた静かなものを想うひと時である。

(おわり)

# 『山路郷の少年少女達に』

「紀州新聞」昭和二十五年七月三十日

## 山路郷の少年、少女達に

田端生

山路郷の少年や少女たちは

見知らぬ旅人にも挨拶する

君達はその習慣をどこで覚えたのですか

そしてそれがどんなにすばらしいことか

君達自身知っていますか

× ×

君達はその習慣を持ち続けねばいけない

君達はその人なつこさを失つてはいけない

大人になるとなかく、挨拶は出来ないのだ

ごうまんでなければ卑屈な心がめばえて来る

あゝ、誰も彼も君達のようにであつたら：

× ×

僕は思う、そんな評會はすばらしいと

みんな兄弟のような心を持ち合つて

兄弟よと呼びかけ合う、そんな評會

みんな平等でみんな幸福な、そんな評會

そんな評會を君達とともに評ろう

# 『山路郷の少年少女達よ』を讀んで

「紀州新聞」昭和二十五年八月六日掲載

七月三十日の本紙に掲載された田端さんの詩「山路郷の少年少女達に」の一篇は、近頃たのしく讀んだものゝ随一であつた。

私は詩のことは一こう不案内であるが、要するに讀む人の心に明るい灯をともし、希望をもたらしてくれるものが立派な詩であると思つてゐる。

田端さんの詩は

「山路郷の少年や少女たちは見知らぬ旅人にも挨拶する……」

にはじまる、十五行三節の短いものであつたが、その中に三山路の少年や少女に對する限りない愛情と、今時世にも珍しく残されている美しい風習に對する驚異と讚嘆の心を眞珠のような言葉で歌つてゐる。

あゝ本當に見知らぬ旅人にも挨拶するいう、人なつこさと謙虚さ、田端さんのいわれる通り大人になれば、つまらぬ見榮や少しばかりの知識や、財産や、地位がついて廻つてなかく、彼の少年、少女のように素直な心にはならないのである。或は同じ年頃の少年少女であつても、今日都會に住む子供たちは、いたづらに人づれがして小ざかしく、場合によつては映画俳優のようにコケットリーでさえある。

× ×

私の母は山路郷から程近い川上村の生れであるので、私も少年時代から度々川上地方に遊んだものであるが、彼の邊の少年や少女達もやはり行きづりの旅人にもていねいに挨拶をしたものであつた。しかし敗戦後の今日どうなつてゐるのであるのか。川上村も山路郷ともに日高川沿いの淋しい山村であつて、木材や椎茸が出るほか、何の取柄もない村である。けれども村が貧しいからといって決して卑下するには及ばない。

「山路郷の少年や少女たちは見知らぬ旅人にも挨拶する……」

あゝこの美しい心根、それこそ鉦と太鼓でさがし廻つたとて、めつたとないであろう。尊くゆかしい仕きたりを、當り前のように毎日くりかえしてゐる純眞の少年少女がいるではないか、しかもそれらの少年少女は日高奥の大自然の中ですく／＼と大きくなりつゝあるというすばらしさ。これこそ、千億の富よりも何よりも尊い。私はこの美しい風習を一編の詩によつて紹介して下さつた田端さんに心から感謝する。

そうしてもう一度田端さんの詩を読みかえしてみろ。

「君達はその習慣を持ち続けねばいけない

君達はその人なつこさを失ってはいけない」

然り何時までも忘れ給うな、山路郷の諸君

「みんな兄弟のような心を持ちあつて

兄弟よと呼びかけあう、そんな評會

みんな平等でみんな幸福な、そんな評會

そんな評會を君達と、ともに争う」

## 芝口先生の表彰に寄せて

昭和二十五年十一月二十一日掲載

### 1

十一月十一日御坊公民館は町の文化功労者として芝口常楠先生を表彰した。

たしか昨年の文化の日であったと思うが、田邊市でも雑賀貞次郎氏に感謝状を贈って多年の勞をねぎらったが、何といても中央の學者や藝術家は華かな存在であるし、國家もまた勲章を贈ったり新聞でも書きたてたりするが、郷土研究など、という仕事になるとパットしない地味な仕事であつて、こんなことは、いくらやっても酬いられるところは少い。一体日本人はすぐに金儲けになつたり、アツと人目をひくようなことには口をアングリ開けて感心するが一文にもなぬことには頗る冷淡である。

### 2

早い話が近頃やかましい松原の伐採問題にしても、成程、今日の日本の立場から貿易の大切なことも、その輸出の花形が紡績であることも、そんなことは小學生でもわかっている。従つて松を伐らねばならぬこともよく理解出来る。しかしそれはあくまでも万やむを得ないからの手段であつて、何時の時代からは知らぬが、とに角何百年かにわたつて日高平野のよく田を護り、私達の父<sup>天</sup>が血と汗で育て、朝な夕なに

ながめて来た松である。如何にやむを得ないからとはいえ、松は物を云わぬからとはいえもつと温味のある、云わば一片の人情味をそゞげぬものであろうか。

伐採を主張する人達の態度をみると「紡績は金になるから、もうお前には用がないよ」といわんばかりの現金な様子を感じる。これは一人私のみの感傷であらうか。

よく似た例がもう一つある。私の村に六郷堰というのがあったが、これはその名の如く小松原、丸山、財部、菌、田井、和田、所謂六郷の水田三百七十町歩を灌漑してきたものであったが、昭和二十一年若野井堰に併合以来廢滅して今は跡形もなく、早くも世人の記憶から消えんとしている。六郷井堰は紀伊續風土記や郡誌日高郡誌によると日高郡最古の井堰といわれ、その起源は分からない位古いものであるが、延々三里、六郷の水田三百七十町歩を灌漑するということは誠に重大なことであった。正に日高平野農耕史上の一大革命であったといつてよい。それ程日高平野の住民に恩惠のあった六郷井堰も用がなくなれば一人として顧みるものもなく、世人はケロリとしている。これが現代人の姿なのである。

### 3

敗戦以来猫もしやく杓子も文化國家のと、シャックリのまじないみたいにいっているが、文化とは文化パ  
ンを焼いたり、文化鍋を製造するようにそう手輕に出来るものでもなければ、映画をみたり麻雀に徹宵す  
る人々のみが文化人でないことはいうまでもない。

もとの英首相チャーチルが煉瓦積の優れた技術者であることは有名な話であるが、云つてみれば文化と  
いうものはそんなものではないかと思う。天下を摩する壯麗な宮殿が一個一個の煉瓦でなっているが如く、  
史上空前を誇る現代文化の華は過去の幾多の煉瓦積工が一つ一つ苦心經營したものに他ならないのである。

### 4

しかしして、郷土研究などという極めて目立たない煉瓦の一個を積みあげた芝口先生に御坊公民館が感謝  
状を贈ったということは、誠に意義深いゆかしい事柄であると心からうれしく思うものである。御坊公民  
館では今後も續いて町の文化功勞者を表彰するというが、各村の公民館もこれにならつてそれぐの土地  
の文化に貢献した人々を表彰するようにするならば、どれ程無名の人々の勇を鼓舞することであらうか。

何處の町村でもかくれた文化の推進者は必ずある。さしづめ私の村あたりでも、日高郡をして今日の夏  
柑王國たらしめた柑橘界の先賢者古田幸吉翁、あるいは若野古墳を獨力で保護して上代日高の古墳文化研  
究に貴重な資料を傳えてくれた小林源楠翁の如き。二翁ともに草深い田舎の只の老翁にすぎぬ、けれども

彼等もまた人類文化のために小さな煉瓦の一個をつみあげた一人である。

## 日高濱の回顧

「紀州新聞」昭和二十五年九月三日掲載

### 1

大和紡績松原工場の擴張にからんで日高濱の大松原が郡民の前に大きくクローズアップされて来た。千本の松を伐ることは一夜にして出来るが、一本の松を育てるにも幾十年の長い歳月を要する。私は関係諸君が徒らに感情に走ることなく、冷靜周到に事に處して悔を千年の後にのこさざらんことを願うものであるが、この際この百町歩におよぶ大松原の成り立をおもい先人努力のあとをしのんでみたい。

何處の土地でも同じことであるが、日高濱の成立も太古のことはぼうくとして知る由もない。只和田村に塚原というところがあり、かつて彌生式土器を出土した。塚原は即ち塚原であり、古墳群の存在を指すものである。また現松原小學校庭からも同様土器の出土があったというから、以ってその成立の古さを思うべきであろう。

徳川期に入ってから歴史については故森彦太郎先生に詳細な交渉があるが、これは和歌山縣史蹟名勝天然記念物調査會報告という特殊なものに發表された関係上、一般の人々はあまり知らないのではないかとと思う。それでこの機会にもう一度、故森彦太郎先生の論文を抄録して、日高濱に對する世入の認識を新たにしたい。

### 2

森先生の文に曰く

「日高川口（松原村濱の瀬に）から和田村本の脇に至る長汀およそ四千五百米、そこに幅員五百米、海拔十米内外の砂丘上に横たわる大保安林があり、文字通りの大松原（字名）を中心として、老莊若稚とりぐの枝葉交錯鬱乎として、永えに日高平野萬項のよく田を保護し、潮風除のべよう障となる外、その宏大なる林間樹下は自然の大公園をなし、大波小波打ちよせては返す、清よりの邊から

展望するぼうくたる遠洋、それは正しく紀伊半島随一の大観である」  
と簡潔に位置と規模、使命、景観を叙し、つづいて

「日高鑑に御留山を録して「五郎左衛門組和田浦一ヶ所但松木山」とありつとに保安林的の取扱をうけていた。吉原領大松原には南龍松と稱する並木もあり、藩<sub>詰</sub>頼宣の保護を物語っている。藩<sub>詰</sub>については吉原のごときも林政に注意したようであるが」

次いでいよく、日高濱の林柿第一回受難史に筆をすゝめている。即ち

「宗直の時代、財政難緩和の目的をもつて寛延から寶曆へかけて、時の勘定奉行の議をもつて、國内の松林を伐採せしめ、林制一時にち緩した。わが日高濱の美林もこの厄に遭い、寶曆二年御用松木伐採とあつて和田、吉原兩雨村領にわたり長さ十三町幅六七間位、大々の伐採伐をおこない、剩え翌々四年跡地を新畑に開墾（租税収入）の目的をもつて拂下入札に附した。

むろん風下百姓は一致連署をもつて哀訴したが、伐採も拂下も決行した。この濱は土地こそ公地なれ、立木は一切人民が費用と労力を負担して育成し、その管理保護についても庄屋、大庄屋その他の村役人が重責を負うていたのであるが、そこは封建の世、一朝伐採のおふれが天降つたが最後、撤回はおろか伐つて伐りまくつた松材は、御用の名の下に全部藩に引きあげられ、寶曆の場合などは無茶に輪をかけて跡地まで賣り拂つたのである。

と偉大なる郷土史家であつた森先生は、哀心から慨嘆しているのである。

「そんなことをしておきながら、同年（寶曆四年）三月

和田、吉原領松原の儀

往古より制道嚴敷、村百姓ども能申含む候にて小松苗、雜木、等快く生茂り有之候段々制道疎に相成候趣件之通には有之間敷儀、不吟味成事に候

この上前々通嚴敷制道之儀申儀候間其方とも毎々見廻り制道締り方の儀等念入可被申付候  
なんてもつたいぶつて代官沢片屋肝煎にまで嚴訓している

と支配者の勝手振りをわらつている。さらに筆をついで

「しかもそれから數年後の寶曆十一年六月所謂テングの川（西川改修工事で失敗に終つた）の工事を進める上において必要とあつて、今度は吉原領で松樹伐採を断行した。この時も風下百姓の代表として財部、小松原、田井、菌、下富安の各庄屋、水番連署で天田組大庄屋經由で代官松木甚五右衛門宛伐採反對の陳情をしたが、所せん泣く子と地頭には勝てず一顧も与えられなかつた。これは

工事は不成功で松樹伐採はまったくむだになった。それでも百姓にとつてはこの松原こそ「私共村々の大手」だといって保護愛育終始不變で、右の一件後約三十年を経た天明、寛政年間濱の瀬では同浦領へ多數の小松苗を植えこんだ。

その次は、さらに三十年ばかりたつて文政六、七兩年にわたり、吉原、田井、濱の瀬等へ風下十七ヶ村、すなわち高家、下志賀、萩原、荊木、丸山、入山、小中、小池、和田、吉はら、田井、藪、島、財部、小松ばら、下富安、上富安から小松多數を植えた

まことに天下に誇る日高濱の美林は一日にしてなつたのではない。かくの如くわれら父祖の汗に培われて育つたものである。

「然るに弘化三年(一八四六年)また和歌山城雷火にかゝつて天守閣焼失するや、その復舊非常御普請とあつて、翌四年の冬の濱の巨松をうんときり出した。それはやむを得なかつたが、翌弘化元年また御用材不足だそうで、さらに千本きり出すという風聞があつたので、それは由々敷ことだと志賀、天田、入山三組大庄屋が連署で反對陳情した。それかあらぬかこれは實現をみなかつた。次に嘉永四年(一八五二年)やはり風下十七ヶ村から松苗一萬本を植こんだ。この代銀一貫目、但人夫一人二十本持、遠近平均一本につき代銀一分づゝ、尤能く相育ち候様相撰み念入掘出候筈とある。むろん一切村々百姓の負担であつた。それから數年後の安政四年(一八五七年)同様植えつけ、さらに九ヶ年後風下村々から濱の瀬だけ植込み、右の外安政四年から慶應二年まで數回名屋浦領沿川へ潮風除のため植えこみ、これらの所要經費はことごとく風下百姓の負担であつた。自分たちが植え込んだ松だ、精神のこもつた松だ、日高平野の住民が日高濱の保安林に對する愛着心の如何に強いかゞがわかるだろう。明治維新以降も年々補植をおこたらず愛護し來つた結果、現に見るところの百余町歩の美林となり啻に風潮防除に役立つのみならず、日高灣頭の一大偉觀として風致をそえることとだけかわからない。以下省略

### 3

以上で近世における日高平野の住民と日高濱との交渉の概略をほゞ説明し得たかと思ふが、伐るにしても伐らぬにしても、共にもう一度この大松原と私達のつながりを顧みて、無心の松の上に温かい眼をそゝいで見ようではないか。

# 若野古墳と小林翁

「紀州新聞」昭和二十五年十一月十九日掲載

## 1

この前本紙に書いた「芝口先生の表彰に寄せて」と題する小文の中で、私は古墳の保護者として小林源楠翁のことに一寸觸れたが、今日はその若野古墳と小林翁を簡単に紹介してみたい。

## 2

紀和國境<sup>越</sup>ツカ<sup>戒</sup>イの瀧に源を發した日高川が右に曲り左に折れ、深い峡谷の間を流れて、ようやく廣々とした日高平野に入ろうとするところ、即ち有名な伊達千廣の

「うごきなきわが君が代のためしには千曳の山ぞひくべかりける」

の歌碑のある丹生村千曳の對岸に若野という小さな部落がある。戸數わづかに三十余戸、明治<sup>一八八九年</sup>二十二年の水害に舉村濁流にのまれ、流失家屋三十八戸、死者三十八名という痛ましい被害をうけた部落であつて、爾來部落は北よりの山際に移つた。部落の背後は白馬山脈から斷續する、ゆるやか丘陵で、南をうけて日暖かに富有柿と蜜柑の産地として名高い。この若野部落のほゞ中央宇片山の人家の後方（海拔三十米位）に、今頃であると黄色く熟れた蜜柑の樹間に、人々はこんもりと丸いあたかも土饅頭を少し大きくしたような一突起を見るであらう。これが若野の古墳である。

## 3

一体日高郡は古墳の多いところで、有名な名田村の古墳群をはじめ志賀村谷口邊から内原村小中、萩原、荊木さらに湯川村富安、丸山、藤田村吉田、矢田村土生、小熊と、つまり日高平野を囲る丘陵地帯に多くの古墳が分布している。古墳というのは、文字通古い墓の型式の一つであつて、斯様な墓が盛に作られたのは大槪みにいつて佛教渡來以前のことであるから、大体千二三百年前にあたる。

私はこゝで古墳の歴史を語る心算はないが、とも角我が日高の地が有田や東、西牟婁郡に比べて数多くの古墳をもっているという。これは芝口先生も常にいつて居られるが、紀州上代文化を研究する上に注目すべき事柄であると思う。

さて、斯様に上代文化研究上一つの貴重な鍵といふべき古墳も、何しろ變轉の激しい今日、あるいは取毀されて田となり畑となり或は道路となつたりして、今日比較的完全な姿をとゞめているのは恐らくこの

若野古墳位ではないかと思う。

#### 4

若野古墳の発掘されたのは昭和三年(一九二八年)四月上旬であつて、土地の所有者である小林源楠翁が蜜柑畑に開墾すべく鋤をふるつていと、巨大な石にぶつかつた。即ち古墳の天井石であつた。試にこの巨石を取り除いてみるとスッポリと洞屈洞窟になつていた。所謂玄室である、そこで開墾を中止して警察署に報告した。警察からは署長が來たり、時を経て縣史蹟調査委員である芝口先生や故森彦太郎先生も調査された結果、昭和四年に縣告示で史蹟の指定があつた。この時の出土品は十數個の、土器、太刀、やじり、銅環等であるが、古墳にして史蹟の指定をうけたものはこの他にも澤山ある。また若野古墳が特に重要なものでもない。このことは森彦太郎先生の報告文にも「周壁の用材はありふれた砂岩にしてきり方、積み方は内原村にてみたる如く古拙簡粗を極む」とあるによつて明らかである。

#### 5

しかし全國的に有名な海草郡西和佐村岩橋の千塚でさえ開墾して藪でも植えようというせち辛い世の中である。金にならぬものなら和歌山城のお濠でもうめてしまえという時代である。獨力をもつてこの文化遺材を保護してきた小林翁はたしかに具眼の士と稱すべきである。縣の指定史蹟といへば聞こえはよいが、おそらく指定のしつ放しで、その後は手入れ一つしてはいない。所有者にとつても、畠の眞中に變な土饅頭を残しておいたのでは耕作の邪魔にもなるうかと思う。小林翁は田舎のたゞの老翁である、別段學問も考古學の教養もある人ではない。しかし直感的にこれは學術上貴重なものであると感じたのに相違ない。そして利害をこえて今日まで大切に保護して來たのである。この精神には感謝しなければならぬ。昔から「百聞は一見に如かず」というが、幾ら本で讀んだり寫眞をみたりしても一見するに越したことはない。先生が教室で口を酸っぱくして古墳の話をして子供頭にはピツタリ來ない。こんな時に一寸足を運んで若野まで行けば、古墳は殆んど築造當時のまゝ千何百年かの歴史を語つていたのである。郡内の古墳がとう／＼たる時の流れに荒廢してゆく時、若野古墳は益々その重要性を加え、これを護り傳えた小林翁の功績は年と共に輝くであらう。

#### 6

小林翁は明治十年(一八七七年)の生れというから今年七十余才、しかも尚かくしやくたる元氣である。史上未曾有といわれる明治二十二年の大洪水にも十三の時遭遇した。若い時分からずと農耕に従事して、何かと村の

面倒もみてきた。だから過去半世紀にわたる村の出来事は誰よりもよく知っている。私は去年であったか  
或る雨の日の小半日を、水害の話や「若狭の八百比丘尼」の話など面白く聞かしてもらった。二十二年の  
水害を實地に体験した人も年々、に少なくなつてゆく。切に翁の健康を祈る。(終り)

## 日高珍姓録

「紀州新聞」昭和二十六年一月一・二日掲載

正月早々七面倒な小理屈も気がきかぬ話だから、少しのんびりしたことを書いて見る。  
廣い世間には變つた姓や名前の人があるものだが、今日は一つ日高珍姓録の一頁ともいふべきものを紹  
介したい。蓋しこれは系統だつた研究でも論文でもなく、たゞ心に思いうかぶまゝを漫然と書き流したも  
のにすぎぬことを、最初にお断りし、併せて名前を無断借用した方々にその非禮を深くお詫び申し上げる。

一、鹿食ライ。松原村濱の瀬、あわてゝ讀むとシカクライと訓む。ライという名前も面白いが鹿食は更  
に珍しい。これについて同村田端憲之助氏の説によるとこうである。

一帯濱の瀬という土地は漁場である関係から、海上の往來も繁く、従つて海を超えて移  
住する家や、移住して來た家かなりある。この鹿食ライさんの 畠も移住者の一人であ  
つて、四國はたしか徳島縣の鹿食郡から移つて來たものであり、即ち出身地の郡名を取  
つて姓としたものであると。

二、闔々。

闔

同じく松原村濱の瀬、これはドンドと訓む。随分難しい字で、私のもっている三、四種  
の漢和字典にはテンという訓み方はあるがドンという訓みはみつからなかつた。或は宛  
字かも知れぬ。ドンドとは何のことか、正月十五日に注連飾や松竹を焼くのを普通ドン  
ドといふ、轉じて焚火のこともドンドというようであるが、或はそした濱で焚火でもし  
た場所だからドンドといふ、以て、家の姓としたものでないか。  
田端氏の説に曰く、渡り鳥の一種にドンドというのがある、海邊だから此の鳥の群集し  
た遠くの場所からでも來たものではなからうかと。

三、灰。

丹生村、何故灰を姓としたのかは知らぬが、とに角これも珍しい姓である。灰氏の娘さん女學校に學ぶ、先生が「灰さん」と呼ぶ、すかさず「ハイッ」と答える。他の生徒クスく笑う。一寸ユーモラスな光景ではないか。

四、團栗。

丹生村、ダングリと訓む。恐らく地形から。即ち團栗林の側にでも家があつたものと思うが詳しいことは知らず。

五、番留平吉。

矢田村大字入野、バンドメと訓む。その家のある所、大字入野最終の番地であるから。即ち番地の止りだから番留という、とは番留さんの直話である。

六、地藏尊。

湯川村、ヂゾウは姓タカシは名。地藏は野口村にもあり、塩屋村にもあり格別珍しいとは思わぬが、姓と名を組合せて地藏尊とすると、地藏さんを連想させ甚だユーモラスになる。(これは湯川校長寺西義一氏に聞いた話)。

七、乾風秀太郎。

湯川村財部、高等學校の古い書記さんである。これはアナゼ、ヒデタロウと讀む。乾風と書いてアナゼと訓むのは随分難しい、大言海をみると、ちゃんと載っている。さて、アナゼの由來であるが、乾風さんの説によると

昔藩 田南龍公、由良村網代の別荘に海路御來遊のことがあつた。このとき水先案内を承つたのが乾風さんの 田であり、南龍公から「水先案内、今日の風は何という風か？」と御尋ねあり、水先案内畏つて「本日（今日）の風は乾風と申します」と御答え申し上た。南龍公御感斜ならず「以後その方の姓は乾風と改めるがよからう」と仰せられ、以後乾風を以て姓とした。

というのである。さてアナゼというのはどのような風か。一般に東風を(コチ)、南風を(マゼ)、西南風を(ヤマゼ)、北東風を(ワイタ)、西北風を(アナゼ)という。即ち十二支で乾の方から吹くからである。尚、乾風さんは現在湯川村財部に居住であるが、もとは由良村網代にあつて秀太郎さんの代に轉住して來たものであると。

八、兼平行海。

松原村吉原、松見寺住職、南紀郷土學會の熱心な會員である。十二月十六日雨の中を會員一同で田井常福寺へ、同寺秘蔵の善妙寺焼き、籠目の花生を拜見に行く途すがら、カネヒラという姓が余り珍しいので、其故事來歴を尋ねてみた。「兼平という姓は全國でも三十數家しかない、そもく、田は今井四郎兼平（一八三三年）に發する。今井四郎兼平というのは、悲運の驍將木曾冠者義仲の四天王の一人で、壽永二年琵琶湖畔粟津に敗るゝや、主の後

を追うた勇将であるが、兼平に三人の子あり、この時一人は木曾に遁れ、一人は但馬に奔り、共に姓を兼平と改めた。(一人は行方を知らず)。即ち松見寺兼平氏は但馬の流れであると。成程説明を聞くと、兼平という名前のような姓も納得出来る。

この他矢田村に小猿あり、道余あり。丹生村に似呂目氏あり、龍神村に釣竿というのもあると聞いたが、下手な長談議でいつまで書いても、ふん切りがつかぬから、こゝらでペンを擱く。

## 明治初年の世相の一斑

昭和六十二年一九八七年五月二十二日稿

明治四年二月(一八七一)、政府は戸籍法を公布し、翌五年二月から之を実施したことは先に書いた。何しろ其れまで一般村人たちは苗字がなかっただけに、俄に苗字を名乗るとなると、いろいろと混乱があったらしく、郡内のある村では、庄屋が一軒一軒の苗字をつけることになったが、庄屋さんも村中の家々の姓を考ええることは大変で、困りはてたあげく「エイめんどうなり」と、大坂城、夏の合戦か冬の陣に参加した勇将の姓を思い出して、小西・加藤・木村などの姓をそのまま村の家々にあてはめたという珍談も残っている。

この時、新しく名乗った姓のおおくは、その家の位置する地形などによっているようである。例えば山の下の家は山下、川の側の家は川端、寺の前の家は寺前、溝の側なら溝端のごときである。

美浜町浜の瀬に昭和二十年代まで、鹿食と書いて、「ししくい」と呼ぶお内があった。随分めずらしいし、難しい読み方の姓であるが、これは海をへだてた徳島県に鹿食郡がある。浜の瀬は割合新しく成立した村で、住民の多くは漁業と海上運輸を転じたから、他地域との交流も頻繁であった。鹿食家も徳島県鹿食郡から浜の瀬に移住されたもので、戸籍編成にあたり、郷里に思いを馳せ、その姓としたものである。

また川辺町江川に左留間姓がある。他所では余り聞かぬ姓であるが、江川の小字名に「猿間」がある。同家はこの字に位置しているので、この地名を姓とし「猿間」を「左留間」に文字をかえたのである。こ

のように家の位置する小字名を姓としたものは類いは他にも見られる。

そのほか江川に「灰」と云う珍しい姓がある。どうして「灰」を姓としたかは聞いていないが、灰さんの娘が戦前、高等女学校の生徒であった時、先生が「灰さん」とよぶと、生徒は、すかさず「ハイッ」と答える度に、教室内の生徒はクスクスと小声で笑ったという話を、当時、日高高等女学校教頭であった芝口常楠先生からお聞きしたことがある。

次に御坊市熊野に、団栗(だんぐり)姓がある。恐らく団栗林の近くのお内であろうと思われる。

わが国の姓の中で最も多いのは佐藤さんであると、いつか何かで読んだか聞いたかしたことがある。しかし日高地方に限って云えば、湯川・玉置姓がかなり多いように思う。これは云うまでもなく中世、日高地方を本拠として紀南に勢力をふるっていた、亀山城主の湯川氏と、手取城主の玉置に由来するもので、湯川・玉置両氏が天正十三年(一五八五)、秀吉軍の紀州攻略によって、昔日の勢力を失ない、その家臣団も他国に移ったり離散したが、そのまま日高にのこって帰農し、ひそかに湯川・玉置それぞれの家臣であったことを誇りとしていたのが、明治五年(一八七二年)の戸籍編成の際、公然と名乗りをあげた物である。もつともこの中には、湯川・玉置と云えば通りがよいための、関係はないがこれら二つの姓に便乗した組もあったに違いない。

また、湯川姓が御坊市を中心に印南・日高・由良町と比較的海岸部に多いし、玉置氏が川辺町和佐を中心に中津・美山・龍神に集中しているのは、往年の所領関係を示すものと云えよう。

(一九八七年)  
昭和六二・五・二二稿

## お願い

「紀州新聞」昭和二十六年一月十九日掲載

### 1

(一四六九)日高郡誌を執って宗教誌をひもとくごとに不思議に思うのは、郡内眞宗寺院の大半がその草創を(一七五七)文明年間蓮如上人熊野巡錫の砌、上人の親教に歸依したによるとしてのことである。蓮如果たして熊野に詣りしや否、蓮如は一体日高へ来たことがあるのか。これは私の久しく疑問とする所であった。

## 2

然るに昨夏ふとした機縁から由良町阿戸の人、濱上楠松先生が（氏は郡教育界の大先輩にて、目下故山に悠々余生をおくられている）郷土關係の古い新聞紙を多数整理保存されておると聞き、數回にわたりこれを借覽したところ、この中に故森先生の蓮如熊野巡錫について詳しい考證があつた。これは當時の紀南新聞に投稿されたものであつて、博引旁搜、苦難に充ちた蓮如の生涯をはじめ、日高における戦國、土豪の動き、湯川家の盛衰を語り、日高眞宗興隆を説きつゝ、蓮師來熊を考證したもので、實に興味深き雄編である。切抜きには發表年月日の記載がもれているのではつきりとは言えぬが、恐らく大正の末年から昭和七、八年の間に前後十數回にわたり連載されたものと推測される。

## 3

然し残念なことには實に残念千万にも、所々散逸しているのである。まづ冒頭の第一回が欠けている、次いで第十一回、第十二回、第十三回と欠けている。また第十五回以降がないのであつて誠に遺憾の上もないのである。今日これだけのものを書くとすれば、夥しい資料と多大の日時を要する、しかも私共がさかとんぼになつても遂に書き得ないのである。そこで私は廣く全讀者諸君にお願いする。誰かこの新聞を持つてゐる方はないであろうかと。

## 4

これも昨年の夏のことであつたが、森先生に南部町要覽の著があることを知つて、久しくこれを求めたが中々見當たらなかつたところ、白崎町役場で何かの話のついでに、しゃべつた折岩崎村長さんが、役場の戸棚から探し出してくれたという例もある。世の中はせまいようで案外廣い。誰かその當時の紀南新聞を保存している人がないとは限らぬ。ことに郷土史家として令名のあつた森先生の投稿である。誰かの手に保存されてはいないか、どこかで見つかつたら新聞社へご連絡を願いたい、切にお願いをする次第です。

# 森彦太郎先生遺文集

「紀州新聞」昭和二十六年二月十日掲載

夏目漱石という男は口の悪い男で、「左千夫は愚かなやつで、子規ばかりありがたがって云々」と何かに書いてあったが、私も余り森先生を担ぎ出すと、そこいらから「よい加減にしろ」と叱言が出そうな氣もするのであるが、今日は森先生の遺文について書いて見る。森先生は人も知るわが郷土研究の最高權威で、大著「日高郡誌」をはじめ幾多の名著を遺されたのであるが、一体に筆まめな方であったので、梢雨と号した少年時から折にふれ、機に臨んで新聞や雑誌に發表された文章はおびただしい量に上る。しかも、その一つ一つが貴重な研究の結實で、私どものように郷土史を志すものにとって必讀の文字である。

## 2

かように貴重な先生の遺文も一度發表されたきりで、生前とうく<sup>(上様)</sup>上されることなく終つたため、すっかり散逸して今日これを求めることは甚だ困難である。私はかねがねこれを残念に思っていたが、昨年夏妙な因縁から由良町阿戸の濱上楠松翁が、これを丹念に整理保存されていることを知り、飛びたつ思いでお借りし、仕事のひまぐにすっかり筆寫することを得た。私は字が下手だし時間も乏しく、いそぎく寫したため、幾分妙なものになったが、それでも原稿用紙にすると三百枚近い大冊となった。今その内容の一斑を紹介し世の同好者の参考に資したい。

## 3

一、「南紀伊は一揆の國」これは題名が示す通り、鎌倉時代以降わが郷土に發生した一揆の顛末を記したもので、日高郡誌にも詳述されているが、發表の舞台が紀南新聞という一般人相手のものであった關係上極めて解りやすく通俗的に書かれている。まづ全編を十二章にわかち冒頭「人國記」として、人國記に書かれた紀州人の氣質風俗から説きおこし、文治二年<sup>(一一八六年)</sup>の由良一揆から南北朝頃の上郷一揆と筆をすゝめ、明治廿年<sup>(一八八七年)</sup>の南日高の小訶に及んでいる。

二、「紀南莊村遺聞」これも紀南新聞に發表されたもので、題名の通り日高各村の特異な出來事や人物産物を書かれてあり、前記「南紀伊は一揆の國」よりもさらに大衆的で面白い。松原村吉原の松見寺が郡内で珍しい天台宗であるが、どうしてこの寺が天台宗なのかの由來もこれを讀んではじめて知った。またこのうちの一編「紀藩の斷延」で徳川さんも随分ひどいことをやっているナと思ひ。『日高醫界の先覺羽山大學』を讀んでは日高にもなかく偉い醫師があつたものだと、先人の跡をしのだ。とにかくこれは全編二十五章の長編である。

三、「鐵眼道光禪師」有名な一切經刻藏の鐵眼の評傳である。鐵眼が一切經の刻藏者であることは知っていたが、この有名な鐵眼が紀州のしかも南部町勝專寺の養子となつて、一時この寺にいたことは全くぼんやりした話であるが、今の今まで知らなかった。鐵眼二十六才求道の志にもえて攝津國富田、普門寺に入るや勝專寺志場氏の娘、戀々の情にたえず安珍を追う清姫の如く、遠く山城國万福寺までせまり、その袂をとらえてはなさず、遂に南部まで引っぱつてきたところなど、實に興味深い讀物である。

四、「一村一人、日高崎人傳」これは前記「紀南莊村遺聞」と同系に属し、日高の崎人五十八名を紹介したものである。よくこれだけいろ／＼な人間を調べあげたものと感心する。ど的一篇をとつても中學校あたりの計會科の好教材であらう。

五、「日高平野の小字名雜考」昭和八年十月、雜誌南紀藝術第九号所載もの、原本は芝口先生が所藏せられてゐる。地名ごとに小字名の研究は郷土研究の根本要件であつて、誰か篤學の士が「地名を中心とした日高の文化史」とでもいうべきものを書いてくれないかななど、かねがね思つてゐるのであるが、こゝでも先生は卓越した眼光をもつて、日高平野の小字名を縦横無盡に比較考證し、私ども後進は益すること大きい。

六、「石山法難前後の本願寺と紀州日高地方及び湯川氏」本集第一の雄篇である。三章から成り、第一章「蓮如上人熊野參詣説に關する考察」に於て、まづ苦難に充ちた蓮如の生い立ちから筆をおこし、(四六九、八七年)文明年間に蓮如が紀南を巡錫したというが、實際蓮如は日高へ來たことがあるのかを詳述し、第二章「蓮如上人と紀州の門徒」では、當時の日高の豪族湯川一門と本願寺が如何にして結ばれたかを語り、さらに筆を進めて石山本願寺の草創、蓮如の晩年にいたつてゐる。第三篇「日高別院の成立に關する考察」においては、法嗣證如を中心とする紀州眞宗の興隆、背景として細川・三好の確執、この乱世の中に日高御坊が草創される經路を豊富な資料を縦横に驅使して論斷、まことに史家森彦太郎面目躍如たる力作である。

これも紀南新聞に寄稿されたもので、濱上翁が保存されていたのは、その切抜きである。しかし惜しいことには、この中の三、四が散逸してゐた。私はそれを遺憾に思い、今年一月本紙上にそのことを書いた。ところが有難いことには右の投稿が發表されて翌日、松原村吉原の煙草屋さん田端豊太郎氏が、「あなたの探しているのはこれではありませんか」と。届けてくれたのを見ると、まさしくそれであつて、私の喜びは例えようもなかつた。余談であるが付記しておく。

七、「徳本上人と白井久藏翁」、これは志賀村青年會員に講演した原稿である。志賀村が生んだ二偉材、徳本と白井久藏、二人の歩んだ道は、一人は念佛の行者であり、一人は徳川季世の土木事業家で、まるで北極と南極ほど異なる。しかもこの二人に共通した或物、すなわち一刀三禮、一針三禮の精神、手っとり早くいえば、一生懸命の心構え、これを志賀村青年男女に講演したもので、この講演は今日のアブレ男女に聴きたいものである。

八、「小熊寶篋印塔の考證」、これは昭和六年八月十五日矢田小學校で講演された要点を、私が筆録していたもので、今回本集をまとめるに臨んで加えたものである。「小熊寶篋印塔の考證」というものゝ單なる考證におわることなく、この間鷲峯の開闢法燈國師の人となり語り、孝心を説き傾聴すべき幾多の点を合む。

九、「故興國寺長老雲巖老師を悼む」興國寺長老雲巖老師の靈前に供えた弔詞である。そんな性質のもので、無論新聞へも雑誌へも發表されたものではない。前に書いた濱上翁が先生自筆のものを大切に保存しておられた。しかし實に名文でもあり、また言々句々聲涙ともに下る讀あつて、或は老師生前の情誼をしのび、或は老師の過去を語り、興國寺明治以來の衰亡の歴史を説き、私どもにとっては逸すべらざる一文と思うたので特に加えた。

#### 4

以上森彦太郎先生遺文集の概略を紹介し得たかと思うが、もちろん先生の遺文はこれにとゞまるものではない。また題名も私が仮につけたものであつて、今後發見するにしたがつて、更に第二集、第三集と追加して行く考えである。

先生の郷土史家としての地位に就ては、世すでに定評あり、今さら私どもが何をか加えんやであるが、これ程の人の遺文が散逸に任せられているのは實におしい。日高の郷土史は森先生をふみこえるところにある。しかも私共にとっては踏み越えるところではない。その足許にいたるも容易の業でない。そんなことは兎も角として、何とかこれ等の遺文集を世に出す方法はないものか。特需景氣の成金どもは、一夜の歡に千金を投じて悔いぬが、こんな事にはビタ一文も出さぬ。明治の文豪森鷗外に「吾をして九州の富者たらしめば」という隨筆があるが、私をして日高の富者たらしめば、先づ第一に森彦太郎先生遺文集を上梓せんものを

# 水車今昔譚

「紀州新聞」昭和二十六年三月二十五日掲載

## 1

「奉公するなら塩屋か御坊か、たゞし小熊の油屋か」

これは徳川季世から明治へかけて日高地力でうたわれた子守唄であつて、死んだ私の 訃母なども時々この唄を口ずさんでいた。蓋し御坊はいうまでもなく當時日高に於ける花の都であり、塩屋は又熊野街道に臨む繁榮の村で、娘っ子達あこがれの地であつた。しからば子守唄まで歌われた小熊の油屋とはどんな家か、

油屋Ⅱ宮井姓Ⅱでは先 訃は有田の人というが、よくわからない。家、代々精米（當時の搗屋）と油絞りを行い、米と油を商賣する富商であつて、男衆、女中も數多く使つていた。朋輩多ければ自然奉公人達も氣がらくであり、又家柄がどことなくゆつたりして、住心地がよかつに違いない。さてこそ「……たゞし小熊の油屋か」が歌われたわけである。

## 2

さて、この油屋の當主が去年の夏色んな反古を整理している中に、面白い書付を發見した。曰く

### 一、水車絞油屋

小熊村 清兵衛 印

右者私より五代前凡百三十五年以前

先 訃五郎右衛門と申者元（二六八八、一七〇四）禄年中

水車油屋商賣初代々仕來申候御願濟

之儀年久敷儀に付年号相分り不申候

右之通相調書付差上申候

已上

小熊村庄屋 勇吉 印

寅七月

瀬戸佐太夫殿

文化十五<sup>(一八八八年)</sup>右の七月出し候ひかえというのである。

### 3

この油屋の水車というのは、若野井堰の水流を六郷井堰の流れに放水する落差を利用したものであって、若野井堰の竣工は寛永九年<sup>(一八四八年)</sup>であるから、元禄年中に水車を開業したとするならば、若野井堰竣成から七十年位経てからのことにあたり、今昭和二十六年<sup>(一九五一年)</sup>から数えておよそ二百六十年の昔になる。六郷井堰の水流を利用して作られた水車は、小熊に一ヶ所・小松原に一ヶ所・西財部に一ヶ所と、合計五ヶ所程あったが、その規模においては到底、この油屋に及ばない。現在ではこの水車も新式のタービンにかわっているが、私共が子供時代には直径二十尺余もある巨大木製の水車が、晝夜を分たず、いそがしく廻っていた。何でも臼の總數四十個、一晝夜の精米量二十俵というから、當時としては素晴らしい工業力といわばならぬ。しかも元禄年中という古い昔に、これだけの物を作り上げた宮井氏の 畝もたしかに凡物ではなかった。私はこの一晝夜の精米量二十俵が、當時の日高酒の發達に相當大きな影響を與えているに違いないと思うが、如何であろうか。敗戦後盛んに庶民史料ということを聞くが、これらも確かに庶民生活資料として、面白いと思うので、一寸書付けた次第である。

(終)

## 失われた郷土誌

「紀州新聞」昭和二十六年四月二十日掲載

### 1

「失われた青春」とでも題すれば、映画の主題か華やかな戀愛小説の様で面白いのであるが、そんな器用な真似は出来そうもないので、相變らず古臭いことを書いてみる。

### 2

日高郡には御承知の森先生の名著「日高郡誌」のあることは誰でも知っているが、個々の村々で纏った所謂村誌のようなものはないかと、先年から調べてみたところ探せば案外あるもので、現在まで私の見ただけでも

- 一、丹生村郷土誌 小川仲記著 未完 大正三年(一九一七年)
  - 二、白崎村郷土誌 同 大正四年
  - 三、切目川村郷土誌 同 大正五年
  - 四、比井崎村郷土誌 同 大正六年
  - 五、藤田村郷土誌 天野稻楠(一九〇七年) 明治四十年
  - 六、湯川村郷土誌草稿 著者未詳 明治四十五年
  - 七、南部町要覧 森彦太郎著 大正十四年(一九三〇年)
  - 八、稻原村村勢一斑 平野某著 昭和五年
  - 九、野口村郷土誌 野口小學校編 昭和七年
  - 十、志賀村郷土誌 志賀小學校編 昭和九年
  - 十一、名田村誌 濱田啓次郎著 昭和十一年
  - 十二、三尾郷土讀本 崎山男著、活字本 昭和十一年
  - 十三、城西郷土誌 城西小學校編 膳寫版印刷 昭和十二年
- と以上十指に余る状態である。

### 3

今その各誌について詳論は控えるが、何れも特色豊かなおもしろいものであって、「日高郡誌」がその性質上取り上げなかつた点にも或程度觸れている。

一例をあげると藤田村郷土誌の同村製紙事業の沿革、志賀村郷土誌の即生寺（谷口）鏡の傳説、稻原村勢一班の瀧法寺の由緒等々であつて、この他たしかにあるはずのもで、未見のものに塩屋村誌と由良村誌がある。兩誌とも日高郡誌にも屢々引用されている位であるし、兩村とも古い歴史のある土地柄だけに、きつと面白いものに違いないと思うので、大分探してみたがどうも所在がはつきりしない。殊に塩屋村誌の如きは、もと同村公民館長塩路吉太郎氏も、たしかに見た記憶があるというのであるがようとして分らぬ。或は戦争のドサクサに何處かへ行つてしまつたものだろうが、何れにしても先人苦心の結晶をむぎくくと失つてしまふのは勿体ない話である。私が始終こんなことを考へている矢先き、某氏が塩屋村誌を手にいれたと聞いたので早速一見したところ、それは昭和何年かに塩屋小學校が編纂した村誌であつて、私の求めていたものとは似ても似つ杜撰な代物で、ひどくがっかりした。何とか同村文化關係の方々で本

物の塩屋村誌をさがしてほしいものである。

#### 4

新聞紙の報ずるところによると愈々講和條約も締結されるというからは、國を擧げて色々の記念事業が行われるであろうが、その一つとして各村の郷土誌の編纂なども確かに有意義な企である事と思う。何となれば仮令將來日本がどのような國になろうとも、私達の日本を愛する氣持にはいささかの變りもないし、日本を愛することは取りも直さず、私達を育てた村や町をよく理解し愛することに外ならないからである。

(終)

本文を投稿した昭和二十六年四月時点では、前記旧十三村の郷土誌を書写しているが、その後

「御坊由來記・旧御坊村誌」・「衣奈村郷土誌」・「由良村郷土誌」・「上山路村誌」

「和田村郷土史讀本」・「塩屋村郷土誌」以上六村の郷土誌を書写している。

また、ネットの日本の古本屋で日高地方の郷土誌を探していると、東京の古書店に「塩屋村郷土誌」があり早速購入した。

平成二十四(二〇一二年)三月十一日(土)

章博付記

## 瀧法寺行

「紀州新聞」昭和二十六年五月二十五・六・七日掲載

#### 1

情死した有島武部は「もう一度秋の空をみて死にたい」と云ったときくが、水のように澄んだ秋空もいゝが、「あらたふと青葉の日の光り」の今日の新緑の美しさは何物にもまさる。働かねば食えぬとわかつていながら、こうよいお天氣が續くと、辛氣臭い事務所に座っている氣がしない。即ち新憲法發布記念日の五月三日、芝口先生のお供をして稻原村の古さつ大寶山、瀧法寺に遊ぶ。

瀧法寺は南陽山、南龍院とも号するが、一般には印南原のお瀧さんで通っている。稻原村郷土誌によると

「古義眞言宗山階派に属し、紀伊續風土記載するところの舊寺域五町三十八間、偶々古傳によるに一千有余年の古さつにして、往昔は隆昌を極め郡内神宮寺の本山として本郡川上莊山野村神光山照禪寺・同莊江川村神宮寺・印南町宇杉神宮寺・山田莊森岡村別當神宮寺等の末寺を有し、伽藍その他莊麗なりしも天正の兵火に堂宇什寶等烏有に歸したり、今庫裡・觀音堂・鐘樓のみ存す。」  
と中々やかましいのであるが、果たして然るか？

第一瀧法寺にかぎらず縣下の 寺、何彼という<sup>二</sup>と直ぐ天正の兵火にかゝりと、分からぬことはすべて天正の兵火に歸しているが、元來湯川直春は秀吉軍來るや直ちに龜山城を焼いて牟婁に奔つていて、日高では一戦も交えておらぬ。如何に乱世とはいへ無抵抗撤収をしているのに、無闇に寺や 寺を焼いたとは思えぬ。とにかくそんな点等も分るものなら多少調べてみたい、というのがその日の私共の目的でもあった。

## 2

道中、ドクトル巽氏のお宅を訪ねる。ドクトル巽は大和の人、戦時中から稻原に來任されているのであるが、考古學の造詣深く、また奇峽と号し俳誌「多雀」を主さいし、寫眞もやれば鉄砲も撃つという多藝多能の士であつて、郷土學會でも二、三回お目にかゝつた關係もあり、今日は特に私どものために先達をしてやろうとのことである。

一

私どもはこゝで少憩して、御所蔵の古瓦、土器、石器、化石を拜見する。一体日高の土地は古墳が多く、土器の出土はかなあるが石器の出土例は極めて乏しい（たしか二、三例）。従つて私などは書物や寫眞ではよく承知しているものゝ實物を手にとるのは始めてといつてよく、それがまた頗る優秀なものであつた。石斧、石包丁、石槍、やじり等々、中見事なもので、新石器時代もずっと後期に屬するものである。何しろ古墳の本場大和を故郷として、有名な唐古遺跡の發掘にも參加したというから相當なものである。

## 3

ドクトル巽邸を辞してぶらりくくと瀧法寺へ向かう。この日文字通り薫風山野に充ち、初夏の陽に映える新緑の美しさはいふべくもない。

瀧の口松下煙草店の前に苔むした一基の五輪塔あり、芝口先生一見して「徳川初期のものだろうナ」といわれたが、苔を落すと果たして寛文二年三月十一日の文字が出てきた。今から數えて二百九十年の昔で、

紀州は第一代南龍公治世下であったのだから話は大分古い。もとこのあたりに塚あり、今も塚本と地名に遺れる由。何れはこの付近の勢力者の墓碑でもあろうが、惜しむらくは碑面摩滅してその他の文字は分りかねる。とにかく英雄も勢力者もこうなつては誠に「諸行無常」である。

#### 4

いよく瀧法寺である。

稻原村郷土誌は更に曰く――

「縣道印南、寒川線を瀧の口にて分れ、印南、切目川線を東に行くこと半町、さらに南に分れて約一町にして山麓に至る。鬱蒼たる老樹道をはさみ、碧苔深き間、溪流を右にながめつゝ峻坂を上ること數町にして瀧法寺に達す」

中々名調子であるが現代はこの老樹大半伐られ、昔の幽すいさはしのぶべくもないが、それでも雑木の若葉滴るばかりで樹間に春蟬鳴いてなかく風流である。

ドクトル巽はこの峻坂を案内して傍の墓地に至る。墓地とは名のみ荒廢した樹下に五輪塔、寶篋印塔が散乱している。芝口先生、何れも室町、恐らく鎌倉期を上るまいとの事であつたが、ドクトル巽は奇特な人で、これらの墓石もあちらの松の根元、此方の叢の中からと探してきたものらしい。墓地を辞するともう庫裡のいらかが樹間にみえる。かねて今回の行をお知らせしておいたので、住職西山性運師は早速庫裡へ通された。この庫裡は大正十二年に改築されたもので、御本尊、虚空藏菩薩を安置し奉る。虚空藏菩薩は智恵を引る御本尊で、その慈悲、智恵の廣大なこと恰も虚空の如しの意によるものであるが、虚空藏菩薩を御本尊とするところは一寸珍しいという。庫裡の立つところから一段高い所が昔観音堂のあつたところ、今でも小さな観音堂と鐘樓がある。

「観音堂は元三間四面なりしも、慶應二年(一八六六年)舊九月七日夜の大風雨にて堂宇崩壊し、翌年仮堂を設く、十一面観音を安置せり。今舊堂にありし四天王のうち毘沙門天、多聞天二尊の首のみを現在せり（現代はこれに廣目天を加え三尊あり、首のみあるは堂宇倒壊の節破損せるためなり）。

現今の庫裡は大正十二年に改築せしものなり。慶安二年(一六四九年)八月（二九三年前）高野金剛三昧院の円海法印が當山を中興し、青瀧權現（現代伊奈明神）および辨才天を高野山より勸請して鎮座したり。往古南龍公熊野巡遊の途次、暫し當山に駕を止めらる、大にこの地の風光を賞せられ、南龍院の号は即ち公より賜はりたりといふ傳う。山内に山神、稻荷神、金比羅神、秋葉神、弁天神あり」

私共はこの三尊の御首も拜観したが、何れも古拙なものであつて鎌倉期頃の作と覺しい。何といつても南龍公は英遇の君主であつたが、今まで土豪割據の地に初めて入國したものであるから、土豪の懐柔、民心の収<sub>取</sub>らんには細心の注意を拂い、領内の巡<sub>巡</sub>なども盛に行われたものとみえ、各地に南龍公御命名の池、御下賜の姓というのがこのこつてゐるが、南龍公といえどもそう年中領内を歩き廻つてたわけでもであるまいから、思うにこれは恰も弘法大師の井戸掘傳説と同じく、公の盛名を慕うものや、由緒を尊ぶ坊さんたちが勝手にデッチ上げたものであるう。第一海岸線熊野往還よりかなり距てるこの僻村にまで、わざわざたち寄つたなど一寸おかしい。しかしこの寺が

南龍院殿二品前亞こう永天見大居士

と記した南龍公の立派な位牌の存するところを見ると、生前、公より何等かの庇護をうけたものとみえる。以上ざつと觀察したところによると、里傳の如く古くより何か小堂の如きものがあつたであろう。それは境内を流れる溪流（所謂御瀧）が修験者の修行場として、極めて好適であるところから、何時頃か左様なものが来りて水行でもやったものであるう。寺院らしきものとして存在し始めたのは、佛僧や古碑、境内の樹木から推測して、大体鎌倉位のものではあるいか？

この点徴すべき文献が何一つないから何ともいゝかねるが、最近、ドクトル巽が境内の杉の根元から一個の古瓦片を掘り出したが、斯様なものもつと出て來れば、もう少しハッキリするに違いない。ドクトル巽は唐古遺跡發掘の腕によりをかけて大いにやってみると語つたがその成功を尋る。

6

とまれ、稲原村郷土誌の

「老樹鬱蒼たる間瀑布あり、落下十丈余、古來名付けて稻瀧という。四時水の絶ゆることなく、就中雨後の如きは飛泉奔流巖峽を劈き水雷の如く、樹らい之に和し清冷言うべからず。三伏の炎暑も忘るゝに至る。傍に<sub>泮</sub>殿を榮む、伊奈瀧と稀す。周圍山皆緑苔を生じ、老樹鬱蒼として溪流の水聲こんくとしてかん底<sub>底</sub>に鳴り、幽<sub>幽</sub>すいなる風光人をして行路の勞を忘れしむ。仙境というべし」

も決して誇張の言ではない。私は御坊を距る三里の、しかも交通至便の地に斯くの如き靜寂境のあることを有難く思う。その規模においてはもとより攝津箕面の瀧には遠く及ばぬが、仙味においてははるかに勝る。私は眞妻村川又觀音の瀧、丹生村大瀧川の瀧、當瀧法寺の瀧を日高の三瀧と思うがどんなものであるか。廣く日高人士の清遊をお奨めする。

（おわり）

# 御坊町の諸氏よ

「紀州新聞」昭和二十六年六月八日掲載

## 1

今時分こんなことを書くとは封建思想だとか、反動的だとかいわれるかも知れないが、戦災で焼けた和歌山城は美しい城であった。あれは紀州公三百年の権力の象徴であり、人民壓制の本據であったわけであるが、紀勢西線に乗って紀三井寺近くになると車窓はるかに鬱蒼たる樹林の間に白亜の天守閣が見えられて

“城一つ埋めのこして青葉かな”

で、そんな野暮くさい考えは飛んでしまつて、あゝ和歌山へ来たなと何時も懐かしんだものであった。

それと同じように私は毎朝通勤の途次、船津街道も大分下つて出島あたりまで来て、打ちつゞく御坊の町並みに一際ぬきんでた本願寺日高別院の大屋根をながめることにあゝ御坊だなと思う。

## 2

その町名が示すように御坊町今日の繁榮は本願寺別院の菌浦創建にはじまるといつてよい。日高平野のほゞ中央に位し日高川あり、交通に恵まれ郡の行政機関も集中しており工場もあつて、御坊は一口に門前町とは云いきれないが、

“御坊東町ほゞきはいらぬ御堂まいりの裾ではく”

と古い俚謡にもある通り、本願寺日高別院が御坊町のために果たした役割は大きい。實際御坊町で大きくなった人達で御堂の境内や廣い縁側で遊んだ記憶を持たぬ人は少ないであろう。それ程町民に親しまれてきた御堂さんである。

## 3

このように、御坊町の象徴といふべき御堂さんの現状はどうであろうか。昨年九月のジェーン台風で傷んだまゝになつていないか。瓦が飛んで屋根土がむき出しになつて、見るも痛ましい姿ではないか。あのまま打ちすてゝおけば今年の台風で被害は一層大きなものになるに違いない。各地の國寶が賣り出さ

れたり、國寶級の建築物も荒廢したまゝになつていると聞く今日、たかゞ御堂さんの屋根位のことゝ云えばそれまでの話であるが、御坊町民にとつては大切な郷愁の地であり揺籃の地ではないか。何とか修理の方法がないものであろうか。現代の本堂は文政八年三月町の篤信家喜多忠右衛門・津本所左衛門が粉骨精進して再建したものである。どこかに昭和の喜多忠右衛門・津本所左衛門は居ないだろうか。それとも

“亡びゆくものなべて美し”

と誰やらの詩にあつたが、自然にまかせてすてゝおくか？私（掛け構い）はかけかまいのない他村の人間だが、氣になるので敢えて町民諸氏に訴える

（おわり）

## 考古資料展を觀て

「紀州新聞」昭和二十六年六月二十九日掲載

### 1

六月二十二日所用があつて和歌山市へ行つた。折から縣立圖書館で考古資料展が開催されていると聞いたので見學した。展示品は大別して石器、土器、古瓦、裝身具の類であつたが、アマチュアの私には實に面白い有益なものであつた。主として本縣内の出土品で、それも和歌山平野と紀の川沿岸、および有田までの物で、有田以南のものは、わづかに田邊市稻成、高山寺貝塚の縄文式土器があるだけであつた。それにして昭和の今日でさえ田舎縣である紀州に何千年かの昔、これだけの文化があつたということは興味深いことであつて、會場に掲げられている遺跡分布圖をながめながら、しばらく懐古の思いにふけたのであつた。

### 2

就中興味深くみたのは、有田郡田殿廢寺跡出土の藤原時代といわれる瓦や、同じく同村眞樂寺のこれも藤原時代の佛像瓦や、宮原村多喜寺の名号瓦であつた。兩寺については私は何も知る所がないから何ともいえないが、とに角これだけの瓦をもつ建築とすれば、相當規模の大きなものに違いないが、有田郡には藤原期に既にこれだけの文化があつた。これに比べ日高郡には残念ながらこれに匹敵するものがない。

大寶年間草創と伝えられる道成寺があるにはあるが、この寺の色んな点がもう一つはつきりしないらしい。日高はヒナカ早い話が田舎の事だとする喜田博士の説も、全く無理からぬ次第である。

### 3

つゞいて石器類を見る。石斧、石包丁、石やじりと、その數まことに無數であつて、採取者の名に大成高等學校あるのが大分あつた。遺跡が近くにあるという關係もあるだろうが、教育も教科書ばかりでなく實地に指導されるということはたしかに必要なことであろう。

もう一つ面白かつたのは、古墳時代の裝身具である。私は年中貧乏ばかりしていて、金にも玉にも全く縁のない男であるが、こゝで金色燦然たるそれも千余年昔の金環や古雅な玉類をみて、又一しきり裝身具を帶た何れは土豪の首長連であらうが、男か女か若いか老人かの身に思いを馳せたのであつた。昭和のハイカラ人は硝子製の首飾りをかけ、メッキの首輪をぶらさげ得々としているが、まことに誰やらの言草ではないが、「天が下に新しきもの一つもなし！」で、千年昔のハイカラ連がちゃんとやつている。しかもこの方はガラスやメッキでなく、正真正銘の玉であり金である。とに角私はこゝで寫眞や圖版でなく、本當の勾玉、管玉、耳環を見たことは大變参考になつた。

### 4

そこで思うことは御坊公民館か南紀郷土學會でもこういう催しをやってみては如何であらうか。もとより日高郡だけではこれ程の点数を集めることは難しかろうと思うが、郷土資料展とでも銘うつて。土器類なら相當あるし、石器も少しはある。更に古文書類まで集めるならば、一通りの体裁は整うかと思う。秋の文化の日あたりでもやれば案外面白いばかりでなく、博物館のない當地のことだから、學生諸君や一般人にも益するところが多かろうと思う。

(終)

## 夏休みを迎えて

「紀州新聞」昭和二十六年七月十四日掲載

|| 先生と學生諸君へ ||

### 1

今年も夏休みが近づいた。私は少年時代病弱であった上、勉強嫌いの怠けもので、中學校も途中でやめてしまったから、夏休みの本當の樂しさを味わずに過した。それでも小學生の時分、教科書から解放され、怖い先生の眼を離れて山や川を遊び廻った樂しさは、三十年後の今でも忘れられない。これは恐らく現代の學生諸君も同じことだと思ふ。

## 2

去年の夏のことであつた。町内の某書店で新刊の立讀をやっていると、二、三人の青年がどやくと入つて来た。「もう夏休みか、先生はいゝな……」、一人は先生らしい。「あゝ毎日退屈で仕方がないから、ゴロく寝てばかりいるよ」。何ということという男であるうか、私は思わずその男を見た。少し誇張して云えば、瞬間体の血が逆流する程の義憤を感じた。私達は日夜仕事に追いまくられている。そして休憩時間を割き、宿直の夜を利用し睡眠時間を削つて、コツくやっているのである。どうせ私共のやることだからロクなことではないのだが、やりたいことは山のようにある。私の机には讀むべくして未だ讀み得ない書籍が絶えず私の怠惰を責めている。學園には夏休みがあつても、社會には夏休みはないのである。

## 3

東洋には昔から「無事は富貴」との言葉がある。私の好きな言葉で、常にこの境地にあこがれながら、實地ではドブ鼠のように走り廻つて、おそらく死ぬまでこういう靜謐な境地に入れそうもないが、「退屈で仕方がない」は正にニヒリズムである。

## 4

夏休みの四十日は短いといえば短い。しかし専心すれば優に幾冊かの書を讀破し得るであらう。一夏にして成らずんば、數夏繼續すれば一廉の成果を挙げ得るであらう。要は心懸け一つである。私の畏敬する知友尾崎光之助氏は多忙な農耕の間に、學界永年の疑問であつた食岩虫を發見して、學界不朽の名聲をとどめた。「教而不倦、學而不息」という言葉もある。次代の國民となるべき青少年を教育する人々や、將來の日本を興すべき學生諸君が、来るべき暑中休暇をごろごろ寝て過ごされては困るのである。私は未熟無頼、柄にもない修身めいたことを書いて恥ずかしいが、昨夏店頭で聞いた放言が忘れ難いので、敢て書きつけた次第である。

# 再び御坊町の諸氏に

「紀州新聞」昭和二十六年七月十七日掲載

## 1

私は六月八日の本紙上に、「御坊町の諸士よ」と題する一文を寄せ、御坊町の象徴ともいうべき本願寺日高別院荒廢の状を報じ、今にしてこれを修復せざれば、町民に親しみ深いこの大伽藍も遂に大破に至るであらうと訴えた。それから一ヶ月余を経た七月九日、松原村吉原の田端憲之助氏から、既に御堂修理の淨財募集が始められたと聞いて誠に欣快の情にたえない。淨財募集のことは、恐らく私が駄文を草する以前から計画されていたことであろうが、濁悪末法の世とはいえ、人道未だ地を拂わず、誰しも憂うる所は一つであると心強く思つたものである。

## 2

本願寺日高別院の由緒については今更新しく説くまでもないが、本寺が松原村吉原において、豊臣南征軍の兵火に合い御坊町椿（當時の椿原）に移り、さらに現代の地に轉じたのは文祿四年（一五九五年）頃のこと、いわれ、「國主淺野家の臣佐竹伊賀守奉行の下に、藪・嶋二村の荒地のみ四町四方を賜いで、藪坊舎をそこに移す云々」とあるから、その頃は草深く石塊の多い、いわば河原畑のような地であつたのだろう。

その後、凡そ三百年御堂を中心として八方に家並みが建ち並んで、遂に今日の繁榮に至つたのである。勿論この外に地の利もあり、政治的・經濟的な理由も大いにある。しかし何といつても町繁榮の第一石はの本願寺別院にあつたことは間違いない。

## 3

藤田村藤井に専念寺という淨土宗の寺がある。「施して報を願わず、うけて恩を忘れず」という言葉が掲げられている。エロとパチンコに狂奔する現代人にとつては、佛教は既に過去の遺物であり、税金攻勢に怯え生活苦にあえいでいる今日、古いお寺さんのことなどかまっていられない、というのも尤もなことであるが「受けて恩を忘れずである」。御堂修理の淨財募集が始められるとすれば、この機會に應分の協力をして私達の父誼が遺してくれたなじみ深い御堂さんを、子や孫にも傳えてゆきたい。大日高市が構想されている今日、御坊町は既に日高郡の首都である、その首都の一番由緒ある御堂さんである。私どもは有縁無縁よろしく宗派を越え、額の多寡にかゝわらず、一錢でも一厘でも喜捨したい。かくてこそ私共は

受けた恩のホンの一部を酬いたかと云い得るかと思う。

## おどり四方山話

「紀州新聞」昭和二十六年八月七日掲載

### 1

今年は今のところ天候も順調で、この分なら稲作は上乘間違いなしという譯で、各地で盆踊りが盛大に催されようとしている。欣喜雀踊といふ、小躍りするといふ、おどりは人間歡喜の自然の表れであり、平和のしるしでもあつて、まことによるこぼしいことゝ云わねばならぬ。

### 2

おどりと云う言葉の起源はネフスキー氏の研究に従えば、「オドリ」とは「男取り」であり、「メトリ」すなわち「女取(娶)」の対語であつて、古代<sup>2</sup>津會にあつては女性が男性を魅惑し引きつけるには艷容媚態を以てし、舞踊は男心を誘引する最も手近な方法であり、女子にとつて獨特の「男取り」の作用をなした。従つてその動作は男性の歡心を得るために次第に性的な露骨さを加えた。中山太郎氏も踊れば心臓の鼓動が高く激しくなるから「オドリ」の語が出たなどというのに比べて、数段の學術的價値があるといわねばならぬ、と讃意を表明し……以下省略(『日本における性神の史的研究：西岡秀雄著』)によると「おどりの語源を右のように書いています。

### 3

しかし盆おどりはこれと少し趣きを異にし、柳田氏の「民族學辭典」によると、「通常盆の十三日から十六日にかけて、寺の境内や町村の廣場などで老若男女大勢よつて踊られる。ぼんにまねかれて来る精靈を慰め、またこれを送る踊と考えられているが、もと念佛踊に出、小町踊や伊勢踊の要素が加わつたものらしい。古代の歌垣の遺風となす解釋がおこなわれているが誤りである――以下略」とあるが、どうやら昨今のおどり風景をみると、ぼんに歸り来ませる父<sup>3</sup>の靈を慰めるといふような殊勝心掛けよりも、「男取り」「女取り」の傾向の方が強いように思われる。もっとも一年振りて招かれて来た先<sup>3</sup>の精靈も時代が

時代だから案外物分かりがよくて、あゝ「やってるく〜」と却って喜ぶかも知れないが、歌のとぎれた瞬間にでも、ふっと古い亡き人々を偲びたいものである。

#### 4

これはぼんおどりと丸で違うが矢張りおどりには違いないから、ついでに書くのであるが幕末もずっと押し止めたというよりも、明治新政権がようやく黎明を告げようとする慶應四年（明治元年）ごろエジヤナイカ踊りというのが江戸・京都方面から起こって殆んど全国を風靡した。これは新政府の人心シュウラン（振興）策の一方法であつたらしいが、お札や金札や時には一分銀などが空から降つたり、台所の窓から舞いこんだりして、誰いうとなく世直りの瑞兆だと村中氣狂いのように「エジヤナイカく〜」と踊りだした。「おどり」とは云うものゝ定まつた型がある譯ではなく、只もう手をふり下駄を片々、又は下駄と草履とを片々にと、無茶苦茶に歌い踊つたものらしい。それが如何に熱狂的であつたかを物語る材料として、私の村に來迎寺という淨土宗の寺があるが、この寺が慶應四年四月原因不明の怪火によって炎上した。折から村人は寺から程近い一部落でエジヤナイカ踊りの眞最中であつた。人々は炎々と燃えさかる業火を眺めながら、相變らず「來迎寺やけてもエジヤナイカく〜」と踊り狂うたという。今から考えると丸で嘘のような話であるが、私の少年時古老達によくこの話を聞かされた。

## 夏 日 艶 話

「紀南夕刊新聞」昭和26年8月中元特輯号

#### 1

昔、久米の仙人は川端で洗濯する女の脛の白いのに目を廻して神通力を失つたと伝えられている。そこで口の悪いのから、

“毛が少し見えたので雲をふみはづし”  
と物笑いの種にされた。

然し考えて見ると、久米の仙人はまだしもよい時代に生まれた。もし彼が今日生きていたならば雲をふ

みはずすどころか、忽ちに驚死したであろう。事程さように、現代の女性風俗は開放的であり過ぎる。電車の吊革を持つオフィスガールは無遠慮に他人の鼻先に腋毛をのぞかせるし、汽車を待ってベンチによる淑女、街頭に涼をとる夫人、自轉車を走らせる娘さん等々、勇敢に股間を露出する。云うなかれ「ズロースをはいているから大丈夫よ！」とズロースは僅かに一物を蔽いたるのみ。それですむものなら腰みの着用のカナカ土人も又文化人と云わねばならぬ。女性のたしなみとはそんなものではなかるうかと思う。

## 2

早いもので私の子供達もそろく、年頃になって来た。私は自分自身の汚濁に充ちた青春時代を顧み、せめて子供達には斯様な過ちをくりかえすまいと思う。性と云う嚴肅なる事実、これを如何に説いてよいのか時々店頭で性教育に関する書物を見るが、どうもピツタリ來ない。

花の受精や兔や雞の交尾、そんなものを材料にしたものが多いが、子供達は果たしてそれで満足するであらうか。戀愛・結婚・夫婦生活・卵・精子・生殖細胞・核染色体・ゲン、と事は倫理道德から生理學に亘る大問題である。子供達はよくこれを理解するであらうか。と云って「あれは鼻をかむのと同じ事さ、どちらも紙が要る。」と齋藤綠雨のように投げる譯には無論ゆかない。

## 3

一時チャタレー夫人の戀人問題が新聞紙面を賑わした。此の間も書店へ行ってみると、「チャタレー夫人の戀人」と云うのがある。オヤオヤとよく見ると、贋作とわざく、斷書をつけている。又「チャタレー夫人の裁判の記録」と云うのまで並んでいた。如何にチャタレー問題が、いやエロと云うものが人氣あるものか知るべきである。されば一休禪師であったか、

「三千の諸佛此の門を出で三界の衆生この門に集る」

と喝破した。此の門は云うまでもなく肉体の門を指す。何時の事であったか、十年か廿年程前、とに角昭和の初頭であったと記憶する。勝海尼という美しい尼さんが、京洛の名刹建仁寺の大統院に放火、これを炎上せしめて天下を驚倒させた事があつた。

原因は複雑であつたが結局弱小なる自己の力を過信し、生物自然の本能である性に挑戦して敗れた、若き女性の悲劇にほかならぬ。私は今から十八年前、彼女の傳を讀んで胸を打った靈肉鬭争のいたましさを今も忘れない、斯くの如く一見何の奇もない性も處理をあやまれば飛んでもない結果になる。

## 4

一切経刻藏者として鉄眠の名は誰知らぬ者はないが、此の人は肥後の國益城の人といはれ、壯年時代、日高郡南部町勝専寺志場氏の養子として一時紀南の地に住した。その鉄眠のある日である。

「鉄眠、庵に夜分籠り居りしに美婦一人來り、雪の夜なれば歩進まず何卒宿してくれと頼む。いかに拒むも、此の雪中に死せしむる積もりかといはれて、止むを得ず其所宿せしめ、子細をきくに、人の妾たりしが本妻の妬みで追出されたるが、里へ歸る途上日暮れ大雪に逢いしという。さて其女身の上を案じ眠られざるに艾の臭氣絶ず。へんなことに思い、ひそかに次の間をのぞけば、鉄眠の一物蚊龍雲を得た勢いで脈を打たせはね上がるを制止せんとて終夜灸をすえ居たるなり。其の女後に本妻死して夫の家に歸り本妻となり此事を夫に話せしに、其夫は大富なりし故、感心して其志に報いん爲寺を建て鉄眠を置きしとあり。眞偽は知らざるも「下略」(南方熊楠全集第八卷)

鉄眠程の人物も性欲の克服にはこれだけの死力を致している。人間鉄眠の一面を語るに洵に面白いよい話だと思ふので紹介した。

## てんごの川

「紀州新聞」昭和二十六年八月十四日掲載

### 1

數日前松原村吉原の大和紡績松原工場の擴張工事中、白骨化した一体の人骨が掘り出された。これは往年「てんごの川」工事の責任者が工事失敗の結果、引責自刃した死体を埋めたものである、などという説まで出て夕涼の話題を賑した。然らば「てんごの川」工事とは？。

これについては八月九日の「日高新報」紙上で芝口先生が簡単に説明を加えておられるからこゝではくりかえさないが、もう少し詳しく知りたい方は、昭和七年七月六日から十三日まで七日間にわたり「紀南新聞」紙上で森彦太郎先生が「西川流域の過去とてんご川」を語ると題して考証しておられるから、それを見られたい。何れにしてもこの工事には諸説があつて、詳細な資料が乏しいのであるが、昨年であつたか面白いことを聞いた。

それは現矢田小學校長玉置精三氏の宅に(この家もと矢田村大字小熊にあり、屋号中津という。蓋し、中



か、人妻に云い寄るからは命を投げ出して戀ぢや」いわせている。「てんご」という言葉をかく美事に驅使して成功した例は未だ知らない。

## 矢田八幡宮の石棒

「紀州新聞」昭和二十六年八月二十四・六日掲載

### 1

明治四十二年（一九〇九年）矢田八幡神評へ合合祀しされたが、藤田村大字藤井に今宮神評という小評があった。（祭神スサノオの命）、場所は大字藤井表で、淨土宗専念寺南側の縣道藤井、小松原線をへだて、今小池精所のある邊りである。何時の頃よりか、神評に石棒があり、土人雷のバチと稱し、これあるをもって藤井へは古來雷は落ちぬと云うた（故小池徳太郎氏の談による）。『南紀土俗資料』によると、「今宮評前に巨石あり、ある時この傍に雷が落ち乱暴せるを祭神捕えて、「この石の腐るまで藤井の里へは落ちぬ」と誓わして放免した。以來藤井へは雷は落ちぬ」とある。

### 2

長く藤田村長をつとめ、後矢田八幡評掌となられた、故小池徳太郎氏は合合祀後、この石棒を矢田八幡評へ遷した。しかし一見何の奇もない石棒にすぎないので、久しく社務所に轉がされたまゝになつていた。石棒は全国各地にあつて、さして珍しいという程のものではないが、紀南方面では比較的少ないものだけに、一見したいものと宮世話人の瀬戸光太郎氏に頼んだところ、「そんなものはあるにはあつたが、近頃見かけない」という。段々調べてもらうと、戦時中此處を宿舎とした兵隊が「何だ邪魔くさい石塊」とばかりに裏山へ投げすてたとわかつた。十二歳の子供程度の兵隊には、石捧もそこらの石塊も區別出来なつたのである。瀬戸氏散々さがし廻つてやつと石捧は評務所にもどつた。もう少しで所在不明になる危いところであつた。

### 3

八月十五日お盆で小閑を得たので一見した。即ち芝口常楠・片山隆三・巽三郎醫師、玉置矢田校長・野

田三郎、古川成美の日高々校兩教官の諸氏である。石捧は豫想したものより、ずっと大型であった。全長二尺九寸六分・周り一尺四寸から一尺五寸。無頭円筒型で中央から二つに折れていて、石質は絹雲母片岩という。最初矢田八幡の石捧のことを聞いて不思議に思ったのは、元來はじめにあったという藤井の今宮神ツというのが、そもく日高川南部のド流にあつたり、往古堤防などのなかつた時代には幾度か瀬となり淵となつたと想像される地点であるということである。

藤井という村名についても、『紀伊續風土記』に「村中に井溝あり、溝の側にもと藤の大木ありしより村名起るといふ」とあるが、これも大いに疑わしい。藤井はむしろ淵、又は淵居の轉化ではないかとさえひそかに考えているほどで、左様な地点から石捧が出るべき筈がないと思うていた。果せるかな石質が絹雲母片岩ということであれば、これは本縣では下津以北でなければ得られないものと聞く。さればこの石捧も何時の時代にか、何等かの目的あつて運ばれて來たに違いない。しかも全長二尺九寸六分、周り一尺四寸から五寸で、當初は無論折れてはなかつたらうから相當重いものである。それをわざわざ遠隔の地から運んで來るには單に好事のみではなく、相當重要な目的があつたと考えられる。

#### 4

一般に大型石捧は云うまでもなく石器時代の所産であつて、ある學者は集團共用の杵とし、ある人は崇拜物又は權力の象徴物であると稱し、又儀禮的利器としてしゅう長長の尊嚴を誇示したものであるともいふ、性的性格を多分に内藏したものとの見解もあつて、諸説紛々としてまだ定説がないようである。

この石捧もどうも何かに使用されたと覺しく、頭部が不均整に魔滅しているように見えた。しかし前述のように學者間でも種々異論があるような次第であつて、矢田八幡神ツの石捧についても斯様なものがあるが、大切に保存せられたいといふにとどめ、にわかには斷定を下すことを慎まう。

×

×

尚、これは余談であるが神務所内に、古くは寛永・元禄・文政頃の棟禮が數枚あつた。これらも八幡神ツの沿革や、當時の神ツ会状態を知る貴重な資料である。鼠害や亡失のことなきようお願いしたい。(おわり)

# 讀日高珍姓録

「紀州新聞」昭和二十六年九月十三・十四日掲載

今年の正月本紙上において日高珍姓録と題し、郡内の珍姓三、四を紹介したが、今日はその續編を書いてみる。

一、小猿某 || 矢田村土生にある。小川とか小山とか小谷とかいいうのなら、何處の村にでもザラにあるが、小猿といふのは珍しい。

縁起をかつぐ花柳界では、由来猿は「客が去る」に通じるをもつて忌む風習あり、うっかり猿という  
と、女連眞顔になつて「エテ公、エテ公」といゝ直す。蓋し、エテ公は男子の一物を意味し、これならあの 評會では大歓迎というわけか。また土木人夫等危険な作業に従事するものも猿の語を忌む。かつて小猿家の当主、紀勢西線建設當時、臨時人夫として働いたことあり、土工連小猿の姓を避けて何とか別の呼び方をしたと聞いた。

さてこの小猿であるが、今年八十余になる小猿家の老翁の話によれば、神評合合前前、この地に猿神或は小猿明神とか稱する小ほ小ここららあり、ほほここらの付近を小猿と呼んだ。即ち小猿姓はこの地名によるものである。猿を神としてまつ祀ることは當地方では少ないようであるが、中山太郎氏に従えば、猿は元來山の神であるという。又山王様の使いであるともいわれる。そういえば矢田村土生にも山王様があつた。要するに古代における動物神の名残を示すものと云えよう。

二、左向某 || 御坊町の標札で見かけた。元來切目川方面に多いのではないかと思うが確かなことは云えない。年少の頃御坊町に出て左向という標札を見て「ヒダリムキ」と訓み、世の中には變つた姓もあるものと感心した記憶がある。これは「サコウ」と訓むのだと知つたのは大分後の話である。それにしても「サコウ」というからして面白い。或時芝口先生に話すと、先生は「あゝあれはサコだよ、つまり山のセコというところだよ」と教えられた。

大言海によると「さこ」「谷・迫」峽處(さこの義か中略)谷の異名下略」とある。つまり地型から来た姓である。矢田村千津川に「谷ざこ」の地名があつたと記憶するが、今確かには覚えぬ、もしありとすればこれも同義である。

三、土用某 || 塩屋村森岡および矢田村土生、その他に二、三ある。何時か土生土用家の當主に由来を聞

いたが、この人元来養子さんで、土用家は舊早蘇村の出であるというのみで、古いことは御存知なかった。

しかし考えでみると、土用という姓もおかしい。早蘇村の出とすればまさか土用波でもあるまいし、暦日の土用とも解せず、疑問のうち一年程経た。ところが二、三日前所用があつて塩屋村森岡の人に会うたが、この人も土用という姓であつた。塩屋村土用氏の説によると、土地に鍋倉山と稱する城があり、(塩屋中村氏の舊邸)代々城御用の土方頭を勤め、屋号も土用屋というたが、明治初年戸籍編成寺に以て姓となす。

これで久しい疑問も解けたわけであるが、塩屋村森岡は須佐神<sup>神</sup>の所在地である。この宮では往古神事に用うる土器は例祭ごとに氏子が製作し、今も土器屋の地名が残ると聞く。或はこの土器製作とも何か関係はないか。何れにしても土用姓は土用波でも暦日の土用太郎でもなく、文字通り土に縁のある稼業から來たものらしい。

#### 四、

**伊奈某** || 矢田村小熊に数軒あり、この姓は関東方面にかなりある模様で、信州に伊那郡があるが、郡内では甚だ稀であり、矢田村小熊の數家と、之より出て今御坊町に住する三、四の外には殆んどみない。  
天正十八年(一五九〇年)豊臣秀吉小田原攻略のとき、富士川に船橋を架し道路を修理し、秀吉軍の兵糧米十萬石を小田原に急送して大功を樹てた人に、伊奈備前守忠次があるが、矢田村の伊奈姓は信州や関東から來たとも思えず、これも久しい疑問であつた。芝口先生であつたか誰であつたか今は忘れたが、衣奈村と関係はないかという人もあつたが、一寸腑におちかねた。しかるについ四、五日前大阪から舊友來り、道成寺に案内した節、道成寺本堂南正面廻廊の大香爐をみると、これは天保十三年(一八四二年)三月若山講中の寄進にかゝるもので、多くの寄進者や世話人の名が陰刻されていて、その一人に衣奈屋善兵衛の名がみえる。これだ！矢田村小熊の伊奈姓も、斯様な衣奈村の移住者の後裔でなかるうか。今のところ私はそう考へている。

#### 五、

**猿渡佐助** || 昭和七年(一九三二年)二月某日の「紀南新聞」に御坊小學校小使猿渡佐助の死亡の廣告が出ている。猿飛佐助は伊賀流忍術の名人で、私も少年時代の英雄だつた、この猿渡氏はタツタ一字の違いで小學校の小使さんであつた。猿渡氏は弘化三年(一八四六年)生、明治四十三年(一九一〇年)ころ志賀村より御坊町に移り、爾來三十余年御坊校の小使さんとして町民に親しまれた。行年八十余歳、今この人の後ありや否やは知らない。故人ではあるが、とに角日高珍姓番付一方の横綱たるに恥じぬであらう。

後記 本記投稿後ドウ氏は道余と書し、土用にあらざるに氣づきたれども、今稿を改めんも煩わし。  
他日機を得て訂正せむ。諸氏幸いに諒せよ。

## 光源寺の鐘

「紀州新聞」昭和二十六年十月二十三・四・五日掲載

1

光源寺は丹生村大字和佐にある浄土眞宗の寺院である。現在日高地方における寺院總數二百六十六、このうち浄土眞宗は五十五ヶ寺であつて、浄土宗の八十七ヶ寺に次ぐ。そもく、浄土眞宗がこのように大勢力を得るに至つたのは、文明(一四六九〜一四七〇年)(約四百八十年前)以後のことであつて、それまでは眞言宗がおゝかつた。この光源寺なども文明年間の開基と傳えられているが、たしかなことはわからない。しかし日高眞宗創草蓋の時代の篤信者の名を録した「西円寺門徒名帳」の中に「和佐、木坊子の女房くす女」とある。けだし木坊子は恐らく本寺先住木坊子宗貫師の誥と想像される。大体この名帳は森先生も屢々新聞、雑誌に紹介されたことがあるからくりかえさないが、日高眞宗興隆史上極めて貴重な資料であるばかりでなく、いろいろな意味で中々おもしろいものである。私はいつてもこの名帳に録された門徒の奇妙な名前、例えば「いぬ女、をとくま女、かんのう女、明金太郎、とね法師丸」と讀ながら興趣を感じる。

2

かような由緒をもつ光源寺も流轉の相はまぬがれず、昭和(一九四一年)十六年八月三十日午後五時四十分宗貫和尚が炊事の火から本堂、庫裡、折から新築中の座敷まで一物も余さず全焼し、和尚自身もこのときの火傷が原因で、翌々九月一日に死亡した。この宗貫和尚は變つた人物で、日高近世奇人傳でも書くとき火傷が横綱となる資格は充分ある。八十六年の生涯、子もなく只金！金！金！それこそ食うものも食わず、着るものも着ず、營々として蓄財に精進した。かくて産を成すこと二十余万圓、今でそ二十余万圓は敢て大金といえぬが、當時にあつてはまことに驚異的であつた。人間何事にまれ徹底した姿は尊い。金錢に対する

執着もあそこまでゆくと莊嚴である。普通人が余り金銭に拘泥するのは何だかしみつたれて見よいものではないが、宗貫和尚がハゲチヨロケタ法衣をつけ、どこでいつ手に入れたのか博物館のヘルメット帽を戴いて法事詣りをする姿は、ひょうくとしてどこか仙骨をおびていた。人生の不幸は雪崩のように来る。昭和二十五年九月近畿一帯を襲うたかのジエーン台風は火事にのこった鐘樓を吹き倒した。その後一年、今回有志の骨折りによって鐘樓は見事に再建され、私どもは再び鐘聲を聞くことができる。

### 3

昭和二十六年九月某日和田喜久男老がこの鐘の拓本をとる際一緒に調べたところによると、

高さ三尺六寸七分

總高四尺六寸七分

口徑二尺四寸

口邊厚三寸

周下八尺四寸

中八尺三寸五分

上六尺五寸四分

龍頭高八寸

乳五段五列縦帶二つ

重量百六十二貫

(昭和十二年宗貫和尚 直話)

これが計測した数字であって、昨年十月南紀卿土學會で見學したときも皆でいったことがあるが、鐘としては極めてありふれた田舎出来の平凡な鐘にすぎぬ。しかしこの鐘は道成寺の鐘の姉妹品で、おもしろい因縁話があつて、今日日高の郷土研究上逸することの出来ないものである。

### 4

即ち傳説によると道成寺の鐘は戀に狂うた清姫にとか密されたといふことになつていて、その後はたして道成寺には鐘があつたかなかつたかは知らぬが、とに角正平(一三五九年)十四年三月(約六百年前)源万壽丸と源頼秀によつて鐘を道成寺に寄進した。万壽丸は矢田村土生に頼秀は吉田の八幡山に本據をかまえた當時の土豪であつて、後年龜山々頂に城城さいをかまえ、八方に威をほこつた湯川氏がまだ日高で勢力を得るにいたる前のことである。その後どういふわけかこの鐘は長く寺の後の叢にうちすてられていたが、豊臣軍南征のときに部下の將兵が陣鉦に使い、さらにこれを京都の妙満寺に附與したといふ俗説がある。そうしてその道成寺の鐘の一年程前に、型も銘もほとんど同じような鐘が、矢張り萬壽丸によつて矢田村土生の八幡宮へ寄附されている。しかるに矢田八幡八幡へ寄附された鐘もこれまた如何なる事情によつてか、今から約二百年程前の寛延二年(一七四九年)に、若野村津村正重によつて改鑄され、土生、小熊、藤井、鐘巻、の氏子らが八幡宮へ納めた。現在光源寺にある鐘というのはこれである。しかし幸にして原鐘の銘はそのまま改鑄の鐘にも用いられたので、その銘をみれば正平十三年、万壽丸が寄進した原鐘のことがわかるわけである。

銘に曰く

聞鐘聲 智惠長 菩提生 煩惱輕

離地獄 出火坑 願成佛 度衆生

天長地久 御願 圓滿

聖明齋日月 叡算等乾坤

八方歌有道之君 四海樂爲之化

紀伊劬日高郡矢田之庄千手里

八幡宮 源萬壽丸寄附

御神前治鑄鐘

飛鳥宮 山田道願作

正平十三戊戌三月十五日

再興 治鑄鐘

皆時寬延二己巳二月十五日

土生、小熊、藤井、鐘卷氏子中

神主 瀬戸平治 藤原和重

若野村

津村正重作

丹生村和佐光源寺光源寺住職

木坊子宗貫

妻 靜枝

世話人 御仲中

ワカノ玉置喜一郎 東岩吉 野田才五郎 ワカノ津村哲三 前田彌吉

上杉達三 吉田龜吉 玉置喜四郎 川口音次郎 栖原庄兵衛

江川中彦四郎 久留米佐市 柏木吉右エ門 井口和吉 玉置房吉

明治三十六年九月調之

この△銘であるが、

これについて井上豊太郎先生がかって「道成寺鐘小話」の中で説明されているのでそのまま借用する。

「この文言中、聞鐘聲以下度衆生までの文句は、まづ佛徒の常<sup>常</sup>とう文句で一字一句たがわれないが、京都栗生光明寺（向日町淨土宗西山派本山）の鐘銘、山口縣宇部の普濟禪寺の鐘銘にもみられる。三字づつかさねてゆくことは漢の古例にならったもので、彰徳碑文なども要約して三字四句で結ぶことが例となっている。

◇聖明齋日月以下の文言は皇帝を讚美した文句で、くわしく説明すると面白いが省略に従い、この四章は禪録の「無門関」の序之中から抜粋したものではないかと思われるのである―下略」

これで難しい鐘銘の輪<sup>輪</sup>かくぐらいはほゞわかるが、私ども漢學の教養のないものでも中々立派な句であると思う。敗戦日本も國民の努力によって一日も早く八方に有道の君を歌い、四海無爲の化をたのしむような裕かな國になしたものである。このほかの鐘銘にしても實にいろく々な事柄を私どもに語っている。即ち一例を示すなれば、湯川氏日高平野進出直前の日高平野周邊の村落である。土生から吉田へかけての支配者が源万壽丸や源金比羅丸という男であったこと。又正平頃すでに土生村の別名が千手と稱したこと。従つて享保十年<sup>（約一七五〇年）</sup>「土生村寺<sup>（千手）</sup>方由緒書」に

「此寺之本尊千手觀音此觀音因緣依當所千手之里と申傳候云々」とあるは相當根據があるということ、等々無盡である。

## 7

然らば元來土生八幡宮にあつたはずの鐘がどうして光源寺に移ったのか？

これは鐘銘にもある通り明治三十九<sup>九〇三年</sup>年九月のことで、年代も新しいから簡單である。即ち明治政府の神佛分離方針によつて八幡宮の鐘は無用の長物となつた。折から光源寺では鐘が是非ほしいというようなところから、何でも故小池甚一郎氏等の斡旋によつて一金三百三十円也で光源寺へ移つたと聞いている。

當時和佐に玉置喜四郎という篤信の大工あり、その日のよろこびを“西へくくとゆく鐘を、ごうんくと御慈悲よろこぶ”と歌つた。

當時この鐘は西の方の寺からもほしいと希望あり、正にその方へ賣られようとしていた。そこで“西へ西へ行く鐘”で、西はその正にうられようした寺と西方淨土とを意味したものである。太平洋戦争によつ

て郡内寺院の鐘の殆んど供出されてしまった今日、この鐘の価値は一層大きくなった。

(おわり)

## 故人今人

「紀州新聞」昭和二十六年十一月三・六・七日掲載

### 1

井上豊太郎先生はいつも「日本人は感情過剰で困る」と戒められるがまことにその通りで、私なども、もう四十を二つ三つ越していながら常に女學生の如くセンチメンタルである。秋もようやく更けて庭の片隅で、すだく虫集の聲が夜ごとに細りゆくのを聞くと、そぞろに過ぎこし方や逢うて別れて廣い浮世の人ごみの中へ消えてついでに幾人かの人々のことが思いだされる。

### 2

あれはいつのことであったか、私が二十一、二才のころと記憶するからもう二十年余にもなろう、一夏御坊町日高別院で夏季講座の催しがあった。何でも日高郡の教員組合、もちろんその時分は教員組合というようなものはなかったであろうから教育會であったかのかも知れぬ。とに角そういつた方面の主催であつて、そのときの講師には郡出身の名士方で、今は亡き田端豊吉氏や津村秀松博士、今もなお健在を傳えられる下村海南博士、沖野岩三郎の諸氏が招かれた。田淵豊吉氏はその時孔子の話をされた。數冊の書籍を無雑作に机上において時々頁をくりながら話された。何という章句であつたか忘れたが「……」と論語か何かの一章を説明されながら「孔子という男は大分しつかりした男だ」と孔子をほめられた。孔子をつかまえて、しつかりした男もないもので、余人がそんなことを云えば随分滑稽なことになるが、そのときは一向おかしくなかった。私は政治家を好まぬ、政治家がきらいではない。今日の政治家は、あれは政治家ではない。政治屋だから虫が好かぬ。金もうけと政治を混同し、御都合主義で眞の國民大衆の幸福を考えない。その点田淵氏は異色があつた。酒はのむし、議場では暴れるし、随分勝手氣まゝまなふる舞をしたが、どこか一片こうくたる處があつた。議會が解散になつて選挙戦がたけなわになると田淵仙人はどこ

からともなく飄々たる姿をあらわした。私はあの政談演説とも人生漫談ともホラともクダとも得体の知れない演舌が好きであった。実際田淵氏の選挙演説會はどこでも大人氣であった。田淵氏は酒のみで政見發表演説會でも水がわりにコップの酒をのみのみ熱弁をふるった。

「春になった、池の蛙がよい気持ちで鳴きたてた。そこで人間は“やかましいぞ静かにしろっ”と叱りつけた。それでも蛙はおしゃべりをつづけている。“コラッ止めないか”とうぐ、大きな石が投げこまれた。蛙どもは石の下敷きになってみんな死んだ」。イソップ物語の一つをひいて「諸君は今普通選挙になったと喜んでゐる。やがてこの蛙の如くならずんは幸せである」と警告された。間もなく満州事變が起きた、支那事變となった、太平洋戦争と發展して氏の豫言は見事に適中した。「世界に三人の大馬鹿者あり、南にムツソリニー、西にヒットラー、しかして東にわが東條英機これである」壇上の田淵豊吉は大見得をきった。御坊小學校運動場擴張の時であった。「諸君は今にこのグラランドに藪を植え頭上から火の雨を受けるであろう」。この二つの話は又聞きである、或は傳説かも知れぬ。「坊主千人よつても釋迦一人に如かぬ」ともいわれた。民主政治は一面衆愚政治ともいえる。田淵氏も今あらば何というであろうか。御坊町長問題が云々されたとき、ある人が氏を町長にと擬した

「鯨を泉水で泳げというか？」

氏は昂然と語ったという。とに角田淵氏は仙人といわれる程で非常に直感力が鋭く先見の明があった。日高郡民は女も老人も政治など興味のないものでも田淵さんくと敬愛した。私は昭和十五年一月から數年間大阪に居た。したがってこの間の郷里の出来事は何も知らぬ。田淵氏はこの間失意のうちに亡くなられたのではないかと思う。とまれ今後斯様な異彩のある人物は一寸出ないであろうと懐かしまれる。それにしては當時田淵氏についていた夥しい田淵宗の人々はどこへ行ったのだろうか。

### 3

田淵氏に較べると津村秀松博士の講演は面白くなかった。面白くなかったというよりも學究的な博士の講演がわからなかつたのである。それでその時どんな話をされたのか何の記憶もない。當時日高經濟界に君臨していた日高銀行頭取、東町和佐屋津村英三郎氏の令弟ですばらしくよく出来る人、かつて神戸商大に教鞭を執られたころ「神戸商大に津村あり」とうたわれた程の經濟學者という位しか知っていなかつたのである。後年津村博士が六甲山麓の対故山莊に悠々自適されてから物された數々の隨筆に接するにおよんで私の津村秀松熱は奔騰した。そして博士の一句半行の短章をも愛讀した。評會風景、隨筆道成寺、春

秋筈記の三冊に収められた博士の佳作は近代日本隨筆文學の粹であると今も尚愛誦してかわらない。

#### 4

“冷ややかに、水をたゝえてかくあれば人は知らじな、火を噴きし山のあとも”

前田榮太郎氏を思うごとに私はきつと生田長江のこの歌を思い出す。前田さんは今平凡な薬局の御主人として何事もなかった人のように店頭（一九二三年）に居られる。しかし今から廿何年の昔、大正十二年九月（？）日高の勤勞大衆の輿望を擔い縣會議員候補者として紀南の山河を疾驅したときの颯爽たる姿は今も目に浮かぶ。前田さんは當時新聞配達をして居られた。私達が小學生のとき、或る朝の一時間目であった。教室に入っていたがまだ先生は見えていなかった。ガラツと教室の戸が開いて一人の新聞屋さんが来た、だまつて教壇の上に新聞紙を置くと黒板にサラ／＼と何か大書きして出て行った。白墨でたった二字「阿呆」と書いてあった。これが前田さんである。

當時、普通選舉が正に行われようとして民衆の間にはほうはいたる評会民主々主義の波が高まりつゝあった。望峯前田榮太郎は大衆のホープとしてこの波に乗ったのである。ゼエスチャたつぷりの演説も上手だった。辛辣人を刺すような毒舌は敵黨の心膽を寒からしめたものである。それから後の前田さんは誰も知る通りである。私は薬局の店頭にいる前田さんを見かけるごとに、

“人は知らじな火を噴きし山のあとも”

の歌を思う。望峯前田榮太郎の名は日高人にとつて忘れられない懐かしさを持つ。

（おわり）

## 故人今人を讀んで

「紀州新聞」昭和二十六年十二月十九・二十日掲載

森 常吉

矢田村清水長一郎氏が本紙に「故人今人と題する」一書を寄せられたことは、讀者の記憶に新しいところであるが、それを讀んだ丹生村森常吉氏は左の一文を清水氏に送ったらしく、本稿は清水氏が

ら本紙に寄せられた森氏の私信である。

## 一、故田淵豊吉氏に就いて

同氏が始めて衆議院議員に立候補したとき、學友の中村三之丞氏（その後衆議院議員となりて、新聞紙上散見したのであったが、永らく消息がありませんが在世か否や）が京都より来郡、應援演説に廻られ、拙老も頼まれて露拂いを勤め、郡内を演説行脚をしたのであった。その後幾年かを経て某年の秋某日、飄然と来宅せられ「オ、」の一聲が久闊の叙辞、いきなり店へ横になった。私は座敷へ通られことを勧め、愚妻が濯ぎ水を運んだが、これから眞妻山へ登山するのだからかまわないで呉れといわれ、早速風呂敷包みを解かれ行厨を開き始めた。見れば豆の粉まぶしの三角の握り飯三個、副食物は梅干一個づゝはいつてであった。

その日私は丹生神 神の氏子總代会へ出席する筈、時刻も切迫したので誰かに案内させますといえ、強いて断るので、食後二人一緒に出て同氏は山へ、私は丹生神 神へと別れたのであった。それから私が日没頃帰宅したが同氏が下山して居らず、故に人を走らせ丹生郵便局から本宅へ電話で問い合わせたところ、帰宅されていないことが判ったが、行き先がわからずどうやこう心配していたところ、八時頃ハア、と急ぎ歸って來られた。

その前學友（田邊中學在學當時）の森武楠氏から夕食、及び宿泊の用意整えてあるからと申入れがあったので案内したのである。

夕食後山野青年会員に講話せられんことを申込んだところ快諾されたので、私は至急に青年團員を呼集し、山野の學校にて講演せられて青年会員に感動を與えられたのであった。

翌日武楠氏宅にて雑談の折り、同氏に著述しようとした。稻門の三羽鳥（三傑）の内、中野正剛氏、永井柳太郎氏は既に著述されてある。君が「仙人」の異名をもって売出せば、二版、三版は立ち所に売切れとなるは必定といえ、反って、「君はよく紀南新聞へ寄書せられてある、それを隨筆集として出版した方がよく売れる」とからかわれたのであった。

## 二、故津村秀松博士に就いて

同氏に就いては神戸高商の名物男位しか知りませんが、先年中村たかし（元アルゼンチン公使）氏が衆議院議員に立候補して、老松座で政見發表演説会を開き、津村博士が應援弁士として壇上に立つや否や、猛烈な彌次に拒まれ、論旨を披露すること能わず中退したのであった。

その後へ御本尊が立ち開口一番、「私は見懸けの通り小男であるが、何か一つ勝ちたいものがほしいと思つて名を「タカシ」とつけました」と云うて演説を進めたが、彌次一つ飛ばすまで静粛を保ち演説したのであった。先の津村博士に対する彌次は何のためであつたのか私には判らずじまいであつた。

### 三、前田榮太郎氏

同君は若い頃よく山野へ来られ、地福寺に宿泊して例の演説をやるのが殆んど慣例となり、その都度私が前語りをさせられました。曾の時の鉄道大臣小川平吉氏が、紀勢鐵道豫定 調査のために三重縣を経て來郡、元日高中學校にて歓迎会開催、同氏が挨拶の辭において、「日高郡民諸君が紀勢鐵道敷設を熱望している心は察するが、それならばなぜ中村啓次郎氏を落選させたか。これは日高郡にとつて大損失である」と述ぶるや否や同氏は進み出で、まづ名刺を小川大臣に指し出した。そのとき江川の栗本源三郎氏は前田氏に対しコップを投げつけ、反対に山野の森武楠氏は机の上に飛び上り、兩手を振つてしつかりやれと聲援したが、時を移さず隨行の一俠客(和歌山市の人と後で聞いた)の爲に胸倉を鷲つかみに引張り出され、一時は大混乱であつたがやがて靜穩を取り戻し、歓迎会を了つたであつた。

その大膽なる行動が郡内に宣傳せられ青年層の共鳴を博し、次回の縣議會議員選挙に古豪白井藤楠氏を尻目に最高点をもつて當選したのであった。由來、和歌山縣は鹿兒島縣に亞ぐ政友会旺盛の地であつたが、其後藏原民政黨知事が來任して、政友會をかいてかいてかき崩し二者轉倒せしめ、鬼藏原のあざ名を置土産に中央政界へ引上げたのであつた。

それから同氏は縣會議員に落選、また衆議院議員に立候補して夫人同伴演説行脚を試みられたが、事志と違い不幸落選の憂目を見、それやこれやで政界を隱退し、藥種店の主人に納まつたのである。有爲天變の世の中かな。アゝ (おわり)

## 郷土の地名二、三

「紀州新聞」昭和二十七年一月二十六・二十九日掲載

本紙紙上に「日高珍姓録」と題する駄文をのせたのは、たしか昨年の正月と九月頃であつたと思う。これはなお資料が集まるにつれて、つゞけて見ようと考えているが、今日は少し趣向を変えて馴染み深い郷土の地名の代表的なもの二、三を拾つてみたい。

いうまでもなく名前があつて土地が出来たわけではなく、土地があつて名前がつけられた。しかもその前は人間がつけたものであるから、個々の地名にはそれぐによつて来るべき理由がある。早い話が白い犬はシロとかユキとか呼ばれるのが普通でクロとは呼ばない。だから克明に地名をしらべてゆけばその土地の過去の姿が浮かび出て来る。しかし何分にもそれは古い大昔のことであるから、これには言語學、特に古語や外来語の知識をはじめ考古學・史學・人類學・地質・地型・その他百科の學に通じなければならぬ。そんなことは到底私ども素人には齒が立たぬ。そこで私は諸書に散見する諸説を紹介するにとゞめる。

## 紀伊

現在の和歌山縣の全域と三重縣の一部をふくめて紀伊の國と稱したことは誰も知るところであつて、一般には紀伊のキは木であるといわれている。つまりこの國は山が多く、氣候が暖かでおまけに雨量も多く、木がよく繁茂しているから木の國といふのである。

「紀伊の國は良材生うるよりの名で、神武天皇橿原に宮造りしたまうとき、この國の檜木を用い給へること古語拾遺に見え、「聖徳太子傳曆」には木の郡とある云々」(金澤庄三郎「地名の研究」)

最近出た日高々校、山下尚志君の「わが郷土和歌山縣」もやはりこの木説をとつておられたと記憶する。これ程一般的に信じられている木の國説にも反対説がある。

即ち「古代の「紀の國」は紀の川の下流平野をさして呼んだものである。この地域がまだ今日のように隆起していない古代には一面水郷で、それに葦の類が密生していたことは海草中學の校庭で地下五尺、和歌山市役所宮出張所附近では地下四尺の深さに葦の包含層が介在していることによつて明らかである。この葦の類はアイヌ語でキと呼ばれる。即ち葦の繁茂地が「キ」の國となり、後に「紀伊」となつたものである(下略)」(岩西忠一「南紀藝術」九号)

然しこれにも又有力なる反対説がある。

「紀伊は要するにもとは紀の國で、それを強いて二字にしたい爲に伊の字を加えたものであるが、(中略)木の豊かな國という意味で、日本人が命名していたものと考えられ、従つて語源は樹木、木材に外ならな

い。しかるに或人はアイヌ語でキというものは蘆荻の意味であるから、紀の國のキは吉野川附近、或は和歌浦沿岸の所謂葦邊などの葦をさしたもので、蘆荻の多いところという意味から命名されたのではないかとの新説をたてた。(中略)しかしこの場合においては樹木説、即ち國語、語源説の方が蘆荻説、即ちアイヌ語言説よりもはるかに蓋然性が多く一層自然味を帯びていると思う。(中略)この蘆荻説を活かすためにはその邊りにかつてアイヌ人がバツコバツコしていたことを古代史、考古學、或は人類學の上から證明することが是非必要であつて、そうでなければ論據が頗る薄弱たるを免れぬ。今日までの研究によれば遺骨、遺物等の調査の結果、これ等はアイヌ族の残しておいたものでなく、純然たる日本人の遺物遺物先の一分派の遺したものであると結論するより仕方ない。」(「外来語の話」新村出)

わが國言語學の權威、新村博士は以上のように眞向から反對している。そんならお前の意見はどうだと聞かれると、私は矢張りアイヌ語説を妥當だと思ふ。先年白崎村に遊んだ時に能登川という川が白崎にあると聞いた。能登は能登の國の能登で、アイヌ語でノツ(岬)トロ(所)、即ち能登はノツトロの轉じたものであるという。能登は北陸の涯みぎわだ、白崎は南海の僻村である。おそらくこの二者の間には何の關係もなからう。この外、西牟婁郡には和深村がある。和深もアイヌ語のワツカ(水)と解釋するより方法がないのではないか。同じ西牟婁郡の江住などもアイヌ語のエンルム(岬)より轉じたと考えられないこともない。

## 日高

「日高の名義を考えうるに、日の高く天の眞秀(まほ)に座して照り輝く義にして山あれど高からず、よく日をうくる地の美稱なり」(紀伊續風土記)

つまり日高というのは日あたりがよく、豊かな土地だからつけた名前であるというのである。大變なほめようで、日高人たるもの新井田好古先生はじめ續風土記の編者にお禮を申さねばならぬ。しかし有頂天によろこぶのは一寸早い。

「日高見國とは夷人(ひなびと)、即ち異民族住居の國の義である。ヒナ一にヒダという。承和(八三四、四八年頃)の頃までなお言葉風貌、他國人に異なりといわれた。飛彈國、即ち夷國(ヒナコク)の義であつた。ヒダカは即ち夷處(ヒナカ)の義である。(中略)紀伊の日高郡、伊勢の飯高郡も同様で、(中略)やはりヒダカの名を傳えているのである」(「日本民族史概説」喜田貞次郎)

「紀伊に日高郡があり、伊勢に飯高郡あるのもその地が久しくヒダウ、即ち夷(ヒナ)の棲家であつたことを示している」(「齋東史話」喜田貞次郎)

續風土記と喜田博士の説では月とスツポン程値うちが違ふ。一体どちらが本當かと問われると、残念なが

ら日高は「いなか」で、矢張り文化のおくれた「ひなの里」だと答えねばなるまい。

**那賀** 「那賀は舊郷名なり。今の長田莊邊の名にして長の義なるべし」 「紀伊續風土記」

昔と今とでは變つてゐるかもしれないが地圖をみてもわかる。那賀郡は別段以て郡名となる程長い郡でない。續風土記の解釋は少し字にとらわれすぎていないか。むしろこれは簡単に中と考うべきであろう。即ち海部と伊都の中の郡である。それを那賀と書いたのではないか。

**矢田** 最後に自分の村である。矢田村は土生・小熊・入野・若野・鐘巻・千津川・中津川の七大字からなつてゐる。土生にしても、小熊にしても、その他の千津川でも中津川でもその地名のおこりは一通り説明がつくが、さてわからぬのが矢田の村名である。

この付近では稻原村切山かに東矢田谷という小字名がある。矢田村の矢田も今小熊の一枝谷にその名をのこしてゐる。これもアイヌ語説もあるし、濕地のことをヤチというからそれかとも云い、野の田つまり野田が「やた」になり、矢田に轉じたと説く人もあるが何れも納得しかねる。試みに吉田東吾博士の「大日本辞書」を見ると、あるはあるは同じ矢田村が全國で十九ヶ村、八田と書くのが九ヶ村、單に「やた」と呼ぶのとまで加えると二十一ヶ村總計四十九ヶ村を數える。これだけ數多くあるとすればきつと何か理由があるに違いないがさてそれがわからぬ。この四十九ヶ村をしらべ上げてみれば、共通の地型とか何ものかあるに違いないと思うが、今はそんな時間も金もない。ただ、私の矢田村はきつと奈良縣の矢田と何か関係があるのではないかと考へてゐる。それは矢田村小熊、矢田谷ある地藏寺の縁起その他によつて推測するものであつて、今の處たゞそれだけにとゞまる。讀者のうち誰か御教示を賜り得ればこの上もなく有難い。

(おわり)

## 安政の大地震津浪話の記

「紀州新聞」昭和二十七年二月十九・二十・二十一日 掲載

1

「安政年間大地震津浪ばなしの記」は由良横濱村毛綿屋平兵衛の手記である。毛綿屋平兵衛は現由良町

横濱弓場氏の語にあたる。安政地震と津浪の記録として世に傳わるもの二、三にとゞまらず、「日高郡誌」所載のものだけでも「熊代繁里手記」はじめ「勝本源太郎覺書」・「村上久藏洪浪記」その他があり、松原村濱の瀬には災害記念碑がある。こゝに摘録せんとする「毛綿屋平兵衛手記」も相當廣く流布され、私是由良町阿戸の濱上楠松翁所藏の寫本によつたが、同一のものを芝口先生も所藏しておられる。或はすでに誰かによつて「紀南新聞」あたりに紹介されたことがあつたかも知れない。しかし今の若い人々は無論知らないであらう。「天災は忘れた頃に來る！」かようなことは何回もくりかえして普段から有事の際の心がまえを養つておきたい。

## 2

そもく安政大地震といふのは「日高郡誌」によると

嘉永七年(一八五四年)十一月四日、五日(陽曆十二月二十二、二十三日)東海、東山諸國から畿内、山陽、山陰の諸地方に大地震と大津浪がおこり、六万の家が潰滅し三千余におよぶ死者があつた(嘉永七年十一月二十七日安政と改元)。四日の震源地は東海道沖の海底で、五日の夕方は紀州沖南方の海底であつた。これは紀伊から西の畿内、中國・四國の全部と九州の北半におよぶ廣範圍のものであつて、日本における地震の活動力が現時のようになつたのはこの地震が一原因をなしているといわれる。この時の津浪はわが國の沿岸ばかりでなく、遠く太平洋を横斷してアメリカ大陸の沿岸にまで波及し、紀州藩内の被害だけでも倒潰、流失、破損の家屋二万六千六百八戸、流死人員六百九十五名で慘狀言語に絶す。

とあるから、その猛烈ぶりは到底先年の南海大震の比ではないのである。

## 3

平兵衛記す所の由良方面の被害は

横濱村だけ死人十七人也、家凡そ百軒の所八十軒余り流れ十七軒残る也云々

一、流家六十四軒残り家三十三軒、但しこの内打やぶれし分も有之本殘別條なき分十七軒也

一、網代浦 浪の高さ、御制札場、但し諸荷物水揚場也、二丈四尺このとき制札場隣屋敷に白眞木有之候つき是にて寸法相わかる

一、横濱 ヒクキところは浪の高さ一丈五、六尺、御タビ所當りは六、七尺位い、弓場道當りは三尺五、六寸位、御宮近邊は三尺位、同所石段六段目まで浪來る、馬場筋東村一番高きところは

一尺三、四寸より二尺位い、網代浦百軒たらずの所あら方流れ残り家十軒程、但し西の小口六軒、但し四人流死す、山際四軒程念興寺残る、但し寺地浪少し入る

一、阿戸浦 濱がわ三十軒程流れ、但し五人流死す、この内新宅瓦葺大丈夫之事残る

一、江の駒浦 少々流れ瓦葺大丈夫残る

一、吹井浦 四軒流れ

その他近村海邊浦々別條無之候、紀州内上手は大崎、下津浦、日方浦少々流れ、但し大あれ

一、同湯浅浦 大流れ 廣浦大流れ 但し兩浦とも死人數多有之候、尚又廣浦此後大土手できる

施主浜口儀兵衛殿也

一、同下手 日高名屋浦、濱の瀬少々流れ

一、塩屋浦 百三十軒程流れ

一、同印南浦 本郷と申所家多數流出す………(下略)

津浪や高潮はY字型海港に被害をたくましようするが、この時の浸水状況と南海地震のそれと比較してみたいと思うが、今にわかには資料を得難いのでやめた。瓦葺大丈夫にて残るとあるが、これは瓦の重みで流失を免れたものであるか？。塩屋村なども今日商戸立並んで繁榮をほこっているが、この時は百三十軒も流されている。或は當時と村落の位置がかわっているかも知れぬが、津浪といえは油断は禁物である。

#### 4

平兵衛はさらに筆をついで「大地震津浪心得の事」なる一項を設け、彼が体験の結果を記し、われく後人を警告している。

即ち大地震、津浪心得の事

一、かべ、へい、石垣、古大木の根にいるべからず

一、地震ゆる最中は岩山の下など通るべからず

一、大地震ゆり候えば後に小さき地震數多くゆるものと心得べし

一、大地震の後にて大いに雷の如く沖鳴り候えば津浪来ると心得べし

右沖なりはじめの時分まで家財取のけかね候えば、金銀は小さい布或は布袋などへ入れ井戸へ

入置べし、錢なども如斯いたすべし (中略)

大津浪来るとみるならば浪を後にてにげる方早し、浪を横にみて逃げるべからず。浪早ければ

うしろにして逃げるときは浪より走る方はやし、浪を横にみてにげる時は浪の方早し、多く浪に打ちこまれて死す

一、大地震、津浪ゆる時は小船などへのるべからず

一、津浪の後は土地の工合にて汐高きところもあり、又汐ヒクキ所もあるものなり。紀州由良の湊近邊は汐三尺ばかり高なるなり、但し後に少しづゝ直るとみえたり

火の用心といゝ、かべ、へい、石垣の側へ立ちよるなどいゝ、岩山の下を通るなどいゝ、さらに浪に並行して逃げるなどいゝのは誰もが知る常識である。しかも斯様な一般的な心得さえ突差のときは中々實行しがたいものであつて、火事に遭つて石ウスをもち出す喜劇など、私どものしばゝ経験するところである。

一、津浪大あれの後に近村より見舞米送り下され候、其後御上様へ御救米願出御聞濟被下一人前一日に二合づゝ御下げ成下有難頂戴致並に百日小屋を村々御用人足にて御建被下雨露をしのぎ皆々悦しき事限りなし

當時の不完全ながらも行われた災害救助の方法の一斑がうかがわれる。

## 5

今由良驛からバスで横濱に向かうと、途中八幡津の少し手前還の傍らに、何やらゆかりありげな「さゞなみの井戸」という井がある。安政地震後由良町の人々がこの井戸によつて大いに救われたことも手記にみえる。

一、津浪の節より横濱村の内面々の井戸塩氣有之に付入寺原街道端のサザナミの井戸とて清水有之由聞傳え有けれども年久しく用なき故この井戸ウモレ一向見えざりしを尋ね出し掘うがち候處はたして清水わきたゝえ皆々悦是を汲み云々

入寺原はあの邊の地名である。現代この井戸の附近に人家二、三あり、朝夕盛んに利用されているが、當時はその所在すらもわからぬほどに荒廢していたのである。

## 6

この原本は半紙およそ三十枚ほどに記され、別に地震と津浪による詳細な被害圖を添え、克明に各戸の名前や瓦葺、藁葺の區別があつて、當時の由良方面の戸數や庶民生活を知る上にすこぶる興味深いものがある。例えば圖面所載の横濱村戸數八十八軒の中瓦葺家屋四十六軒で、全戸數の過半数に及び土藏七戸前あり、今日私どもが想像する以上に生活が裕であつたらしい。又職業別では庄屋一戸、神主・寺院各一戸、

大工三戸、紺屋一戸であり、ほかに柳庵とあるのは多分漢法醫か何かであろうか。仕立屋善吉という名もみえるが、これは現代の所謂衣料品の仕立屋に相當するのだろうか。とまれこの「大地震、津浪話の記」は後日由良町誌でも編する人があるなら、面白い庶民資料というべきであろう。巻末に「毛綿屋平兵衛、安政元寅年同年四十九才書之」とあれば、災害直後のまだその記憶も生々しいうちに筆をとったものであろうが、これ程の災害にも猶心の平靜を失わず、後人のためと直ちにこの一卷をのこした志は尊ぶべきである。

かつて井上豊太郎先生のもとも、徳川末年の日高川洪水の繪圖を拜見したことがあるが、この繪圖にも浸水ヶ所を一つ一つ丁寧に彩色してあった。斯様なことは何でもないようであるが、中々出来難いものであって、先年上野口の法林寺が売られたとき、あの寺は私の家からよくみえる。従って屋根瓦が除かれ解体されて行く様子が一日一日とわかるので、これを記録しておきたいと思いつながら「明日こそ」と、のばしく、て怠情な私は遂に書かずに終わつた。昔の人は矢張り心がけがよかつた。(おわり)

## 矢田村の大字名

「紀州新聞」昭和二十七年三月五・六・七・九日掲載

### 1

一月の本紙に「郷土の地名二、三」を寄せて、矢田村の地名小字名の起源は一應説明できるが矢田というのがどうもわからぬと書いたところ、讀者からその説明をききたいという注文が二、三あった。中にはわかつているというのは大方嘘だろう、わからぬから書かぬのだろうという手きびしいものもあつた。よってそれらの人々にお答えする。

### 2

## 土生

はぶと訓む。この訓み方は少し難しいので、はじめての人は戸惑するらしいが、續風土記には

土生は埴生の(中略)なり、埴、説文に粘土也とあり、萬葉集に黄生(はにふ) 又は、赤土(は

にふ)とも書せり、すべて染物・塗物等用ふる土をはに、生はその土を生ずる所云々

とあり、土生は文字通り土の産る地である。こゝでいう土は赤土である。今もこの附近矢田谷から小熊へかけて、良質の瓦土を産するが、古代にあつては現代私どもが考える以上に赤土を珍重した。それは彼等の生活必需品である土器製作上欠くことのできないものであつたからである。かつて片山隆三氏は

恐らく古代にあつては土生あたりは土器生産地として著聞し、従つて専門的な土器生産者が居住し、日高各地で使用される土器はこの邊で製作され、附近の古代人は獲物の魚貝類をもつて交易に來たものである。

と筆者に語られたことがあるが、さもありません。さてこそ土生の地名が生じたのであろう。されば土生という地名は相當古いものといわねばならぬ。

## 千津

謡に

“ 小熊小判、矢田みそ、千津白かゆ、藤茶がゆ、鐘卷カンス泥ガンス ”

というのがあつた。これを千津の子供に歌わせる。

“ 小熊乞食、矢田みそ、千津白壁、藤茶がゆ、鐘卷カンス泥カンス ”

に變化していた。小熊は小判から乞食に轉落し、千津は白かゆから一躍白壁に出世する。つまり他愛のない村自慢の歌であつて、歌う土地土地によつて自分の村だけ立派にし他村をボロクソにおとしめている。

さて千津というのは享保十年(西一七二六年)の「土生村寺社方由緒書」によると、現土生淨土宗來迎寺の前身に尊勝寺というのがあり、この寺を又、北寺ともいつた。(後に火災にかゝつたが)この尊勝寺の本尊が千手觀音であつて、千津はこれから出た地名であるとしている。即ち

北寺焰焼退轉仕候、此寺の本尊千手觀音此觀音之依因錄當所を千手之里と申傳候

とある。つまり千手の里が千津に轉じたのである。斯様に千手觀音が地名になつた例は他所にもあり、有名などころとしては東京の千住がそうである。

千手の里がはじめて史に見えるのは正平年中(西一三四〇年代)後村上天皇のとき、逸見清重、南朝に奉仕した功によつて矢田の莊を賜り、千手の里に居城を構えたといふので、この地名は土生にくらべてずっと若いわけである。

## 千津川

せんづがわ 故森彦太郎先生の御説では、津は古語の「の」であるから、千津川は千の川だとあつた。しかし千津川はそれ程枝川が多くない。一体川の名はその注ぐところの地名によつたものが多く、例えば日置に注ぐので日置川、高津尾に流れ出るので高津尾川の如く。よつて千津川の名も、當大字貫流する本谷川は千津を経て、千津・小熊・藤井の三大字の境で日高川に合流するから、或時代に本谷川を千津川とよんだものであつて、それが大字名となつたものと思われる。

## 鐘卷

かねまき これは説明するまでもない。有名な安珍・清姫の悲戀物語り、鐘にかくれた戀人安珍を蛇体の清姫が愛情の で焼殺したという説話から來たものであることは想像に難しくないことで、續風土記もその縁起の故事により村名とするところがある。

## 中津川

なかつかわ 「津」というのは「集う」のことで、主に船の集い泊まるところ、つまり港をいう。例えは「難波津」・「室津」の如きであるが、後上陸の要衝をも「津」とよぶようになった。「中津」は即ち中の津である、中の要衝である。しかしこの中津川の場合は熊野街道からも、船津街道からも遠くはなれている。有田から藤瀧越をとつたとしても、白馬山脈、五百米の峻坂があつて當らない。それで無學な私はこの解譯に久しく苦しんだ。所が聞いてみれば何の事はない「津」は古語の「の」だという。天津乙女が天の乙女、中津國が中の國、まつげが目の毛というが如きである。即ち中津川は中の川である。つまり千津川と蛇尾川の中の川である。今村を流れる川を玄子川というが古くは中津川といふ、これが大字名となつたものと考ええる。尤も早蘇村に中津という字名もあるが、これは亦別の話で關係ない。

## 若野

わかの 「新墾の地なるより其名起れるならん」（紀伊續風土記）つまり新しくひらかれた土地だから、できた名稱であるというのであるが、これは一寸おかしい。周知の通り大字若野字片山は古墳が群在していた。現代古墳としてあるのは一個であるが、調査すればまだありそうな氣がする。古墳は大ザツパにいうて千數百年以前のものであるから、新墾の地というのは當らない。日高川が千曳の岩壁に突き當つて曲折する所である。従つて古來洪水による被害の多い地であつただろうと想像される。現に明治二十二年の大洪水には舉村濁流に吞まれ、全戸數四十戸中三十八戸まで流失し、四十人近い人が流死している。いわんや堤防の不完全であつた古代においては屢々水災をこむり、居村は常に河となり、河原となり、砂原となつて、河原には雜草が生い茂り、若き野の姿を呈したのである。即ち若野は新開

の地というより、むしろつねに若き野と解すべきであるまいか。

## 入野

にゆうの。これも「紀伊續風土記」に詳細な説明があるが、つづめて云えば、もとこの地にあつた大山神神（明治四十二年一九〇九年）土生八幡神神に合祀）が丹生明神であつて、丹生明神の鎮ります地であるから丹生野と呼んだ。丹生村の丹生もやはり丹生明神から来ていると説いている。丹生明神は元來丹生津姫であるが、この丹生津姫は沖野岩三郎の「日本神神考」によれば

丹生とは赤土のことである、祭神の具である陶器は手くじりであつて、太陽教徒が太陽神を祭るとき欠くべからざる重要な祭器であるが、高天之原族が日本へ上陸する以前にこの赤土を非常に要求したが容易に手に入らなかつたらしい。それが日本上陸後渴望していた赤土が発見されたので、これを守護するために賢明な一女性を選んでその任に當らしめ名を丹生津姫と呼んだ。

とある。とまれ入野は丹生明神から来たか赤土から来たかどちらかである。事實筆者が少年時代この邊から若野へかけて瓦屋が二、三軒あつた。アイヌ言語學者に云わせると、丹生（ニブ）は貯肉小屋と説くがこの場合はあてにならぬ。

## 小熊

こぐま 一寸變つた地名で、知らぬ人は熊でも出るのですかと聞く。如何にも小熊は草深い田舎でもあるまいがまさか熊は出ない。續風土記は「小熊は川隈（かわくま）の義なり」とあつさり片つけているが、果たして然るか川隈といえ、川の曲がり入る所にあたる。現代では堤防が完全だから小熊附近では日高川は村のはるか南を直流しているが、或時代には小熊から土生表、八幡山あたりへかけて入りこんで流れたことがあつたかも知れぬ。だから川隈説も無下むげに退けるわけにもゆかぬが、もう一つ注目すべきは享保（西一七二〇年代）の江川組神方書上帳に

小熊野權現一神小熊村 これは熊野權現神往古此處に御鎮座被成候由

依此因縁村名を小熊野と唱候由申傳候

とある事であつて、この説を裏書きするかの如く、同村金藏寺の喚鐘銘（享保七年十一月若野村忠右門鑄）に小熊野村金藏寺とある。たゞし小熊野が略されて小熊になつたこともありそうなことではあるが、前記江川組神方書上帳とその鐘銘の外、証すべきものがないから、にわかには断定は出来ない。（おわり）

# 清水長一郎氏の矢田村字名義考に蛇足を加う

芝口 常楠

清水長一郎氏の「矢田村大字名義考」は、自分の郷里だけあって、深く調査されて誠に面白く讀んだが、一つ蛇足をつけることを許されたい。

千津川のツは沖の波、國の神の如くノ字の意味で、多くの小川・小谷があるから千の川、即ち千津川とは故森彦太郎先生が証したが、千津川だけが他に比して多くの小川・小谷を有するわけではなく、清水氏のいわれる通り、下流の地名千津に因んだものと考えることが至當と思われる。しかし何故に下流の地名を用いたのか、他には下流の地名によらぬ例も多いので、こゝに研究すべきところがある。これは下流千津の人の開拓して部落をつくった爲に名づけたとみねばならぬ。北海道の開拓地に新十津川の名を存し、近く満州開拓地にもそれ〴〵出身の地名をつけたところもあつたと聞く。大和には諸國の國名・地名を部落名につけた所は今も多く存在し、紀州各地に出雲地方の名をもっている部落の多いのは、これ移民の出身地を思わしめるものではなからうか。

次に中津川も千津川と同じように東に平川あり西に千津川があるから、中の川の意であると説くのは一應尤もと思うが自分はそうは考えぬ。中津川は地名であつて川の名前でなく、川は下流玄子に因んで玄子川というのだ。早蘇村に蛇尾と平川という二つの部落があるが、これは同一語原による名で、蛇尾の尾は山の尾でへう尾、平川もへう川であつたのでないかと思う。西牟婁郡栗栖川村に兵生という處がある。何か同じ語原であるように思うが、今多く考へてはいない。その平川に中津という地名がある。道路の發達せぬ時代、運搬を川舟に托せるとき、舟津より藤井または御坊に至る間における舟つき場で中津といったものと思うが、その中津の人が蛇尾を越えて中津川に開拓した爲にその名を得たと思うのである。

中津川は今でこそ矢田村に属しているが、昔は矢田の莊に屬せず平川・蛇尾と同じく川上庄に屬していたことも一應考へてよいと思う。千津は尊勝寺という七堂伽藍の地であり、本尊千手觀音であつたので千手の里といったのが、千津になつたということとは左様に思える。しかしてこの所を土生というのは、何故か殖生でよい。土の出るところであるということも肯定されるが、享保十年<sup>(一七二五年)</sup>の土生村の禪寺由緒中に「この地に土生という所が多かつたが特に千津を土生村といった」と書いているのは面白く、全く何處にも粘土を産出したということがたしかめられる。

入野、若野の入、若の意義については私は全く考えていないが、野ということは一應考察せねばならぬと思う。野ということ、我國の地名では廣い野原や平野を意味するものでなく、山を伐り開いたところを云うのである。日高でも塩屋村の猪野々、稲原村の蕨野、早蘇村の沖野、西牟婁郡で馬我野、長野、伏菟野、芋野など皆山地で、かく擧げ来れば數限りもない。山路地方で山を焼くと、こゝを焼野といつて焼山とは云わない。入野、若野の野もこうした山を開いた所という意味である。

小熊は元小熊野といつたとは清水氏のいう通りで尤もな説であるが、只それだけではまだ物足らぬ思いがある。即ち小熊野とは小熊の野という意味か、又小さ熊野という意味か、これによつて解釋が變つてくる。「紀伊續風土記」には川隈が小熊になつたという。日高川の下流が平野をながれているが、小熊よりは山谷に入るのだから、河隈でその河隈の野が小熊野という解釋は面白いと思われるが、しかし小熊には往古より熊野神<sup>神</sup>があつたことは享保の書上げにもあり、野口村の熊野神<sup>神</sup>との交渉がある所よりみれば、小さ熊野で小熊野という解釋が成立つ。今何れか是が判斷を後日に期しているが、大方諸賢の諸賢の御教示を得ば幸甚とする。

「紀州新聞」昭和二十七年三月二十三・四日掲載

## 六郷堰雑考

「紀州新聞」昭和二十七年四月二十七・九日五月一・二・三・七日掲載

### 1

日高川には古くから三ヶの大井堰があつた。上流からかぞえると、若野堰・野口堰・六郷堰の順になる。このうち六郷堰は日高郡最古の井堰と傳えられ、灌漑面積も一番大きかつた。井堰のあつたのは矢田村大字小熊字上の浦四〇七二番地附近で、こゝから眞直に対岸野口村大字野口字板東へかけて、河中に松杭を打ちこんだり、杵に組んで土俵をつんだりして水流せきとめ、これを小熊側の水門に導き、日高平野の灌漑をしていた。井堰は水門三間、長さ五、六町ぐらいのものであつたが、前述のように極めて原始的な構造であつたから、出水ごとに流失した。水門の幅員は約三間、深さ四、五尺ぐらい、水末までは延々として三里、この間小松原・丸山・財部・藪・田井・和田六ヶ村三百七十町歩の水田を灌漑したので所謂六郷

の名があつた。ところが昭和<sup>一</sup>二<sup>九</sup>四<sup>六</sup>年<sup>上</sup>流の若野井堰が近代的なコンクリート式堰堤に改修されるや、野口井堰と、もに若野井堰に併合されて今は跡方もない。

## 2

現代わが國の米の收穫高は、反あたり平均二石（日高平野ではもつと多い）というから七千四百石、俵數にして一万八千五百俵の米が六郷井堰の水によつて養われてきた勘定になる。勿論六郷井堰のなかつた以前も日高平野に米作が行われていたことはいうまでもないが、それはかなり不安定なものであつたに違いない。即ち當時の農民は洪水を恐れると、常に早魃をもおそれねはならなかつた。

ところが六郷堰の創設によつて早魃の憂がなくなつた。従つて日高平野の米の産額は飛躍的に増大したであろうと想像される。少し大袈裟な表現をすれば六郷堰の創設は、正に日高平野農耕史上の革命であつたと云い得る。

然るにこれ程日高平野の住民と關係の深かつた六郷堰も用がなくなると、切れた草履のように誰も顧みようとしない。せめて簡単な記念碑ぐらい立て、ほしいものと段々關係者諸氏に進言しているが、かういふ非生産的なことはなく、ラチが明かぬ。

## 3

話が横道にそれたが、さて、それ程日高平野の住民に關係の深かつた六郷堰は、一体いつ誰の手によつて作られたのであろうか。ということになると不思議なことには確かなことは何一つわかつていない。文献としてわずかに「紀伊續風土記」と「日高郡誌」に次のような記述があるばかりである。

### ○ 六郷堰

小松原・丸山・和田・田井・財部・菌の六ヶ村に灌漑す「寛文雜記」に和田村の西山上に井見の松と云うところあり相傳う入山村かやの御所御在世のとき安倍清明この松の下にて此邊を望觀し吉日良辰を撰びこの井水を鑿といふいま按ずるに茅屋御所誰の御所なること詳ならず御幸記に高家莊を聖護院の御領地なりとあれば入山邊も同じ御領地にして聖護院の御所なるか又御幸記扈從の人に陰陽博士清光というあり此の人扈從の時時に登りせきに宜き地を教え鑿始むべき吉日を示せし事あるなんか、清明この地に來る事所傳なし、土人清明というは此人を誤り傳えたか姑く書して後の考えを俟つ（紀伊續風土記）

### ○ 六郷堰

矢田村大字小熊、日高川の右岸を起點とし、藤井・吉田を経て小松原に至り所謂六郷、即ち小松原・丸山・財部(以上湯川村)、田井(松原村)、菌(御坊町)、和田(和田村)の水田三百六十九町三段三畝十六歩を灌漑す。水門より水末まで延長凡そ三里(中略)この井堰は實に本郡最古のものと覺しく其の由來詳ならず。「寛文雜記」に「和田村の西山上に井見の松といふ所あり、入山村かやの御所御在世の時安倍晴明此の松の下にて東方を望み、吉日良辰を撰んでこの井水を鑿つ」といふことあり。「續風土記」は之を疑ひて、「晴明此の地に來ること傳なし。或は御幸記に見えたる陰陽博士晴光を誤傳せるにはあらざるか」といへるが、晴明の日高に來たりしこと必ずしも所傳なしとせざれど、今多くは考うべからず。「天田組大莊屋覺書」にも六郷井關掛高三千六百三十四石九斗とのみ見えて由來に就て記すところなし。(以上日高郡誌)

以上すこしくどくしいきらいはあるが、六郷堰に関する文献として現代唯一の物と思われるので殆んど全文を引用してみた。「寛文雜記」は筆者未見のため語る資格はないが、察するに寛文年間(西一六六一―一六七二)になつた見聞記、または隨筆の類と想像する。さて、「續風土記」および「日高郡誌」の記すところをつづめていえば、六郷堰の由緒は不明であるか、とにかく本郡最古の井堰であるという点で一致する。たゞ「續風土記」は「寛文雜記」記すところの安倍晴明説を否定しているに對し、「日高郡誌」は必ずしも否定していない。そこで安倍晴明がはたして日高へ來たかどうかは後に觸れるとして、順序として安倍晴明とは如何なる時代の如何なる人物であつたかを先づ考えて見たい。

#### ○ 安倍晴明

平安朝の天文學者、阿部御主人(みうし)の後と、加茂忠行および保憲等に陰陽推算の術を學ぶ。また天文を解し雜古を曉さとる。天文博士・大膳大夫・左京大夫・播磨守に歴任、後世彼の曆數の術を神秘に付會半傳々説的人物となる。寛弘二年(一〇五五年)歿、主著「金鳥玉兔集」・「故事略決」等(富山房『百科大事典』筆者の貧弱な史的智識は、僅かに以上百科事典の記述の外に、

「戀しくば來ても見よかし和泉なる信達の森のうらみ葛の葉」の哀艷な傳説の主人公としての晴明ぐらいのほかを知らないのであるが、晴明の歿年寛弘二年は西曆一〇〇五年の事であるから、もし仮りにいうが如く六郷堰が晴明時代のものとするれば、少なくとも今から九五〇年前と云うことになる。さらに「續風土記」所説の如く安倍晴光の誤傳とすれば、晴光が後鳥羽院に從つて日高に來たのは建仁元年十月(西一二〇一年)であるから七五二年前となる。また「寛文雜記」が筆者の想像通り寛文年間の著述なりとすれば三百年以上前となり、現代の如く土木技術の進歩した時代でもこれだけの工事は相當大工事であり、いわ

んや當時としては劃期的な大土木事業で、工事後三十年や五十年で施工年代が全く忘れられるとは考えられぬから、少なくとも四百年以前に築造されたものと考えられる。ましてこれに近い若野堰も寛文以前の寛永九年（西一六三二年）藩の事業としてつくられたことがはっきり伝えられているところから見ても、これはどうしても徳川氏の紀州入國前の出来事と解せねばならぬ。されば南龍公の紀州入國は元和五年八月（西一六一九年）というから、この点から考えても少なくとも四百年以前の出来事と思われる。

## 5

以上は、わずかに遺された文献を中心に、極めて大膽かつ常識的に六郷堰築造年代を考えて見たのであって、このほかに各時代の<sup>詳</sup>會經濟史的な方面から考察の方法があるが、今は資料不足のためこれに觸れず清明が日高に來たか如何かをとり上げてみる。

「寛文雜記」が「和田村西山に井見の松というところあり相傳う、入山村かやの御所御在世のとき、安倍清明云々」と記したのはどうやら確かな記録によつたものでなく、文字通り相傳うる所の當時の里傳をそのままとり上げたものらしい。そこで「續風土記」の編者達はこれに関する資料を涉獵したが發見にいたらず、遂に「清明この地に來ること所傳なし、土人清明というは晴光の誤傳にあらざるか云々」と半ば否定しながらも、なお慎重に後日を期したものとされる。ところが「日高郡誌」は「清明の日高に來りしこと必ずしも所傳なしとせざれど、今多くは考うべからず」と丸で「續風土記」と反對の見解をとつた。今「南紀土俗資料」土俗編傳説の部をみると、上山路村方面に清明淵をはじめとして、清明<sup>詳</sup>・清明轉じ清明田等、清明に関する數種の傳説のあることが記載されていて、その何れもが清明が熊野參詣の途次この地方に立ちよつたことを傳えている。

一体熊野三山の信仰は非常に古い歴史をもつものであるが、特に清明在世時代前後から盛んになつたものらしく、現に宇多法皇は一度・花山法皇は二度參詣されているから清明の熊野參詣も大いにあり得たわけだ、那智方面にも清明の傳説があつたように記憶する。即ちこゝらが「郡誌」の清明來日説の根據となつた点ではなからうか。

## 6

これと關連したことで

和田村西山の中腹<sup>II</sup>今瓦屋のある附近の上方<sup>II</sup>に五、六十年前までしよう明松という老松があつた。

しよう明松は清明松のなまりかと思われる。そして、十一月二十三日こゝから遠からぬ和田村御崎神<sup>詳</sup>

まで「火焚祭」が行われ、白粉餅をつくって<sup>神</sup>殿に供える風習があった。

御崎神<sup>神</sup>はこの邊の大社であるから、これは秋の収穫がすんで六郷堰関係の人々が會合した名残ではあるまいか。

という民族學的に頗る面白い話を最近和田喜久男老から聞いた。そういえば「南紀土俗資料」にも上山路村西村松翠氏の報告として

昔上山路村殿原字谷口庄司新九郎の家に安倍晴明が訪ねて来て、新九郎の請によつて諸種の害を調伏したが、後毎年霜月二十三日を拙者の忌日と定め、當日は白粉餅で祭りくれよ、というや晴明の姿は忽然と消え失せた。

という傳説をせている。和田村と上山路村では地理的にかなり距りはあるが、安倍晴明といふ、さらに白粉餅と云う点で一致しているのも面白く、こゝらで何か民族學的方面から六郷堰創設年代解決の鍵がないかとも考える。

## 7

このほか、六郷堰の六郷という名稱が單に六ヶ村の水田を灌漑するという軽い意味でつけられたのか、或は古い郷里制から来たものかも一應考えてみる必要があるが、今は筆者の研究不足のため後日にまつことにし、地形學的な立場から素人らしい検討を試みたい。

さきにも一寸記したが今から七百五十二年前、建仁元年十月(二〇一年)に後鳥羽院が熊野參詣をされた。このとき一行のうちに藤原定家卿があつて、所謂「熊野御幸記」と稱する詳細な道中記を遺している。このうち十月十日、一行は小松原と岩内附近に分宿したのであるが、定家卿は

「(前略)……御所有水齋、使宜臨深淵構御所云々……(下略)」

と小松原付近の地形を叙している。當時の小松原御所は今の藤田村吉田万樂寺付近であり、事実今もあの近くに御所の瀬橋という所があると聞くが、何れにしても深淵に臨んで御所を構うとあれば、當時鎌倉初頭にあつては、日高川は小松原を経て財部から南へ急旋回し、同村宇河原畑・下河原から御坊町・古川・東川田方面へと流れていた。(昭和二六・三・二八野田三郎氏の「日高平野の生成」による)

はたして、然りとせば六郷堰はあつたかどうか。既に日高川は日高平野の中央近くを貫流しているのである。恐らく當時のことであるから堤防なども小さな不完全なものであつたと思われる。従つて河流の周邊相當區域は荒蕪地であつたらう。こうした地形を考慮に入れて六郷堰の存在を考えてみると、どうも當

時は六郷堰がなかったと考える方が自然なように思われる。もしかりにあったとしても、それは後世のそれの如く大仕掛なものでなく、位置ももつと下流の少なくとも小松原附近であったと想像されるのであるが、あの附近の地名その他に、その名残らしいものが見受けられぬから、むしろ御幸記時代(西一二〇一年)前後にはまだ六郷堰は存在しなかったとするのが地形學上妥當ではあるまいか。

## 8

以上で私の獨斷と淺見に充ちた六郷堰雜考を終わるわけであるが、これをつゞめて云えば、六郷堰は鎌倉時代初頭(西一二〇〇年代)にはまだ存在しなかったが、徳川初期(寛文は西一六六〇年代第四代將軍家綱時代)にはその創設年代が既に不明になっていた。即ち、六郷堰は一二〇〇年代から一六〇〇年代の初頭の間に創設されたものらしいということになる。六郷堰はその使命を若野堰にゆづつて、今では日高人からその存在すらも忘れられた一舅跡にすぎないが、私は自村のことであり今も限りない愛着をもつ大方諸賢の御教示と、本堰に関する如何なる零細な資料と雖もお知らせ賜り得ればまことに幸せである。

X

X

一、本稿脱稿後、日高川水利組合長である野口村長井谷重雄氏から「六郷堰記念碑」は既に石屋にできていた頃で、近く建碑の運びであると聞いた。私が六郷堰記念碑建設を思いたち、當時の水利組合長二階俊太郎氏に懇願して二年余になる。この間丸山源次郎氏、その他各位の御盡力によって正に実現を見んとしつゝあることはまことにうれしい。この機會に厚く御禮を申し上げます。

二、御幸記の所謂「小松原御所臨深淵云々」について、本月十九日塩屋王子神畔における南紀郷土學會四月例会席上、大分問題となったが「臨深淵」は文字通り深淵とするよりも、もつと軽く、たゞ河流と解し、日高川の一流に臨んでいたとするのが妥當ではないかという意見が多かった。そうなる私の想定が少し變つて来るが、本稿はどこまでも大方諸賢くの御教示を得るための試論である。どうか忌憚のない御意見をお聞かせ願いたい。

(完)

# 日高川渡し畧考

「紀州新聞」昭和二十七年五月二十七・八・九日掲載

工費八百三十万円・長さ二〇八米・幅三、六米、日高川中最長とといわれる野口橋が竣工したことは近村に住む私どもの大きなよるこびであるが、一面沸きかえる歌聲のかげにさみしく消えゆく渡し船の姿に深い哀愁を感じる。この工事に盡力された人々のうち、野口村役場林松二氏は深く渡し船を愛惜されて、あれは一体いつ頃からあつたのだろうかと聞かれたので、諸書のうちから渡し船関係のものを拾ってみた。

日高の地は、はやくから牟婁の温泉や熊野への通路にあたり、天皇や貴紳が幾度となく通られ、その度にどこかの地点で日高川を渡られている。古いところでは齊明天皇の四年(西六五八年)天皇牟婁の湯に行幸あり、つゞいて有馬王子が牟婁に護送されて

磐代の濱松が枝をひきむすび、眞幸くあらばまた歸り見ん。

家にあらば筥に盛る飯を、草枕旅にあれば椎の葉に盛る。

と無限の哀感をたゝえた歌を遺されたことは誰も知るとおりであるが、時代が古いのでどこで渡られたのやら、まして徒渉されたのか渡船によられたのか今は知るよしもない。

これより少し時代が下がると熊野三山が有名になり、延喜七年(西一二八一年)龜山上皇の御幸まで、法皇・上皇の御幸およそ百六回、このうち後白河上皇の如きは実に三十數回にわたって熊野に下られている。しかもこれらの御幸はなかく大がかりなもので、元永元年九月(西一一一八年)白川院の御幸の如きは、供奉人員八百十四人、一日の糧糧十六石二斗八升、傳馬百九十四(「熊野三山經濟史」による)というから、一度御幸があれば沿道は非常な騒ぎであつたに違いない。しかしわづかに遺された紀行文などをみても、記述が簡單で、これだけの大人數が徒渉か船か又は仮橋によつたかはつきりしない。天仁元年十月(西一一〇二年)藤原宗忠卿の「中右記」十月十九日の條に

(前略)過道場寺(道成寺のこと)前渡日高川(河水大出)向女房兩三人居河岸不知誰人仍遣駕渡又送菓  
子等(下略)

とあつて、宗忠は河岸にたゞむ女の一行に菓子を贈り駕を遣し、ひどく親切にしたと書いているが、どうして渡河したか記していない。しかし文の前後から察し、又思案にくれていた女連が駕を貰うや、忽ち渡河している所からみて、渡し船でなく大井川式に駕で渡つたと想像される。やゝ下がつて建仁元年(西一

二〇一年）後鳥羽院の御幸の際は

（前略）遙尋宿所いわうち王子（下略）

とのみで、渡河方法が明らかでないが、渡河地点が後世の天田附近より大分上流であったことが窺われる。

この少し前、建久九年（西一九九八年）後鳥羽院熊野御幸に天田浦岡本左近之輔が船を出し、濁流に惱まされた院を参らせたという。所謂「五本骨の扇」のことがあるが、これは色んな点で疑問があるからここでは觸れない。

## 4

下つて應永三十四年（西一四二七年）に作製されたと推測される「道成寺縁起」には（辰野辰之博士「道成寺藝術の展開」）はつきり渡し船の圖がある。もとよりこれは縁起のことで、當時の風光をそのまま寫したものではないが、といつて渡し船も何もないものを繪巻物の中にのみ描いたともいゝ切れない。やはり程度當時の日高川の状況を反映したものではなからうか。とに角日高川渡し船の圖としては一番古いのではないかと思う。

## 5

時代が更に下がつて徳川期に入ると渡し船の記録も段々正確になる。即ち「名屋浦鑑」に左のような記事がある。

一、寛永年（一六二四〜四四年頃）中日高川舟渡来た塩屋浦に譲る

右一札等取遣無之といえども於當村は永代無賃也

是證據也

寛永は西暦一六二四年から一六四三年まで、三代將軍家光の時代、紀州では南龍公の治下のことである。これによると寛永以前かなり古くから渡船のあったことがはつきりわかる。次いで元禄二年（西一六八九年）頃のものゝ推定される筆者不詳の「熊野獨參記」に

島村を経て日高川天田川共に至る、川はゞ七町半 常は徒渡り、洪水には渡船有 之旅人の船賃不定、近里の者は秋麥米を以て之價

とある。文中天田川とあるのは熊野川のことであろう。これによると普段一般庶民は徒渉したものとみえる。おもしろいのは同書の中に切目川を

切目川幅五十間、常は徒渉洪水には船なき故往来留る也  
と記していることである。

それが寛政十年(西一七八九年)林信章の「熊野詣紀行」になると

ふじい村人家多し 土橋を越えて右へまがり日高川の端へ出、はるか堤つたいに同じ川の下なる、  
あまだのわたし場へゆく、此間並木の松原也、右に小松原しま村など見やりて行、日高川、印南へ  
三里、あまだの渡し川幅二丁余有(後略)

とあって、天田の渡しは容易に想像出来るが、まだ藤井の渡しはなかったらしい。何故ならば野口藤井間  
に渡しがあれば、わざわざ天田まで行かず下野口か小森附近へ渡る方がずっと近く便利だからである。  
この頃には元禄頃になかった切目川の渡し船も出来ていたと見え

きりべ村、人家立ちつゞく、宿・茶屋あり

御所畑、後鳥羽院、建仁元年熊野御幸頓宮の跡なるよし

きりべかわ川舟渡し半丁ばかり

と記されている。ついで嘉永七年(西一八五一年)発兌の「紀伊國名所圖會」後編六の巻に

日高川熊野官道、山田庄名屋浦より北塩屋浦枝郷天田村へ渡し舟あり天田の渡しという、云々

の記事と、もに日高川渡場の繪圖が掲げられ、二雙の渡舟に各數名の男女が乗り組んで渡っているところ  
が描かれている。さらに同五の巻には

「日高郡藤井の舗行より総糸を積出す圖」

というのがあり、川沿いの問屋から盛んに総糸を船積みしている圖がある。これは直接藤井の渡舟を書い  
た描いたものではないが、これだけ多くの川船を利用しているところや、藤井の繁榮ぶりから考えて、野  
口・藤井間の渡し船もこの前後から設けられたものとみて余り誤りはあるまいと思う。

## 6

天田の渡し船が橋に變つたのは、「日高郡誌」によると

明治九年三月山下高晴の請負で始めて仮設され、通行料は一人一回三厘であったが、同年七月の洪  
水に流された、云々。

また明治九年或は十年頃に作られたと覺しい「名屋浦村誌取調帳」には

架橋 當浦領字五軒家より北塩屋浦枝郷天田浦領に架して日高川流にあり、木製にして橋長六十二

間・巾一間熊野往還に屬す

とあり、土木所の記録では

天田橋は明治三十八年三月始めて架換工費四千五百二十八圓

とある旨、大正十二、三年頃の紀南新聞に堅田三千穂氏が書いているが、この記録が今どうなっているかわからない。天田橋が今の鐵橋になったのは昭和六年の事で工費十八萬圓であったと、いつか中川藤吉氏から聞いた。

以上極めて大ざっぱな渡しの変遷史であるが、日高川下流が現代の流路になったのは、元和(西一六一五)一六二三年)年中の大洪水の結果であつて、それまでは現日高々高校西館の西から松原村濱の瀬、今の大川橋の下流、切れ戸のあたり鶉の巢で海に入ったという。これを念頭に入れずに日高川口が今も昔の現在の所と考えると、古い時代の渡し解釈がおかしくなる。  
(おわり)

## 南方熊楠翁余聞

「紀州新聞」昭和二十七年六月二十四・五・六日

### 1

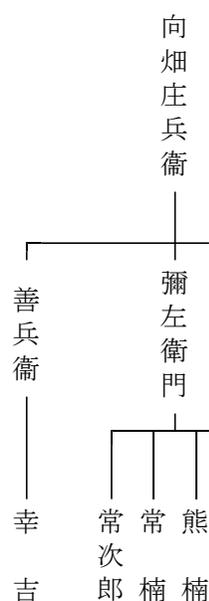
紀州が生んだ世界的學者南方熊楠翁の嚴父が日高郡矢田村大字入野向畑家の出であることは翁の全集中和あることや  
父は日高郡に今も三十家ばかりしかなき極めて寒村の庄屋の次男なり

日高郡矢田村の大山神<sup>神</sup>は郡中一、二を争う名<sup>神</sup>にて(中略)熊楠の<sup>祖</sup>先が四百年來この<sup>神</sup>を奉祀して來り云々

の記述で明らかであるが、これを簡単な系譜にすると次のようになる。

半右衛門 — 庄三郎 — 庄太郎

彌兵衛



即ち和歌山雜賀屋に入習し南方姓を名乗り、熊楠翁を生んだのは庄兵衛の二男彌左衛門であつて、長男半右衛門は向畑家を繼ぎ庄三郎を生んだ。三男善兵衛は昨春物故した夏柑王古田幸吉氏の父にあたる。

こんな關係で翁と日高とは縁が深く、翁はしばく嚴父の生地である入野を訪れた。田辺市の郷土研究家で南方學者である雜賀貞次郎氏の調査によると、翁の日記は明治十八年(一八八五年)に始まり

明治十九年四月六日 和歌山出發水尻村(有田郡藤並村水尻)一泊、七日入野泊、十一日塩屋に至り羽山氏と鉛山に遊ぶ。

六月二日和歌山から入野泊、七日塩屋へ。  
十月十五日和歌山から湯淺へ、十六日入野、十七日和歌山へ。

と以上二回以上にわたり入野訪問のことが記されているという。後年あれだけ高名であつた熊楠翁、若かりし日の入野における生活はどんなであつただらうか。

## 2

南方翁が私方で遊んだのは明治十八(一八八五年)、九年、何でも二十二年の大洪水前であつたと聞きました。そのときこの部屋で半歳近く居られたと云います。今六十七才の向畑庄太郎氏は兩親から聞いた物語を回送しながら語つた。翁が滞在したという部屋は、表の納屋を仕切つて作られた六疊ほどの質素な離れである。

「少し体を丈夫にしたい」若かりし南方翁はこう云つて、こゝから一里余り離れた塩屋の濱へ海水浴に通つた。「今日は渡し錢がなく、天田の船頭めが渡しよらぬ。仕方がない川を入れて渡つた」。生涯經濟的に恵まれなかつた翁はこの頃から既に貧乏であつた。しかし後にアメリカ三界から歐洲と世界中を歩きまわつた翁にとつては日高川の徒渉ぐらいは何でもなかつた。

無頓着な翁は向畑家で作つた辨當当を砂濱にほりつぱなして泳ぎまわつた。いざ食べようとすると握り飯は蟻で眞黒であつた。「胡麻と思えば氣にならぬ、蟻ごと食つてしまつた」。ケロリとしながら語つた。

こうして毎日尾の崎海岸で遊んだ翁は、こゝから遠からぬ北塩屋羽山家へも時々立よった。羽山家は今絶家したが、醫を業し近郷に聞こえた名家であり、大學豫備校時代の親友繁太郎の生家であった。羽山家では息子の學友で和歌山南方家の令息というので厚くもてなしたが、余りに再三の訪問と無雑作な翁の振舞には閉口されたらしい。「羽山の婆さん、初めは御馳走してくれたが、このごろは麥飯を食わしよる」と笑われたという。また酒好きの翁は出された銚子をググツとラツパ飲みして上品な羽山夫人を驚かしたこともあった。とにかく天眞ランマンと云おうか、純情小兒の如しと云おうか翁の行動には常人の尺度では律知られぬところがあつた。

向畑家でも翁の食事には手をやいた。かし椀や平はおかえししないのが作法上常道になっているが、翁は美味しければ何回でもおかわりを請求して向畑家の主婦をまごつかせた。それで向畑家でも一策を案じ翁の副食物はなるべく辛く作ったという。

或朝であつた、早くからしきりに井戸水を汲む音がする。そのうち通りかゝつた村人が「向畑さん、今日は井戸換えでもなさるんですか」とたづねて来た。「そんなことはない」と出てみると翁は懸命に井戸水を汲んではサツと打ちあけている。捨てられた水は土管から瀧のように流れる。翁は早速つるべを置いて土管の側へしゃがみこんで流れ出る水に見入つた。流れてしまと又汲み上げては流す、そんなことを飽きずに何時までもくりかえしていた。

こうして毎日泳いだり植物を採集したりすること半歳、「婆さん長生きしろよ、俺はアメリカへ行くがお金をどつきり持つて歸るからナ―」といゝ置いて和歌山へ歸つた。明治十九年十月のことであつた。爾來十五年はアメリカはおろか世界中を廻つた翁は約束の金は一文も持つて歸らなかつたが、そのかわり何物にもかえ難い數々の學問を土産に日本に歸つた。

### 3

前にも一寸書いた通り羽山家と南方翁の關係は古いが、羽山家絶家後その交渉は故羽山大學翁の忘れ形身信恵女の婚家、塩屋村山田家に移つた。今南方熊楠全集第一巻に収録された數篇の書簡はこうした經緯を傳えて余すところがない。殊に昭和六年八月二十日岩田準一氏に與えた書簡の如きは全篇羽山家をしのぶ切々の文字に満ちた美しい詩である。世界の學界に名を馳せ、時には傍若無人とまで見えた翁にこのように深く優しい愛情のこもつた手紙を遺させた羽山一家は余程すぐれた人々であつたであらう。とに角以上のような關係から山田家には多くの南方翁の書簡をはじめ遺品を藏し、一部は昨年の南方展覽会に出品

された。

#### 4

もう一つ翁の面目を伝える面白い話がある。昭和四年六月天皇陛下が田邊灣に行幸された折りのことである。生物学に御造詣の深い陛下は、白濱の京都大學臨海研究所へお成りになった。研究所では各種の標本類を献上したり天覧に供したが、これがため多くの學者が準備にあたった。白崎村大引の貝類研究家として有名な神田耕一郎先生も縣の委嘱を受けて整備にあたった一人であった。或日仕事も一かたつきしたので京都大學教授岡村金太郎博士と二人で翁を訪ねた。この時南方翁は玄関に近い一室に部屋一杯粘菌や植物の標本を取散らして足の踏み場もない中で、例の半裸のまま顕微鏡をのぞいていた。二人が入ると一寸ふりかえったまゝ言葉もかけず再び顕微鏡に食い入った。岡村博士も神田氏も翁の氣性を知っているので玄関の竹床几に腰をおろして待った。一時間近くも待ったであらうか、やっと研究に區切のついた翁は、はじめて二人に聲をかけ、散らばった標本を押しつけて座をすゝめた。話はすぐ粘菌や植物類に移ったが、しばらくして傍らの一枚の標本をとると「これを知っているか？」と無雑作に岡村博士にきいた。「あゝ〇〇でですね」と博士が答えると、「これは？」とまた次を示す。こうして十數枚の標本が次々と岡村博士に示された。海草類研究の權威として聞こえた岡村博士を相手に丸で中學生にでも聞くように「これ知ってるか？」は全く翁でなければ出来ないことであった。「あの時はおどろいた、標本の名を問われたのは大して困らなかつたが、標本の學名が何と英語で書いているかと思えばドイツ語かある、ドイツ語があるかと思えばフランス語やラテン語で書いていた」。後、岡村博士は當時を回想してしみぐ語ったというが、英・米・佛・西・その他十數カ國の國語に通じたといわれる翁は、そのときの氣分のむくまゝ自在に各國語で記されたものとみえる。とかくする程に台所で何やらガタ／＼していると思うと、女中が大きなバケツにビール瓶を十二・三本冷やして運んで来て、まあ一杯ということになった。と何時の間にも連絡したのか田邊新地のきれいどころが三・四人「先生、今日は」とやって来た。翁は「やあ」と答えたまゝ上がれとは云わぬ。藝者達も心得たもので、玄関のさつき岡村博士と神田氏が待った床几に行儀よく押並んで翁の言葉を待った。やがてビールがまわり座が賑やかにになると、南方翁は座敷から「おいあれを歌え」と古い小唄を所望した。藝者はかしこまって腰掛けのまゝ注文の小唄を歌い三味線をひいた。こうして奇妙な宴會がつゞいたが、時間が來ると女達は「先生おゝきに」とさっさと歸っていった。これは神田耕一郎翁の直話である。

(おわり)

# 山口華城翁のことなど

「紀州新聞」昭和二十七年七月二十六・七・八・三十日

## 1

山口華城と書いても知らない人が多かるう。華城というのだから中にはお花の先生かとも思う人があるかも知れぬ。翁はもとく大阪の人で、若い頃和歌山市に移って永く舊六十一聯隊の主計將校をつとめた。翁が和歌山市に住んだとき最初に考えたことは、紀州は昔から徳川御親藩として天下に威張ったものだが、それなら一体紀州にはどれだけ独自の文化があるのか、どんな人材を出しているのか、どんな學問があるのかということであった。これが翁の紀州研究の動機であった。爾來四十年、業余にこつくと研究にため、紀伊の人物と紀州本の研究では縣下では第一人者になった。

## 2

私がかねがねこの勝れた先學を訪ねたいと思うていたが、本年六月二日上和のおり、幸いにもその機会を得た。翁の住居は和歌山市南仲間町にある。縣廳前で市電を降り廣い通りを雨に降られながらぶらぶら歩く。程なく縣廳の前に出た。私はぼんやり者だから用もない方々のお宮やお寺はよく知っているが、縣民の一番大事な御役所である縣廳をみたのは初めてである。そしてその堂々たる建築にびっくりした。建築の巨きさに驚いたのではない、余りにも附近の情景とかけはなれた建物に驚いたのである。

御承知のように和歌山市は昭和<sup>一九四五年</sup>二十年七月の空襲で大半焼け野原となった。殊に縣廳附近はひどかったとみえて、未だに復興は一向進んでいない。附近の住宅は殆んど踏みつぶされたマツチ箱のような被災住宅のまゝである。その焼け野原のマツチ箱を見下すかのように縣廳は威容をほこっている。廳舎が立派なのではない、市民の住宅が余りにも惨めなのである。縣廳が近代的西洋建築だから焼け残り、市民は平素の心掛けが悪く、紙と木の家に住んでいたから全焼したのであることぐらいの理屈は私にもわかる。また縣や國に金がなくて、一般市民の住宅にまで手が廻らぬということもわかる。しかし、このへだたりは余りにもひどい。政治家はもつと誠實に眞劍に大衆の幸福を考えてみる必要はないか。こんな柄にもないことを考えながら、なお雨の中を行く。

和歌山の山口華城と云えば少なくとも、私共仲間では誰知らぬ者はない存在である。町内で聞けば女、子供でも知っているくらいに思うていたが大間違いであった。「豫言者は故郷に容れられず」というが、山口翁もその類であつた。ちようど行く手に醬油屋が目についたので、そこで聞いてやつとわかつた。

### 3

山口翁の家もその見すばらしい戦災住宅の一つであつた。私が訪ねたとき翁は窓をあけて激しく降る雨足を眺めていた。家は壁もない板張りの二間切りしかない文字通りのあばら屋である。これがあの有名な紀州本研究家華城、山口藤次郎翁の家かと私は再び驚いた。

翁はさきにも述べたように、陸軍時代に紀州研究を始めて、中頃徳川頼倫侯の知遇をうけ南葵文庫にも関係し、また紀陽銀行の重役で紀州本蒐集家として聞こえた和中金助氏の蒐集顧問のようなこともやり、研究上の便宜を得た。昭和七年(一九三二年)には紀藩の草本家畔田翠山翁の傳記「贈從五位畔田翠山翁傳」を世に問うた。その他「紀伊國史年表」等いくつかの著述構想をもち、三十年間心血をそそいだ「紀州諸名家著述目錄」(収容書目七千冊)「紀州著述家人名録」(登載人員千五百人)の二著をまさに上梓せんばかりにしていたが、昭和二十年七月九日の夜、幾多の藏書ととも防空壕の中で焼いてしまった。しかし翁はくじけなかつた。罹災後のはげしい生活と闘いながら、再びこの困難な仕事と取組んで、二書共もうすつかり完成している。しかし世の中は變わつた、この尊敬すべき著作も今のところ何時出版出来るか見當もつかぬとさびしく笑つた。山口翁は今七十七才である。

### 4

この二著がどれだけ値打ちのあるものか、またこれが出版されたら紀州文化研究上貢献するものかは、いそがしい世人は見當もつかぬであろう。そんな無駄なことに金をつかうよりは、和歌山城のお濠でも埋めたてゝパチンコ屋でも開業させ、税金をとる方が國のためだと爲政者の多くは考えるであろう。あゝ又何をか云わんや。翁の二著の原稿は白紙にでも書いてあることか、洋装の古本をそのまま利用して印刷文字の上に達筆で墨書きしているのである。成程こうして書けばよくわかるし、第一用紙代も助かる。しかし何故こうまでして續けてゆかねばならないのか。一般人には容易に理解し難いに違いないが、まことに涙のこぼれるような話ではないか。

### 5

無遠慮な私は、づけくくと色んな愚問を発しながら四疊敷ほどの狭い部屋をながめまわした。部屋の片

隅には薄い蒲團がつんである、押し入れ一つ無いのだ。しかもこの貧しい部屋におよそ不似合いな蓋付きの立派な本箱が二つならんでいて、「紀伊國名所圖會」と「雄渾」に書きつけてあり、もう一つには「紀伊續風土記」とある。今一つは蓋のない割合粗末な本立で、これは眞新しい「南紀徳川史」十六冊が背の金文字を光らして行儀よくならべてある。その他部屋の板張りに沿うて自製らしい本棚が取つけられてあって、各種の辭典類など數十冊の書物がならんでいる。何しろ屋根も板ぶきだから、少し大きな雨でも降ると雨漏りでもするのであるう、本棚の上には丁寧な板でおほいを取つけてある。「戦災後お買いになったのですか」、「そうです」翁は靜に答えられた。恐らく罹災後の苦しい生活の中で、食べるものまで節した上で求められたのであろうと、私は翁の心掛けに自然と頭の下がる思いがした。「南紀徳川史」も戦争直後、五、六十円でごろくくしていたが、最近は高くなつて私も欲しいくと思ひながら、つい買ひそびれています」、「そうですね、あはまあ、一應目を通しておかねばならぬが、大分間違つた所がありましてね」翁はその中の一冊を取り出して私に示した。そこは紀藩の草本家として聞こえた小原桃洞を記した頁で、「こゝでは桃洞とその孫蘭峽とが混同されている」、と鋭くその誤りを指摘され、和歌山市大恩寺墓地で土中に埋もれていた桃洞の墓を掘り出されたときの話を面白く語られた。

## 6

こうして小半日翁からいろく教えを受けた私は市内の古本屋を二・三廻つて歸途についた。汽車の中でも窓外に降る雨をながめながら、私の思いは何時までも山口翁のことから離れなかつた。山口翁は現代貧しい生活をしておられる、失禮な想像を逞しくすれば、恐らくその日の生活にも不自由しておられるのではないかと思う。翁はもともと勤勉な人で文化人としてつゝましい生活をしてきた人である。普通りなれば裕かな晩年をおくられる人であつた。戦争が翁から一切を奪つたのである。しかし翁自身は余りくつたなくされてゐる風には見受けなかつた。私がこんなことを書けば恐らく「余計な心配をしてくれるな」と叱られるであろう。だがこれが和歌山市として翁を遇する道かと考へた。四十年の長きを郷土研究にさげ、紀州本研究者として至實的存在である翁をこのまゝにして置いてよいのかとも考へた。

由來人間には二つの型があるかと考へている。一つは金儲けの上手な実業家型であり、一つは學者や藝術家に多い消費型である。一般の人から見ると學者や藝術家は世事にうとい穀つぶしである。しかし世の中からこの無用な氣まゝな者を除いたら、評会は進歩もないし、うるほいのない砂漠となるであろう。國家は先年來文化勲章の制を設けて、毎年文化功勞者の勞つてゐるが、縣や市あたりでもこうした制度を設け

たいものである。また「紀州諸名家著述目録」のようなものを出版したり、紀州関係の古寫本の復刻を考  
えてほしいものである。

和歌山城が焼け、南龍公以來三百年の威令をほこった徳川家も次第に忘れられつゝあるが、「紀伊續風  
土記」や「紀伊國名所圖會」を遺した治寶公の名は永久に紀州文化史上から消えない。昔和歌山縣神職會  
という會があつた。神主さん達の會で、この會は何一つろくな仕事をしていないが、明治の末年に同會が  
中心となつて「紀伊續風土記」を復刻刊行した功績だけは永遠不滅である。名知事といわれる小野さんも  
思い切つてこうしたことをやってみる氣はないだろうか。大したことはない二、三百万円もあれば充分出  
来る。これ位のことでも出來ずに何の文化國家ぞや。

(おわり)

## 明治初年の御坊

「新紀州新聞」昭和二十七年七月十五日掲載

### 1

昭和七・八年頃和歌山の浜田康三郎氏が刊行していた郷土研究雜誌「紀伊郷土」に石村鷺森という人が、  
「幕末の和歌山」と題する随筆風の讀物を連載してゐる。

これは題名の通り幕末の和歌山の様子を書いたものであるが、こんな風に御坊のことも書いてみたら面  
白からうと考える。然し幕末と云うともう百年以上になつて、その時分の人は誰も居ない。せめて今のう  
ちに明治初年の御坊を書いておこうと計画しているが、こんなことは中々一朝一夕にはゆかない。以下、  
この間うち一・二の古老から聞いたところを順序もなく書きつけてみた。

もとより正確な資料によつたものではないから、中には古老の記憶違いもあるうし、私の聞きあやまり  
も少なくないことゝ思うが、それらの点は遠慮なく御指摘を願いたい。私は何年かかゝつて、より詳細な  
明治初年の御坊を書いてみるつもりであるから。

### 2

今の小竹八幡宮の地は寛永八年(西一六三一年)から延宝二年(西一六七四年)にかけて、徳川頼宣卿の別

邸菌御殿のあったところで、町幅のせまい御坊としては、あれから裁判所前へかけて珍しく廣い。これは御殿のあった時分、この廣場で供揃いなどした名淺であると云われる。

今裁判所の建物のあるあたりも、明治初年には三軒の民家とお藏があつた。お藏と云うのは藩へ納める年貢米を収納する倉庫で、菌浦の年貢は一たんこの倉へ収納されて、こゝから金兵衛河岸まで運び出し、和船で和歌山へ送つた。(船まで運ぶのはみんな肩におつたもので、担ぐにはヒューと云う独特の道具を用いた)

その時分の新町は、無論今日のように家が立ち並んでいた訳ではない。主だつた家を挙げると

「葵美人」の吟醸元、伊勢屋(田淵理一郎氏)、これは現在の位置にあつて、そのころも酒造業を営んでいたが、酒造高は今よりも少なかったらしい。

伊勢屋田淵理一郎氏の三代前の善兵衛氏のこと、今年正月の本誌に藤田君が一寸書いていたが、中々傑物であつたし、また面白い風格の人物であつた。

伊勢屋の向い、先年爆弾でこわれた所には、伊勢屋の分家田淵與兵衛氏があり醬油の小売業をしていた。つゞいて東には伊勢屋の米搗場兼物置があつた。酒造用の米は小熊や小松原方面の水車で精白したので、こゝで搗いたのは自家の食糧米であつた。再び伊勢屋の並びへ戻ると、伊勢屋の東隣りは今と同じ野村氏邸であつた。野村氏は屋号を堀河屋と云つて、そのころも醬油製造を手びろく、阪神方面へ積みだしてゐた。

野村氏の邸内には一抱え以上もある松の太木が幾本もあり、女・子供は日暮れ時になると何となく薄氣味の悪い程であつた。無論堀河屋八五四年以東はずつと家がなく畑地で、此の附近から遠く浜の瀬の人家が見えたという。このころは例の安政の大津浪から二十年そこそこしか経ていないので、随分荒廢していらつた。堀河屋の向いは菌庄衛門といつて菌喜太夫翁の分家があつた。今の塩路醫院はその趾へ建てられたのではないかと思う。それから少しおいて菌喜太夫邸である。

菌氏は屋号を日高屋と云ひ、代々廻船業を営む豪家であつた。有名なアメリカ漂流の天壽丸はたしか菌家の持船であつたと記憶する。然しどう言う事情であつたか菌家では、當時既に廻船業をやめて蠟燭製造をしてゐた。これは慶応から明治初年にかけてのことであつたらしい。

そのころは山間部の村々や、河沿いの堤にはハゼが澤山あつたもので、ハゼの實の收穫は当時の農家にとつては、相当大的な収入になつてゐた。事実これはずつと新しくなるが、筆者が少年のころまで毎年秋になつてハゼの實が熟すころには、筆者の村へもハゼの實を商ふ人が來て、河傍のハゼの木に上つて実

をとつてゐるのをみかけたりし、幼年時代 誦母に連れられて御坊へ行った歸りには、出嶋堤の中程のハゼの木の澤山並んだところで、歸りに買った「たち久」（島にあった料理屋）の狐すしを食べたものだ。

話は横道に外れたが、明治十二、三年頃と覺しい「菌浦村誌」物産の條に、蠟燭千百二十貫とでゝいる。菌家では田邊・南部・時としては大阪方面から粗蠟を仕込み、此れを蠟燭に精製して、大阪・江戸方面へ売り捌いたもので、無論まだ電燈も「ランプ」もないし、おまけに維新前後の物騒な世相であつたから、飛ぶように賣れたものだと言う。粗蠟の製造業者は御坊にもあるにはあつたが、何れも小規模なものであつたらしい。

菌家の向ひは前記のようにすべて畑地で、東の外れ近く、今の岩崎眞藏氏邸があつた。岩崎家は西川屋とよんで藩の御用飛脚を營んでゐた。詳しくはまだ知らぬが、飛脚と言うても、今日の印南通いや三尾通いと異なり、藩御用と云うので、中々格式ばつたものであつたと云う。

## 選挙回顧録

「新紀州新聞」昭和二十七年九月五日掲載

### （夏見康太郎翁の思い出）

#### 1

こう云うと

「それだから何時までたつても駄目なのだ」と、忽ち輿論の袋叩きにあいそうだが、選挙がはじまつて以来、大新聞も地方新聞も糞面白くない選挙記事がのさばりかへつて、一向興味がない選挙なんてものは、そうやいやいや云つて貰わなくても、子供ではあるまいし、各自が然るべき人を選べばよいことである。適任者かどうかは今さらあはてなくても、所属政党が何をして來たか、候補者が普斷（普段）の行状が如何であつたかを見れば判断がつく。

#### 2

私は昔から小生意氣な少年であつたから、十一、二歳の頃から大人にまじつてこそくと政談演舌を聞いてまはつた。

中でも印象に残っているのは、何といつても故田淵豊吉氏や前田榮太郎氏の演舌である。田淵氏のこと  
は何時か「紀州新聞」へ書いたからくりかへさぬが、あの演舌は全く一種独特の型破りのものであった。  
政談演舌とも、宗教談とも、哲学講演とも何とも得体の知れぬものであった。田淵氏は普通の候補者のよ  
うに無闇に頭をさげて投票を頼むようなことはしなかった。それどころか如何かするとあべこべに有権者  
を叱りとばした。それでいて妙に人氣がはなれなかったのは矢張り氏の並々ならぬ學識と徳望によつたも  
のであろう。

前田榮太郎氏も田淵氏に劣らぬ雄辯家であった。その政敵を攻撃し、政策を批判する時は烈々として舌  
端火を吐いた。大正<sup>(一九二三年)</sup>十二年<sup>影</sup>氏がはじめて縣議戰に打って出て、政友会の古豪白井藤楠氏を物の見事に打破  
つたのは、当時<sup>詳</sup>ホウハイとして興つた民主主義の波に乗つたとは云へ、全く氏の辯論の力であつたのだ。

### 3

こうした二人とは全く對照的であつた人に夏見康太郎氏がある。私が夏見さんを知つたのはその晩年の  
數年で、そのころ夏見さんは本町三丁目、今の岡崎醫院の前で書店を經營していた。あの頃岩國屋は文具  
や荒物を主として書籍に力を注いでいなくなつたし、ミクニ屋書店等も今のように近代的な書店でなかつた。  
そこ處へ出現したのが夏見さんの本屋である。

色の青白い文學青年であつた私は御坊へ出る度に、夏見書店でロクでもない文學書を買込んだ。その時  
分も夏見さんは矢張り縣會議員をしていたからめつたに店には居なかつたが、どうかするとつくねんと店  
に居る姿を見かけることもあつた。もう年輩であつたからか、店にいる夏見さんは何時もにこにこしてい  
た。全く童顔という感じで、これが日高政友會の長老として、權謀家の本家のように云はれる人とはどう  
しても見えなかつた。私のような小僧子にでも、中學生にでも氣輕に話をした。

夏見さんの演舌嫌いは有名であつた。政界生活何十年の間にも政見發表なんて、恐らく只の一回もやつ  
たことはなかるう。今ならそれだけでも政治家として致命傷だが、結構それで通つた時代である。

何時の選舉の時であつたか、その夏見さんが政見發表をやるというので聞きに行つた。

会場は村のお寺であつた、聽衆が二、三十人暗い電燈の下に集まつていた。辯士が何人あつたか、夏見  
さんが先にやつたか、後でやつたかすつかり忘れたが、只夏見さんが急製の演壇にはにかみながら起こつ  
て、全くこの時、政界幾十年の古強者の夏見さんは、二八の少女のように顔を紅くしてはにかんでいた。  
下をみながらブツブツ小さな聲で何か云つたかと思ふと、ペコリと大きく頭を下げて、それで終わりであ

った。ものゝ五分とかゝっていない、全くアツケないものであった。然し私はこの時の夏見さんの妙にはに cand 顔が今も眼にうかぶ

(完)

## 至誠縣民のために

### 盡すか監・せよ

#### 西川事件最後の途

「紀州新聞」昭和二十七年六月二十七日掲載

二十一日付け貴紙所載の西川事件に関する御論説、まことに愉快に拜見致しました。貴説一々御尤も。実は私は西川氏を深く知らざるも縣議の關係で二、三回同氏が私の勤め先へ見えたとき、言葉遣いや行動が甚だ横柄、傲岸で、私はその都度陰ながらこの人、斯様な心構えを改めなければ、何時か何等かの蹉跌を來すだろうと案じていた矢先き、あの差別事件となりました。

私は何と言っても差別をしたことは事實なのだから、これは悪いことに間違いない。悪い事なれば陳謝すべきで、その後の経緯から見ても被差別部落の人々が憤り、更に改める所なければ有効適切な行動をとることも止を得なかつたと思う。

そして最後に西川氏が補欠選挙に立候補したことは私の常識では一寸理解出来ぬところで、これは普通の神經の持主でないと思つたが、中野氏が対立候補となつたので、私は自分のヒューマニズムの立場から黙諷できず勝敗は兎も角として、法の許された範囲で極力中野氏を應援したが結果はあの通りであつた。これは大体豫想した通りで、全力を盡した結果であつてみれば、私としても何の悔いる所がなかつた。しかし部落の人々の心情はしらく簡單にゆかぬことは推察するに難しくない。が審判は下されたのであり、民主國の國民としてはこれに従うしかない。

西川氏が貴説の如く事件以後、少なくとも選挙後、従來の川上の殿樣的ド根性をすっかり改めて至誠縣民のために盡すかどうか私共はしつかり監諷したい。それより方法はない。貴説の如くこれ以上學童休校、供米拒否と鬭争を發展させるとせば重大な社会問題であり、ひいては部落解放に協調陣營にある人々をも

反動側に走らせる恐れなしとしない。それは結果からみて積善運動にプラスとはならぬ。私は政治とか社會運動に口出しする程の識見はないが、この問題には深く関心を抱くが故に所信を陳べました。(一公務員)

× ×  
本記事は「紀州新聞」理事長源地武夫氏宛私信ありしを、源地武夫氏が紙上に公表せるもの。

## 講 書 談

「新紀州新聞」昭和二十七年十月二十五日掲載

年中貧乏しているくせに、ろくでもない本だけ少し集まった。上戸は寒いと云っては一本、暑いと云っては傾ける一杯に無情の幸福を感じるらしいが、私は本を見ている時が一番楽しい。忙しい日が続く時は書架に並んだ本の背文字を眺めるだけでも、生きがいを感じる。

と云うものゝ、本の値段は私共にとっては常に少なからぬ負担である。給料日には何はさておき、本屋の借金を、いの一にかたつけることにしているのだから、何時の間にか払い切れぬ借金が残る。一冊の本を買う毎に、これだけあれば闇米の一升も買えて、女房がよろこぶだろうにナーと思いつつも、ついふらくと買ってしまふ。

戦争前後一人で大阪にいた時分、割合時間に余裕があったので、閑暇さえあれば大阪中の古本屋をうろつきまはった。

食糧の不自由な頃だ、配給の小麥粉で作った怪し気な団子を二つ三つ鞆にねじ込んで住吉の家を出る。難波付近、南の古本屋を一巡して、こつくと御堂筋を梅田迄歩いた。梅田界限の古書屋を見て廻ると大低屋になる。そこで阪急食堂で持参の団子を食ひ、午後は阿倍野筋へ出て、旧大阪高等学校附近まで歩く。これでちょうど一日のよい行程であったが、時には千林や淡路、また南田辺へん迄行った事もあった。おかげで今でも、大阪の古本屋は大低顔なじみであるし、露地や小路のすみぐまで本屋のある処なら詳しく知っている。

こうして古本屋の主人達と次第に親しくなつてゆくうちに、若い時分和歌山縣の野口村で小学校の教員をしたと云う老人などもあった。たしか前田という姓であったと思う。

この人に奨められて、小野芳彦翁の「熊野史」を買ったが、当時の私は郷土史に格別関心を持っていた訳ではなく、只すゝめられるまゝに、和歌山県に縁のある書物だからと買っておいたのだが、今では大いに役立つ。

こうして飽きもせず古本屋巡りをしていた一日、今、日高高等学校にいる津本漁史君にヒョククリ出会って、私は忘れていたが「やあ！」と声をかけられた事もあった。

こんな具合で、割合閑暇はあったのだが、その時分も矢張り金はなかった。よくよく欲しい本でなければめつたに買えなかつた。

或時萩の茶屋のガードに近い津田と云う本屋で森彦太郎先生の「日高近世資料」を見つけた。前にも書いたように格別郷土史に興味を寄せていなかったが、大阪の町中で、森先生の著書を見かけた事は、あたかも日高の人に出会った様な嬉しさであった。「ホッ！森先生の本がこんな所にある。」私はなけなしの財布をたいて買い取った。四円六十銭かであった。今では千円、高い所では千数百円という。値段の話はさておいて、良い買物であった。

また終戦直後、蘇峯の「近世日本国民史」上製本五十冊も七十円かで阿倍野で買った。日本が無条件降伏をし、古い物は一切二束三文の時代で、殊に歴史書など安かつた。私はそれにしても安い、七十円なら読まないで飾りにしてもよいと思つて買った。これは新しい史家の間では色々非難も有り、最近にながわあた蜷川川の「維新盛観」などでも大分攻撃されているが、これはこれとして恐らく蘇峯の数多い著作の中でも比較的後世に遺るものではないかと思う。

この間日高々校西川先生をお訪ねした時も先生の机上に何巻かゞあった。

「国民史をお読みですか………」と伺うと、「二回目を読みかへしている。」と云うお返事であった。その他有明堂文庫百二十一冊も一冊づゝ端本で揃えたし、蘆花全集・水上竜太郎全集・寺田寅彦全集も、端本で集めたものである。

田舎に帰って、何も不足はないが、古本屋のないのが一寸さみしい。

## 鳳生寺

「紀州新聞」昭和二十七年十二月二十四・五日掲載

年の瀬も押し寄せまった暮れの二十一日、ふと思いたって湯川村富安の鳳生寺を訪ねた。

鳳生寺は戦國の土豪丸山の城主湯川氏の菩提寺として、寶徳元年（西一四四九年）湯川氏第七世光英の創建で、往時は大禪刹の面目を備えていたといわれるが、今は荒廢して見るかげもない。自轉車を押して上って行く途中、折よく横手の谷合から出てきた寺世話人の古久保氏にひよっくり出會つて案内してくれる。和尚は不在であったが、間もなく野良着姿で歸つて來た。檀家の少ないこの寺では和尚も看經のひまに畑を耕しているのであるが、これも禪寺らしく面白かつた。盛事はさぞ壯麗であつたと思われる白壁の長い土塀も、今は壁が落ち半ばくづれている。本堂前の鐘樓の鐘も戦時中の供出で空しく屋根の瓦さえない。昔熊野神神の境内にあつた小堂を移したものと云われる本堂も、瓦が落ち軒が傾き、破風が破れ、雨が漏るどころではない。正に大破に近い。開基其外禪師や創建者湯川光英があらばどう思うだろうか。有意轉變は世の慣いとはいへ、五百年の歲月と時代の波はあまりにも嚴しい。二人の案内で寺の東の山上にある愛宕神神に詣る。高さわずかに數十米の小丘に過ぎないが、日高平野を一眸におさめ景勝の地である。戦後伐採したとかで一本の大樹もないのがさみしい。

「日高郡誌」ではこの神は、明治の末年村神湯川神神に合祀されたとあるが、事實は信徒達の運動で合祀一步手前で現位置にとゞまつた。この愛宕神神は鳳生寺の鎮守神として、京都の愛宕神神から勸請されたものであるが、私の村あたりでは火難除の神として、鳳生寺よりむしろ有名である。今でも春の頃になると村の老人が愛宕神神のお札を持つて廻つて來る。そして家々では炊事場におまつりしている。もとく愛宕神神は火難除とは格別關係ないらしいが、天正（一五八五年）十三年龜山城落城して、鳳生寺も秀吉軍の兵火にかゝつた時、この小神だけが不思議に燒残つた。こゝらが愛宕神神が火難除の神として、特に尊信される所以らしい。

山を降りて和尚や古久保氏と荒れた本堂で四方山ばなしをする。この寺の由緒や湯川氏との關係については森先生が既に詳しく調査されていて、今更めぼしい資料は期待されないので、私は弘法大師御作といわれる御本尊釋迦像や、専身僧都御作と傳えられる十一面觀音、作者不明の湯川直春像を拜したが、この方面に暗い私に果たして美術的にどれほど勝れたものか一寸判断がつかぬ。

ふと見るとこの荒れはてた境内に、およそ不似合いな一基の新しい宝篋印塔が目についた。これは今から十二、三年前、昭和（一九三九年）十四・五年（一九三九年）ごろの事であるが、山梨縣巨摩郡の豪家三井英俊氏が建立したものである。三井氏は信州の大地主で、今から五百年ばかり昔、その祖先が日高に居住し、湯川氏とも淺からぬ交

渉があつたと云われ、英俊氏ははるく、**詔**先縁故の地を訪ね湯川氏のために一基を建立したものである。當時まだ御健在であつた森彦太郎先生と龜山城趾にも上り、小松原法林寺や日高別院にも詣でた。それにして他縣の人でさえこれ程熱心に湯川氏の事跡の顯彰に努められたのに、肝心の地元では寺の現状も既にこのような状態であり、湯川氏の研究も一向まとまらなかったのは遺憾である。私は目下芝口常楠先生から宇井縫藏氏著「紀州畠山記」を恩借寫本中であるが、この中にも屢々湯川氏関係の古文書が出て来る。こういう風に色々な史書を克明に拾ってゆけば、或いはまだく未發見の資料が得られそうな氣がする。私はいつか悲劇の武將であつた湯川直春のことや湯川一族のことをまとめてみたいと思つてゐる。

「一体湯川氏は日高の文化の上にプラスになつたか、マイナスになつたか？」十一月の南紀郷土學會例會席上でも話題になつたが、それは兎に角、よいにせよ悪いにせよ、徳川以前の日高の覇者であり、地方史上大きな存在であつたことは間違いない事實なのだから、日高人としてはもっと関心を持つてよいのではないかと思われる。

「いやそれでね、もうこのまゝでは光英以來五百年の由緒ある鳳生寺も退轉のほかはないので、昭和二十八年早々廣く淨財をつのり、再建運動にかゝることになってゐます。」和尚と古久保氏は強い決意を見せて語つたが、檀家も寺財も少ない鳳生寺としては中々容易ならぬことであろう。だが何とかして郡民の協力によつてその成功を望みたい。私は和尚や古久保氏の精進努力を引りながら暮れやすい冬の山を下つた。

×

×

追記Ⅱ昨日「愛宕神 **評**と火とは、格別關係はないらしい云々」と書いたが、自分でも一寸おかしいと思つたので調べてみると、大間違いであることが判つた。

即ち、愛宕神 **評**は京都市の西北に位する愛宕山上にあつて、その奥 **評**と若宮には火の神が祀られていて、そこから鎮火の符を出し、火防ぎの神として廣く尊信されていることがわつたので、こゝに訂正しておく。

(おわり)

## 玉置韜光師を憶う

「紀州新聞」昭和二十八年一月十七・八日掲載

玉置韜光師が亡くなられた。眞宗教團の學僧として師の令名は、私のようなものまで、はやくか 夙そくぶから仄聞そくぶしていたほど高いものであったが、親しくお目にかゝったのは、ほんの二、三回しかない。

昭和二十六年三月十日のことであった。私は「森彦太郎先生傳」の稿を起こした際、玉置師が森先生と田邊中學時代同窓であられたことを聞いて、お話を承りに行つた。春とはいえ妙にうすら寒い日で、阿尾の海岸は烈しい風が吹いていた。自轉車を光徳寺の表へとめると

「貴男がみえるというので、バスが着く度に停留所まで人をやつたのですが自轉車でしたか」

と師は僧衣をつけられず、きちんとした和服姿で迎えられた。私はこの高名な師に接して眞先に感じたのは、行い澄し悟りきつた上人というよりも、如何にも教團有数の學僧と云つた氣魄であつた。殊にその蔭影の濃い風貌には、人一倍旺盛な動物的な面を強烈な意力で克服しつゝある。云わば人獸争闘の烈さと云つたものであつた。秀でた師の額には深い人間苦の悲しみが刻まれてあつた。

師は初対面の私にも、こゝろよく何かと話して下さつた。

「私は子供の時から乱暴者で、中學時代も随分腕白な生徒であつたが、森君は実に温厚な少年であつた。しかししたゞ温厚一方でなく、その心底には毅然たる骨があつた。どちらかというとな森君はむしろ氣象(氣性)の烈しい人で、あの圓熟した風格は森君のたゆみない修養の結果得られたものであると思う」また「律会黨の片山哲君も當時田邊中學校に學んでいたが、あの頃から片山君は君子であつた。紅顔の美少年でしてね、劍道が強かつた。白哲な顔を朱にそめて、竹刀を持って立つたところは見事でしたよ。」

話はそれからそれへと續いた。古い校友会誌なども、ちゃんと用意されて取出して下さつた上、夫人の心をこめた御馳走を振舞われ

「遠慮せずに食べられよ」

と勿体ないくらい歡待された。

世に「寺から里へ」という言葉があるが、寺に來てしかも初対面早々こうして御馳走になつて私はすっかり恐縮した。

「どう云う病氣か、とに角一日の中、どうかのはずみで、ひどく体がかゆくすることがありましてね……一度貴男の方の矢田温泉、彼處へ云つてみたいと思うが、今も營業していますか」

とも語られた。

次にお目にかゝったのは月も日も忘れて、何でも同じ年の夏であったと思う。

その頃御坊町の若い文化人の間で、月一回師をお招きして、「歎異抄」の講義をして貰う会があった。三月にお目にかゝった時もその話があつて、「お集まりの皆さんは中々熱心で、頭の鋭い方々なんで、此方もうっかり出来ないのですが、それだけに行がいもありましてね」と語られたので、私も仲間入りをしたいものと幹事の人にお頼みしておいた所、知らせてくれたのであつた。

いつも本願寺別院を會場としていたというが、何かの都合でその時は保田屋旅館の別館で催された。むし暑い雨の夜であつた。この日も師は法衣を着けられていなかったが、手首にかけられた珠<sup>数</sup>数が妙に印象に残っている。

集まつたのは山中三郎・山中のぼる・寺西義一・菌脩治・常照寺住職の諸氏と、その他知らぬ人が六、七人であつた。

講義は難しかった。こういう方面に暗い私には、さっぱり理解できなかった。お話は「彌陀の誓願不思に助まいらせ云々」の條りであつたかと思う。

師はご自身でも考え考え、ゆっくりと講義をすゝめられ、「どうです、わかりますか」と反問されたりした。受講者の中からも時々活潑な質問があつて、皆中々真劍であつた。講義が一渡り済んで、余談に移つた時師は

「この頃の雑誌の傾向など、どうも私にはわからないのですかあれでよいのですか？。例えば「文藝春秋」の坂口安吾の「新日本地理」で伊勢神宮に詣りして、天照大神をどうか書いてあるが、その取扱方や態度が不眞面目で納得できないが、あれでいいのですか、どうです山中君」これはかね／＼私も感じていた事であつたので、山中君が如何に答えるかと興味を持って見守つた。

「元來坂口安吾はあゝした作風の男ですが」山中君はこう前置きして、「しかし安吾の一見ふざけ切つたとみえるあの態度の哀心には、切々として<sup>拙</sup>國日本を思う悲痛な叫びがあると思うのですが」とすかさず答えた。まことに名答であつた。「山中君本當ですか。山中君はそう云われるが、安吾の奴うまいこと云うが、本當にそうかな……どうも年を老ると疑い深くなりましてね……」と云われた。

その後も、この會合をたのしみにしていたが、色んな事情で再開されず今日の訃に接した。

師と私の交渉はこのように浅いものであった。佛教界における師の業績については、もとより何の知るところもない。然し師は私にとつて「忘れ得ぬ人々」の一人であった。

私には光徳寺にお訪ねした時と、保田屋でお目にかゝった時の師のお姿が、今もあざやかにまぶたにかぶ。信仰うすき私であったが、同じ日高の地に師の如き知識が居られると思えば、何か心のより所といった安信を覺えたのであったが師今やなし、あゝ。

(おわり)

## 他人(ひと)のこゝと 自分のこゝと

「紀州婦人新聞」昭和二十八年七月一日掲載

### 1

こんな話を聞いた。矢田村若野にあった実話である。

その家では二、三年来家族が大患ひばかりして、医者と薬の絶え間がなかった。思い余つて「おがみ屋さん」に伺ひをたてると、何でも古い大昔の先祖の亡霊というのが出て来た。亡霊というのはこの村の開拓者であつて、その頃はまだ草、茫々たる未開の原野であつた村を打ち拓いて世を去り、村の背後の丘に葬られた。千年ばかり前のことである。

ところが今から二、三十年前この墓は掘りかえされ、墓地から出た埋葬品は、どこかへ持ち去られた。亡霊は行方不明になつた遺愛品を取り返したい一念から、かくは崇りをしたという。

亡霊はさらにつゞけて、当家では墓を荒らして以来、毎朝私の霊を拜み、初水を供へて来たが、私は生前用いた茶の味が忘れられない。願わくば一杯の熱いお茶を供養されたい。このことを訴えたいばかりに、心ならずも数々の崇りをつゞけて来たと告げた。

### 2

そう云はれてみると成程思い当たる節がないではなかつた。今の婆さんがまだ若嫁であつた時分のことである。畑を開墾している際大きな土饅頭にぶつかつた。気にもとめず掘つてゆくと、巨きな石が出て来た。石を除くと中が空洞で、色んな焼き物があらわれた。色も型も今時のものではない珍しいものなので、

わからぬまゝに家に持ち帰ったり、村の学校へ寄附してしまった。

然し何分にも掘り出した場所が場所だけに何か訳がありそうに思えたので、以来婆さんはこれを神棚に祀り、毎朝は初水を供養して来たのであった。

けれども墓の主はそれだけでは物足りず、現に遺品を取りかへし茶を呑みたいと語ったのである。捨ておけばこの上、またどんなことがあるうかも知れぬ。某家ではあわてゝ学校へ走り、教育参考品として陳列していた土器を貰いうけ、神棚へは熱いお茶を供えた。

### 3

話を聞いて私はおかしいことを云うと思った。墓というのは疑いもなく古墳であろう。事実若野は古墳の多い所である。村の背後の丘陵には多くの古墳がある。

然し古墳の主が告げたと云う茶は、詳しくは知らぬが、もともと我が国にはなかったものである。伝へるところによると、延暦二十四年（西暦八〇五年）最澄が唐から種子、製法を招来したが、広く一般に用いられるようになったのは、建久二年（西暦一一九一年）僧栄西が宗から持ち帰って以後の事とゝいう。

何れにしてもこの二人は古墳時代の人ではない、少なくとも古墳の主が村を開拓した時代には、まだ日本には茶はなかった。したがって茶の味を知らずに死んだ筈の古墳の主が、茶を所望するのは理屈に合わない。「君その【おがみ屋】はインチキだよ！」私は大きな声で笑った。

### 4

さて他人のことにはこのように、いっばしごさかしい口が多く、私も自分のこととなるとそう簡単には割切れない。

去年のことである。偶然の機会から徳本上人の六字名号を手に入れた。上人は云うまでもなく本郡志賀村久志の人で、近世紀州が生んだ高僧である。殊に其の修業の烈しさと、悟道の堅固さは私の常に敬仰能わざるところであった。私はゆくりなく手に入った上人のお名号を掲げて、朝夕その生涯をしのんだ。

然し何分にもお名号は長い間うち捨てられてあったものと見え、ひどく傷んで表装もぼろ／＼であった。

私はそのうちお金が出来たら表装をかえることにきめて、押入れの奥へ入れたまゝま忘れるともなく幾月かすぎた。ところが同じ年の八月末、猛烈な腹痛をおこして幾日も苦しんだ。病氣は持病の膽石症であった。痛みが襲うて来た時は身も世もないほど苦しかった。一体何の因果で自分だけこう痛い目をするのかと悶えた。痛みがやゝ衰えても食事は攝れなかった。

こんな日がつゝいたある日、ヒョット思いおこしたのは、さきに押入にほりこんだまゝになっているお名号のことである。

「アッあれだ！」

徳本上人は御在世の時、生き仏とまであがめられた尊い人だ。その上人が心をこめて書かれたであろうお名号を、表具が汚いからと押入に入れたまゝ打すてゝおいた。その罰があたったのだ。

「上人様、私が悪うございました。今度体がよくなればきつと立派に表具致します。何卒はやく全快さして下さい。」

私は心のうちで祈った。

半月ばかりして病気が癒え、愈々今日から勤めに出ると云う、いの一番にお名号を町の表具屋に持って行ったことは云うまでもない。

(一九五三、六、九稿)

## 秋風清話

「紀州婦人新聞」昭和二十八年九月五日掲載

### 1

湯川知城師は湯川村財部、浄土真宗好浄寺の住職であった。現御坊町天性寺津本鉄城師の厳父であり、日高高等学校古川成美先生の伯父にあたる。

師は日高近代の漢学者といはれ、学徳の譽れが高かった。そのころ明治三十年代から大正初年(一九一二年)にかけて、衣奈村西教寺住職藤田真竜師も稀代の善知識と仰がれ、紀南の宗教界に重きをなしていた。

西教寺さんは法話や教団の会議で御坊へ出て来る度に教団の墮落を嘆じて

「今の日高真宗教団に一人の僧侶もない。あゝ宗風まさに絶えんとす。」  
と憤慨、これを久しうするのが常であった。

ある時これを聞いた知城師は、一癖ありげな太い眉を動かすと

「俺は如何だ！」  
と肩をそびやかした。

「お前は別じゃ！」  
西教寺さんは長く垂れた顎髭をしごいて笑った。

「あつはゝ……………」

「あつはつは……………」

二人は顔を見合わせて哄笑した。

私はこの話を聞いた時、ふと鷗外の「関山拾得」を思いだした。

## 2

知城師はどちらかと云うと、小柄な、ちんまりした人であつたらしい。

融通無礙と云おうか、天真爛漫と云おうか、全く小児のような一面があつて、夜などどんな用事があるうと、誰が来ておらうと、時間が来ればさっさと引きとって寢床に入った。そのかはり朝はめっぼう早かつた。きまつて五時前には起きて、朝の勸行をした。

## 3

（一八八九年）  
明治二十二年の大洪水の時であつた。幸いに寺は残つたが什物一切が流されてしまった。師は泥まみれの中から流れ残つた一条の袈裟を見つけ出すと、うやくしくこれをまつり

「あゝ有難い事じゃ、これさえあれば、また明日から生きてゆける！」

と泥んこの袈裟に合掌した。

この話は三つとも井上豊太郎先生からお聞きした話である。

（完、一九五三年八月二十一日）

# 秋風清話 後日譚

「紀州婦人新聞」昭和二十八年十月五日掲載

## 1

九月五日発行の本紙紙上に、「秋風清話」と題して、湯川知城師のことを記した。いつであつたか「楽天荘」でのお話を聞いた時、世にもめづらしいすがくしいお話だと深い感動を受

けた。そしてこの美しい物語を自分一人の胸に秘めておくには余りに惜しいと考へた。ちようどそうした折柄伊藤さんから何か書かぬかとそゝそのかされて、ペンを執った訳であるが、はからずもお話の最も大事などころで大きな間違いを冒してしまった。

## 2

間違ひと云うのはあの文章の最後の一章

「明治二十二年の大洪水の時であった。幸いに寺は残ったが什物一切が流されてしまった。師は泥まみれの中から流れ残った一条の袈裟を見つけ出すと、うやうやしくこれをまつり「あゝ有難い事じゃこれさえあれば、また明日から生きてゆける！」と、泥んこの袈裟に合掌した。」とある点である。

## 3

これは誠に重大な誤りであった。

「これさえあれば、また明日から生きてゆける！」

これでは丸で、御坊町の失対事業に働く人と変わらないことになる。知城和尚の心境はもつと高く澄んでゐた。

明治二十二年八月紀南地方未曾有の水害に際して、知城師の好淨寺も寺は破れ、什物一切は流され、周囲は見渡す限りの泥海となった。世人は世をはかなみ、運命の拙つたなきを嘆き悲しんだが、師は少しも恨むところはなかった。わずかに汚れた泥土の中から一領の袈裟を見出すや、思はず

「あゝ有難い！」と叫んだ。

「この騒ぎの中に不思議に袈裟一領だけが残った何という有難いことだ。これひとへに如來様のおかげでなくて何であらう！」

こう考へた時、師の腹の底から御仏に対する感謝の念仏が知らずく湧き上がってきて、泥まみれの袈裟を拜まずにはゐられなかつた。

以上、井上先生の御教示により謹んで訂正します。終

## はじめのおことわり

日頃郷土のことに深い関心をもっている私は、身をもって体験した今次の水害を私流に書きまとめて、せめて七、一八水害私記とでも名づくべきものを、作っておきたいと考えている。

その為水害後ぼつぼつ資料を集めているし、今後、世の中が落ちついて来るにつれて、確実な資料が得られるだろうと期待している。

「七、一八水害覚書の一頁」は文字通り覚書程度のもので、やがて作りたいたいと思う水害私記の素材である。従って冗長でもあり、玉石混着で人様にはお目にかけるようなものではないのだが、素材は素材なりに何か参考にもならばやと敢えて紙面を借りた次第であって、文中もし間違いをお気づきの方は、是非筆者までご教示ありたい。

## 七 一八水害覚書の一頁

「紀州新聞」昭和二十八年

十月八・九・十・十一・十三・十四日掲載

## 御坊町付近の浸水状況

1

道成寺石段の第六段横に

「明治二十二年八月二十日大水（一九三八年）石段七段ニツク」

と彫りつけてあるが、これは昭和十三年明治風水害五十年供養会が厳修せられた時、東京服部よし夫の発案と寄附金によって彫られたものであって、古今未曾有と云われた明治二十二年洪水の状況を永く物語っている。

今度の水害後も町の家々の壁や板塀等に浸水の跡がクッキリと残っているのを見かけるが、雨や風に消されない今のうちに、要所々々の浸水跡を測って記録しておけば、後日何かの役にたつのではないかと思ひ、機会のあるごとに測ってみた。

然しこれは餘り大びらにやると、災害を受けた人々の傷痕を搔きたてるような気もするし、復旧に忙しい町民諸氏からは、何処の物好きが阿呆な真似をしているのかと笑われる恐れがあるので、なるべく目立たないようにこつそり測ることにした。このため当然測っておかねばならぬ所で抜かった箇所もある。計測はすべて巻尺を用い、出来るだけ正確を期したつもりだが、猶全く誤りがないとは云えないし、同じ町内であっても、決潰地点への遠近や流水の方向によつて、かなりの差異がある。以下私の計測の結果である。

## 2

### 一、道成寺石段

一段半浸水 七・一八水害

七段 浸水 明治廿二年水害

三段浸水 寛政元年水害？

今回の水害は明治廿二年のそれよりも大きかったと云われるが、道成寺付近の水位はずっと低かった。明治廿二年にも今次水害とほぼ同様に藤田村藤井領と、矢田村土生領のとの境界点法徳寺堤防が欠潰したのであるが、今度の方が欠潰口が狭く、その上鉄道線路によつて濁水の浸入を食いとめたのであろうと思われる。

三段目浸水を寛政三年の洪水としたのは「和歌山県水害記事」に

「日高川今回の水量は実に古今未曾有というべし。一百年前洪水あり古刹道成寺の石階その下より三級を浸したりとの事を口碑に傳へしを人敢て信ぜず妄説なりとなせり。然るに今回は第六級に譲り階下の家屋担端を殺せり豈奇変ならずと謂うべけんや」

とあるによつて、明治二十二年から百年を溯らせたのである。

尤もこの百年と云う数字も必ずしも正確かどうか不明であつて、寛政元年の二年前の天明七年(一七八七年)にも、二年後の寛政三年にも日高川が氾濫して堤防が切れ田畑が荒れているが、たまくちょうど百年前の寛政元年にも亦堤防が歛潰し、田畑家屋が流失したことが、「名屋浦鑑」などに見えているところから、假りに寛政元年とあてゝみたのである。

ところで道成寺の石段の事であるが、これも水害後新聞に（たしか日高新報であつたと思ふが）第二段まで浸水と報ぜられたし、世間一般の人も二段までと云うていたが、中には否今度は全く石段に及

ばなかったと云う人もあって、何れが本当か判断しかね小野宏海師に問い合わせたところ、一段半と答えられたから、先ずこれを信じて間違いあるまいと考える。

二、藤田村藤井 専念寺

表の寺門で、地上四尺四寸

本堂表縁板の上一寸 浸水畳に及ばず。

三、藤田村吉田 万楽寺

境内で 地上約二尺

本堂 床下浸水一尺位

四、湯川村小松原 九品寺

本堂 正面の階段五段まで浸水と聞いたが、浸水痕跡は四段目にあり、或は四段が正確ではないかと思う。四段とすれば床下浸水二尺七寸となり、五段なれば三尺七寸となる。何れにしても床下にとゞまり、畳は濡らさずにすんだ。

五、湯川村小松原 法林寺

寺門 地上二尺九寸二分

本堂 床下浸水二尺三寸

庫裏 床上浸水一尺五寸

六、湯川町小松原 湯川小学校

運動場 三尺位浸水

校舎 床下浸水

この校舎は、地上から三尺位コンクリートで築上げている為床下浸水ですんだ。建築の際の一寸の心使いが、いざと云う場合光っている。

七、湯川村小松原 天理教湯川分教会

境内 一尺二寸浸水

神殿正面石段 二段浸水

この壮大な建築物は先年のジェーン台風にも瓦一枚飛ばされず心憎きまで平然としていたが、今回も付近は濁流渦を巻いたが濁水床上に至らず、近在の住民三百数十名を收容し、一週間程炊出しを行った。信者の日の寄進と云う誠心と、金に糸目をつけぬ工事の結果であろう。

こう云うところを見ると国民がもっと裕福になり、政治家がもっと誠実な政治を行うようになれば、大抵の災害は防げそうな気がする。

#### 八、湯川村財部 往生寺

本堂 正面階段一段目浸水

床下浸水一尺一寸

ここは財部のうちでも割合に高い所で、明治廿二年には境内入口まで浸水したが、境内には及ばなかった。今度は前記の如く床下一尺一寸に至った訳であるが、筆者が往生寺を訪れたのは十三号台風が吹き荒れた翌廿六日の午前で、秋晴れのよい天気の日であった。

境内に入ると本堂の横手で折からの秋日をうけて、和尚がしきりに何かを洗っていた。側に小僧が一人立っている。何をしているのかと近よって見ると、何と泥まみれになった古い墓石をせっせと洗い清めているのであった。石碑は物を云わぬから、何時まで泥んこにしていても、苦しいとも汚いとも云わぬであろう。それをわざと墓地から運んで来て洗い清めている住職森川斎 訶師の姿に接して、私自身も何だか心を洗い清められるようすがくしいものを感じた。

#### 九、湯川村財部 好浄寺

本堂 地上三尺一寸

床上浸水八寸

#### 十、湯川村西富安 西円寺

本堂 床下浸水三尺六寸五分

庫裏 地上五尺五寸

こゝは昔から野水のえらい地と聞いたが、常識的に高い所との概念があったので驚いた。本堂三尺六寸五分というのは、床板とスレくの水位で、小波のため本堂南側の畳二枚が濡れた。庫裏の地上五尺五寸の水位は無論床上ズップリ及んでいる。水が段々高くなるので鉄道線路の一部を切り開いた。それで水はずっと退いたと聞いたが眞偽は知らない。

#### 十一、湯川村財部 安養寺

本堂 床下浸水二尺九寸

寺門 地上三尺三寸五分

本堂二尺九寸というのは床板とスレくの水位であって、庫裏は勿論床上に及んだが、本堂の畳は濡らさずにすんだ。ところが付近の人家は何れも床上浸水をうけたので、農家では飼牛を寺の境内に避難させた。然し境内も次第に危険となるや、遂に牛を本堂に上げこの数六十頭に達した。為に畳は水にこそ濡らさなかつたが、牛糞や何かで目茶苦茶となり、縁板も大分踏み折られた。

「私ところは水害でなく牛害ですよ……」

和尚は笑いながら語った。然し大悲大慈の御仏は物云わぬ六十頭の獣を救い給うてさぞ御満足であるうと思う。

### 3

今度は御坊町に移る。

十二、御坊町島 善妙寺

本堂 床下浸水一尺七寸

床下一尺七寸という水位は、床へもう三寸というところで、庫裏は勿論床上に及んでいる。

十三、御坊町島清水通り 田端昌平氏邸

清水通り 路面三尺

田端氏邸 床上一尺五寸

田端氏邸で計測していると昌平翁にみつかった。昌平翁には今春であつたかお目にかかつて、色々島の古い話を承った事があるのだが、翁はその折のことを思い出されて又お話を聞いた。こゝは御坊町でも高いところで、明治二十二年には床下浸水であつたが、今年は床上に及んだ。

「あの通りですよ」

と示されて屋内を見ると、襖に歴然と浸水跡が残っている。目測で床上一尺五寸と見た。

十四、御坊町島 御坊税務署

庁内自転車置場 四尺一寸

まさか水害の痕を測りに来ましたとも云えず、署内を遠慮して庁外の自転車置場を測って見た。

十五、御坊町島出店通り 芝口常楠先生邸

玄関 地上五尺五寸

芝口先生邸の直ぐ南東の日高川堤防が欠潰した為水位が高かった。玄関地上五尺五寸という水位は、奥の間押入の上の段スレ／＼の高さである。

十六、御坊町島 古野煙草店

古野氏邸表の道路で二尺九寸五分

十七、御坊町島 倉橋西詰道路上 四尺八寸

十八、御坊町島 日高高等学校東館

常磐文庫付近 三尺九寸

十九、御坊町島 元中学校通り 紀州新聞社前道路 五尺

二十、御坊町紀小竹通り 菌郵便局庭 四尺八寸

二十一、御坊町本町二丁目 千寿堂パン店表 五尺一寸

二十二、御坊町上紀小竹通り 関西配電御坊寮前道路 五尺

二十三、御坊町昭和町 日高病院内結核療養所 三尺五寸

二十四、御坊町 カトリック教会付近 四尺九寸

二十五、御坊町紀小竹 御坊小学校玄関 四尺九寸三分

二十六、御坊町石橋通 日吉座付近道路 四尺八寸

二十七、御坊町日吉町 寺西御坊小学校長邸付近 五尺一寸

二十八、御坊町栄町 四海亭旅館付近 五尺一寸

二十九、御坊町東町 菌徹薬局付近 五尺八寸

三十、御坊町東町 日高別院表門前道路 六尺一寸

日高別院境内 六尺六寸

東町殊に御堂さん付近は御坊町でも比較的高い所と聞いていたが、今度の水はかなり高かったのは、こゝに近い東菌区内の堤防が切れたためであろうか。明治二十二年には本堂正面の階段二段目まで浸水したというが、今度は縁板ギリ／＼の水位であつたらしい。

三一、御坊町東町

辰巳橋北詰付近 七尺七寸

こゝでは背の低い私では踏台をしなないと測れなかつたが、こゝから南に行くにつれて、益々水位が高くなり、常照寺付近では殆んど人家の軒に及んでいる。これは前記の通り、この直ぐ東方日高川堤防が数カ所にわたり決潰したゝめである。

三二、御坊町万寿沢町 常照寺本堂 床上二尺五寸  
三三、御坊町本町一丁目

紀陽銀行御坊支店待合室 四尺

三四、御坊町横町 野村砂糖店付近路上 六尺一寸

三五、御坊町元町の入口 幸福相互銀行付近路上 六尺四寸

三六、御坊町茶免橋南詰

福原金物店付近 六尺六寸五分

福原金物店主としばらくの間であつたが、日高中学で一緒に学んだことがある。表で巻尺をひっぱっていると出て来て、「この辺で二米あつた」と教えてくれたが、果たして六尺六寸五分あつた。茶免の地藏堂の軒が没したが、何とか標示しておきたいものだと言つていた。

三七、御坊町南新地 南検通り路上 六尺三寸

三八、御坊町南新地 旭検通り路上 六尺一寸

三九、御坊町名屋 源行寺玄関付近 五尺

四〇、御坊町新町路上 五尺

四一、御坊町八幡筋 古田紙店付近路上 五尺五寸

四二、御坊町北新町 託児所付近路上 六尺六寸

四三、御坊町松原通

天性寺境内で 七尺二寸

本堂 床上浸水二尺八寸

四四、御坊市椿

浄国寺表門 地上六尺一寸

本堂 床上浸水二尺六寸

四五、御坊町西町 岡光付近路上 六尺七寸

四六、御坊町倉町道路上 五尺二寸

四七、御坊町吉原通道路上 六尺五寸

四八、御坊市西町 南海自動車々庫裏手付近一帯路上 六尺六寸

四九、御坊町大浜通

御坊中学校玄関 五尺九寸

付近路上 七尺一寸

五〇、御坊町大浜通 御坊検察庁付近路上 七尺四寸

この辺から西が御坊町で最も水位が高かったのではないか。西川河畔の石屋付近では濁流が二階に及んでいる。この石屋の側に森先生の西川改修記念碑が建てられていたが、濁流に押し流され、排土作業の人達によって無惨にも塵泥に大半埋められている。先の往生寺住職森川氏が泥んこの石碑を黙々と洗われたのと何という相違だ！何とか方法は無いものか。

五一、御坊町元宮通り 上野山洋裁学校付近路上 六尺三寸

五二、御坊町元宮通り 御坊保健所付近路上 三尺八寸

五三、松原村田井 常福寺

境内 約七尺

本堂 床上浸水三尺六寸

この辺りも随分水が高かった。何しろ尾上橋が流れ、西川堤防上を救援の網船が平気で通ったのだから想像に余りがある。ここから田井方面田端春三氏邸へかけての人家は、殆んど軒口を没する位浸水した。田井の人々は飼う牛の首に名札をつけて入山方面へ逃がした。牛は最初うまく誘導すれば一人で泳いで行く由で、逃がした牛は大低入山部落へ泳ぎついた。然しどの牛も余程悪戦苦闘したと見え、爪がひどく摩滅していたという。中にどうしても逃げないで舞い戻って来るのも居た。仕方ないので二階へ上げたが、やがて水が退いて二階から降ろすのにロープをかけるやら大騒ぎした家もあった。

五四、和田村和田 濟広寺

本堂 床上浸水二尺四寸

境内地藏堂 五尺五寸

境内地上 約六尺

和田は高い土地だという概念があったので、濟広寺が床上浸水を受けたと聞いて、意外に思

ったが、来てみて成程と思った。同じ和田でもあの辺は余程低い。境内でうろくしているうち、住職夫人に見つかつた。この春日米戦争の日高地方空襲記録を作ろうと考え、済広寺機銃掃射について照会したことなどがあつて、夫人は気安く色んな話をされた。

こゝへ水が来たのは十時前後のことであつた。それまでも水が来そうだというので、早めに昼飯の用意をすべく買い物に行き、帰つて来るともう境内へ水が来ていて、見るみるうちに高くなり、とても昼食の仕度どころではなくなり、早々に非難したがもうその時は夫人の胸に達する水嵩であつたという。こゝから一町位南よりの和田喜久男氏邸では床下浸水一尺、この水位は明治二十二年のそれより六寸低いが、これは二十二年人には無かつた臨港線が出来ていたり、西川堤防が改修されて高くなつた為であろうか。和田方面では午後二時頃から三時頃へかけて最も水嵩が高かつたと聞いた。

## 七一八水害覺書の一頁

「紀州新聞」昭和二十八年

十月十七・十八・十九日掲載

### 災害地走行記

水害後せめて近辺の災害地だけでも、ひとわたり見ておきたいと考え乍ら、病気をしたり、ひまがなくて機会を得なかつたり、やっと近頃になつて目的をはたすことができた。然しそれも自転車で走りまわつたので、ほんの皮相の見にすぎず、第一肝心の数字を一こう掴んでいないが、これは今後追々にやることにして、以下私のメモから二、三枚抜いて見る。

#### 一、矢田村入野

##### 栄林寺

部落のほど中央にある。道路から数尺の石垣を築いているが、水は数尺の石垣を突破し、本堂正面

階段二段を没した。床下浸水一尺五寸である。廿二年には境内のみ一、二寸の浸水であった。ここに近い入野橋は跡方もなく、付近にあつた共同作業場のかなり大きな建物も流失した。

### 岩屋観音

岩屋観音は「紀伊續風土記」に「村端に観音堂あり」とあるのがそれで、上入野と下玄子の村境にある。十一面観音の石像であつた。明治水害には堂宇が流され、堂守夫婦が流死した。今度は堂宇も観音堂も流された。この少し上手を岩屋の淵と云い、二、三年前多くの費用を投じて改修した、入野・玄子線が通じているのだが、全く崩壊して絶壁に流木で棧道をかけている。日高川水面まで少なくとも三十尺は下るまいと思うが、正確な数字を知りたい。

### 夏柑畑

入野は夏柑と富有柿で聞こえていた。それが今は山畑以外一本もない。明治卅八年以来数十年に亘つて、故古田幸吉氏等によつて、営々育成された夏柑はすべて亡びた。耕地の状況は大体下入野は床土流失と、土砂埋没、上入野は石、石、石まるで河原である。堤防はこれも数年来改修されて来たのだが、ズタズタに切れていると云うより、むしろ無に等しい。

### 明治水害との比較

水位 今度の方が四、五尺高い

死者 明治廿二年 七名

七・一八水害 無

流失家屋 明治廿二年 廿四戸

七・一八水害数戸？

## 二、丹生村松瀬

### 正覚寺

### 善導寺

二カ寺とも高地にあるので浸水していないが、部落の殆んどが浸水した。大体廿二年より四尺位水位が高く、凡そ八時半頃か九時頃浸水しはじめ、拾時頃最も劇しかったと聞いたが、何れももう少し早かつたのではないかと思う。矢田村若野と地形的が非常によく似ており、耕地は激流で深く削りとられている。

### 死者流失家屋

死者 無

流失家屋 納屋 一棟

全壊家屋 二戸

### 明治廿二年の被害

土砂埋没及流失田 十七町四反三畝十二歩

土砂埋没及流失畑 三町一畝十七歩

同〃山林 一町六反六畝十四歩

同〃宅地 四反一畝十七歩

以上は大正三年(一九一四年)編纂「丹生村郷土誌」変災編による。今次水害による分は未だ知らぬ。

### 三、丹生村和佐

#### 生連寺

寺門 地上七尺二寸

本堂 床上浸水四尺五寸

ここは水流が激しく、おまけに水嵩が床上四尺五寸にも及んだ為、本堂は南に傾いている。

玉置直和堂 床上浸水五尺六寸

天正年(一五七三〜九二年)中和佐手取城落城後、高野山に登った時、蛇尾村の妾宅に遺したものと伝えられる

直和像は、未曾有の災害にも無事で何事もなかったように見受けられた。

#### 和佐駅前花家

昼食時になったのでうどんを食べに入ったのだが、花家の鴨居二寸ばかりに、クツキリ浸水の痕跡があつた。

七月十八日の朝、花家のおかみさんは、何時になく七時前に目をさました。雨戸をあけるともう日高川は一杯の水で、堤防よりも水の方が高く、高芝の堤防の数カ所から、チョロク／＼水が乗りこえて流れこんでいた。

「大変だ！只事ではない！」

びっくりして家内中をたゞき起こした。然しその時はまさかこれ程の大事になろうとは思わなかつ

た。大正十年<sup>（一九二一年）</sup>南海紙業が流された時は、花家の表道路がチャプチャプ浸水した程度であったから、先ずその位のところであろうと、手近のものを片づけているうち水が来た。高芝堤防が切れたのだ。最初ザーという音がして水が庭に入った。庭には大きな諸穴があったが、見る／＼諸穴が一杯になり、蓋が浮いた。

後は夢中で近くの高地に避難したが、鴨居から下がっていた時計は、七時四十五分で止まっていた。この付近ではこの前後が最も激しかった。間もなく若野堤防が決潰して、一寸、二寸と目に見えて退いた。だから若野堤防が切れたのは八時前後ではなかったかと思われる。

### 和佐駅

下和佐の平地ではここが一番高い。それでも駅待合室と事務所は五寸余り浸水した。十八日七時何分初かの第十七号列車は、既に運転不能で立往生してしまった。然も泥水はこの列車の座席にまで及んだと云う。駅前両側に並んでいた商店が二、三軒見えぬ。大破した為取壊した由。

### 不思議な家

駅頭から眺めると、線路以西の田畑はすべて流失し、拾戸近く散在していた家も、製材工場も枸櫞酸工場も見えぬ。たった一軒日高川鉄橋近くに、古い藁葺の家が残っている。この家は明治水害にも流れず不思議な家と云われている、（八月二日付本紙所報）とのことだが、よく調べて見れば不思議でもない何でもない。当然残るべき理由がきつとあるに違いない。自然の法則によつて浸すべきを浸し、流すべきものを流すのみ。

### 日高川鉄橋

延長三百五十米の内、ピーヤ三個、橋桁七本を流失したと言う鉄橋だが、やつと假工事が出来上がった矢先き、十三号台風でまた流れ、必至の再工事がつゞけられていた。この鉄橋に限らず、天田橋でも、野口橋でも、入野橋でも流失時間が一向はつきりしない。無論あの騒ぎの中で、時計など見ている余裕はないのは当然だが、誰も知らぬとなると一層知りたい。御存知の方は居ないだろうか。

近くの宮本煙草店主の話。……あの時大きな話をするのではないが、鉄橋に遮られた流木は物凄かった。家の潰れたの、根つきのまゝの原木、普通の材木、等々上流一、二町程一杯であった云々。

### 明治廿二年の被害

生連寺 床上浸水

土砂埋没田畑計 四十七町四反八畝廿八歩

川成田 三反十八歩

川成田<sup>？畑</sup> 四反一畝三歩

山崩田 四町一反八畝十八歩

流失山林 八反四畝十九歩

埋没山林 一反四畝壹歩廿歩<sup>？</sup>

流失宅地 一町五反三畝

埋没宅地 上一町六反三畝十四歩

丹生全村の床浸水家屋 百九十七戸

流失家屋 二百一十一戸

歟損崩壊家屋 三百五戸

救護の状況は  
「災厄の最も多きものに、一人一日玄米四合として、大字和佐光源寺に於て、六百九十一人に授与したり。而して其日数は十五日の久敷に亘れり云々」とあつて、（以上前掲「丹生村郷土誌」）死者のことは記していないか、今回は十六名の犠牲者を出した。

## 四、野口村

### 野口村水防資材倉庫

倉庫は野口山麓、千曳・野口間の道路の上段にある。片山隆三氏も屢々指摘されたように、この水位は恐ろしく高い。日高川水面まで、その後測量に来た人は四十尺と語つたと云うが、ここまで水が来たとは全く想像つかぬ。ここに假住居する伊藤老人の話

「俺が一番早くここへ来た。もう大分水が退いた夕方であつたが、それでも倉庫内では踵を没した。」

「あの朝廷へさつと水が来たので、あわてゝ箆筒の一番下の引出しをぬいた。三段目へ手をかけた時は、もう入口の戸を押し倒した水が、滝のように流れこんで手のつけようがなかった。」  
堤防に近い伊藤老人の家ではさもあろう。

## 上野口堤防と竹藪

上野口を護っていた竹藪は殆んど残っていない。戦時中開墾して小さくしていたからだと云う。堤防も全滅して跡形もない。当日朝若野堤防を突破した激流は、真直ぐにこゝにぶつつかつて一挙にこれを破り、濁流は瞬時にして村を一呑みにした。

前記和佐の条に記したように、若野堤防の決潰は午前八時頃と推定されるから、上野口堤防が切れたのも、ほぼ同時刻と思われる。これは十月七日日本紙所載の「崎山氏と鈴木女史に感謝状に添え、自転車と置時計を贈る」の記事中の時間とも一致する。

## 明治水害の被害

明治廿二年の被害は左の通り。

死者 一人

負傷 十四人

牛馬死亡 一頭

建物流失 二百一十軒

建物破損及崩潰 二百四十九軒

耕地流失 一町三反

耕地埋没及土砂流 百廿六町三反廿一步

同生毛損失 百八十六町六反歩

宅地荒 六町二反四畝

雑種地荒 六町歩

船舶流失 四

(以上明治四十四年編「野口村誌稿」による。)

これに比較して、今次は死者十二名、行方不明二十二名と人的被害の大きかったのは、前記のように先ず上野口の堤防が決潰して、激流は野口山山麓を洗うように流れ、村民の退路を遮断したためと思われる。耕地被害の数字は未調査。

## 薬師堂

上野口と下野口の中程にある。この仏像は勝れた作であると聞いているので、巽三郎氏と調査に行

こうとしていた矢先のことゝて、しまったと思つたが幸いに無事であつた。床上一尺一寸浸水。あれ程大きな被害を受けた村だが、堂内は美しく掃除され、最近香華を供え読経のあとさえあつたのには心をうたれた。

### 安楽寺

本堂床上二尺二寸浸水。付近の伊藤煙草店の店舗は、最近新築したばかりだが流失している。それ程水勢が激しく、本堂床上二尺余の浸水を受けながら、畳一枚も濡らしていない。不思議なことだと聞いてみると、水が来ると云うので、内陣へ積み上げたと云う。流石柔道何段かの腕前と噂のあの伊藤住職だけであると、俊敏さに舌を巻く。

(以上十月四日踏査)

## 五、早蘇村

### 早蘇中学校

早蘇中学校の傍を通る。この辺の地理にうといので、今通っている所が、果たして道であつたのか、畑であつたのか、それとも河原だったのかさっぱり見当がつかぬ。そのうち目の前へニユツと校舎のコンクリート基礎があらわれたので、ここがもとの校庭であつたことがわかつた。コンクリート基礎からポルトだけが処々に残っている。

こんな所へ学校を建てたのだから、流れるのは当然だと後になって人は云うが、平坦な耕地の少ない早蘇村として、これだけの敷地が中々得られなかつたのかも知れないし、部落間の位置問題が絡んでいた為、止を得なかつたのかも知れない。それにしても明治水害の記録でもあれば、ここには建てなかつたであらう。こうなると平素私のように虫の食つた古い物ばかり調べている郷土研究も、まんだら捨てたものでもない。

### 光導寺

平川にある浄土宗の寺院。本堂床上浸水五尺六寸。

ひどく荒れているが、大工が来て修理にかゝっていた。校舎を失つた早蘇中学校の生徒が、この本堂で分散教育を受けている。全耕地田八町歩のうち五町歩流失と聞いた。

## 六、船津村

### 観音寺

船津村滝本にある浄土宗の寺院。

本堂 床上浸水二尺二寸

庫裏 床上浸水三尺二寸位中破

鐘楼 流失、鐘も流失

船津村の被害は大きいと聞いていたが、成程ひどい。殊に観音寺付近が荒れている。寺の数町下手の原煙草店も流された。公民館も流された。農協事務所も流されて、七十万円を入れた金庫も行方不明である。以下住職岩垣金亮師の話し。

朝七時四十分頃公民館の大きな建物が真先に流された。続いて八時十分頃当寺の鐘楼が濁流に呑まれた。また十分程して農協支所が流失した。この辺では八時半か九時頃が一番水嵩が高かった。この分ではどこまで水が来るかと思われたので、大事な物はすべて近くの小学校へ移した。その中に古い過去帳がまじって、その過去帳の中に明治廿二年水害の様子を簡単に記してある。それによると、廿二年には庫裏正面の石段の二段まで浸水したと書かれている。だから廿二年よりもこの辺りで、数尺水嵩が高かった。また廿二年には寺の門が流失したが、今度は鐘楼を流された。大きな洪水があるごとに、一つづつ建物が流されてゆく。幸いに流された鐘楼は、木組みのまま、野口村八木某氏の田に流れついたもので、最近もらってきたが、天明六年二七六八年和歌山広瀬の鑄造師を招いて、当地で鑄造したと伝えられる鐘は行方が判らぬ、当寺は前方からは日高川の本流、裏手は岩野谷川の水と、両方から水を受けたので被害が大きかった。庫裏の表へ材木がぶつかって軒を大分破潰された。今度の水害でこの付近で河床が五尺位高くなった。廿二年にも矢張り数尺高くなったと聞いている云々。

### 高津尾小学校

運動場で五、六尺浸水、下手の教員住宅一棟、上手の中学校が流失した。

### 船津発電所

発電室上手の水門の厚さ一米ばかりのコンクリート堤が破壊されて、ポツカリと大きな口を開けている。水勢の激しさが想像される。発電所上の道路は全く破壊されて、流木を組んで棧道とし、今はトラックでも通れるが、当時を思うて慄然とする。この上手の假道路は九月の台風でまた流され目下工事中、従って数町の間車が通らず、所謂蟻輸送をしている。通っている所は実はもとの河原で、旧道ははるか上部にある。

## 高津尾川の山崩れ

日高川の支流高津尾川は、戸数数十戸ほどの淋しい部落である。ここで山崩れがあり、一戸全潰数名の犠牲者を出した。ここまでは山崩れらしい所はないので、山崩れの跡も見ておきたいと高津尾川入りをする。途中広瀬に煙草屋あり小憩。煙草屋で聞いた話

「十八日午前一時から三時頃へかけての雨が劇しかった。裏の谷川から押し出す濁流の音でまじりんともせず夜明けのみ待った。この辺では既にそれ程の豪雨であった。もう少し夜の明けけるのがおそかったなら、すんでにこの家も押し流される所であった。幸い近くの人が駆けつけて呉れて助かった。云々。」

高津尾川部落には冷泉があつて、廿数年前四、五回来たことがある。自転車を押して数町上ると、もう道路が処々決潰して細い丸太を組んで棧道になっている。自転車を押してやっと通れる位の幅、一步誤れば数十尺の谷底である。そんな危ない所を五、六カ所越して行け共、部落は見えぬ。途中道路修理の男に聞くと、部落までまだ十数町あると。餘り広い面積とは覚えぬが、かなり高い所でえぐり取った様に土が崩れ、赤い山肌がむき出している。成程こんなものかと、今日はこの程度にあきらめて引き返す。

(以上十月十一日踏査)

## 續災害地走行記

「紀州新聞」十月二十八日掲載

### 矢田村大字若野

若野へは災害直後行つたが、余りの凄惨さに途中で引返した。今日は二度目である。ひどい、全くひどい。明治廿二年にも全部落潰滅的被害を受けたが、今次もそれに劣らぬ。日高奥地のことは知らぬが、私の見た船津村三十木以西では若野が一番ひどい。成程家屋流失は五戸である。犠牲者も全くなかった。然し耕地を見よ、全耕地の三分は土砂に埋没し、五分は河原となり、残つた二分は床土深くえぐられ、河流と変らない。災害後三カ月余と云うのに假堤防も出来ていない。

今次水害の耕地被害の数字はまだ知らぬが、廿二年には水田総反別十五町余のうち、流失十四町、残り一町余は山田であつた。今回もほゞこれに近いものである。

流失家屋は明治水害に全戸数四〇戸のうち、三八戸まで流れたが、今次は五戸に止まった。これは明治水害の教訓によつて、人家はすべて山際の高地に移つていたためである。犠牲者も前回は漂流人員約七〇名、うち死亡者三七名を出したが、今次は一名もなかつた。

### 堀場龍太郎君の話

堀場君は若野渡しを経営しているので、十七日午後十一時頃船を見に来た。その時は約一米ぐらいの増水であつた。雨が劇しいので、また十八日午前三時頃に来て見た。二米ぐらいの増水であつた。それから次第に水嵩が高くなり、六時半過ぎには若野堤防で一尺余の余裕しなかつた。

### 素人の疑問

前記のように若野部落は水に苦い経験があるので、堤防には殊に関心を持つていた。それで数年來堤防の大改修工事をやり、堅牢なものになつていた。総じて近年は治水がやかましく云われ、土木工事も進歩しているから、明治時代にくらべて、どこも堤防も堅固であつた。各地の堤防決潰の様子を聞いてみると、大抵溢水まで持ちこたえており、濁流が堤防を越し、堤防裏を洗い出して決潰しているようである。だから下流方面では川幅を拡げ、堤防を一層高く丈夫にすれば、或は決潰を免れるかも知れぬ。然し若野のような土地はどうなるのだ。あの川幅は広げようもない。おまけに千疋の屈曲がある。あれだけの川幅では一定量以上の水をどう捌くのか。そこで防災ダムが挙げられるが、一体あの刻々に一秒間にどれだけと量り知れぬ程の流量を、調整することができるのか。上流地にそれだけの広い土地があるのか。こう云う方面に詳しい片山隆三氏に聞いてみると、何でもノルウェーとかスエーデン（国名は忘れた）にその例あり、立派に災害を防止していると云うが、外国ではうまく行つていても、日本では一寸不安な気がしてならぬ。第一少しの風や雨で直ぐ停電する電気が、何れはダム扉の開閉は電気であるのであろうが、肝心のとき役に立つのか？

もう一つわからぬは、どこの村でも耕地の復旧が一向進んでいない。国営とか県営とか、或は補助金の関係とか、色々複雑な事情があるのであろうが、廿二年水害に天秤棒と、モッコ一荷で立派に耕地を復旧した。あの逞しい農民魂はどこへ行つたのか。

### ある老人の話

明治水害の時九歳であつたと云うから、今年七拾幾つかになるといふ若野のある老人の話に、

「御多分にもれずあの時私の家も、田畑ともにすっかり流された。やっと九つであった私は、その翌日から学校をやめさゝれた。そして小さな手で石を運び、土を持って流された耕地の復旧の手傳いをした。あの時お上から見舞として呉れたのは、茶碗五個と金二百円であった。その当時の二百円は大金であったとは云え、それだけで家も建てねばならぬし、米も買わねばならなかった。ともかくあの時はそれだけを資本として、あとは自分達の腕一本で、もとの通りの田畑とした……云々」

この老人の言葉に何か学ぶべきところがありそうな気がする。

### 草枕翁

丹生村山野で森草枕老に敬意を表す。先を急ぐので早々辞去したが、二、三年前前お目にかゝった時より少し耳が遠くなられたがお元氣である。思えば私どもの子供時代「紀南新聞」時代からの森常吉老である。どう云うわけか翁は政治に深い興味を抱かれ、昔から書かれたものにそうしたものが多い。文章から受け感じなど、一寸徳富蘇峯を思わせるところがあるが、風格がどことなくアク抜けして来た。去年蘇峯学人の「読書九十年」をよみ、巻頭の写真を見て、いくら年をとつても、人間臭の臭い、アクの強い姿に驚嘆したが草枕翁は次第に枯淡になられた。御自愛を祈る。

### 川中村大又口から佐井

大又口に原煙草店がある。道路から二尺ばかり石垣を築き、家はそこにあるのだが、水は二階の畳に及んだ。驚くべき水位だ。その東半町ばかりに老星小学校があったのだが、今ははるかか丘の上に移っている。もし旧地にあったのなら、一溜まりもなく流されていたであろう。

対岸の坂野川部落に架けられた針金橋は流され、コンクリートの橋杭はポキリと折れ、川中に転がっている。工事中であったと云う新橋の橋杭(新旧両橋とも橋杭と云うより、コンクリート製でピーヤと呼ぶべきであろう)も二つばかり土台から洗われ川中に転がっている。老星から西佐井へ行く道は頗る悪い。ここは幹線でないため、後廻しになっているのであろうが、道床がすっかり流失して、岩盤が露出し自転車を押して行くのに一汗かく。

### 大沢煙草店での話

東佐井へは渡船があるが船頭はいない。各自が勝手に船を操るのである。太い針金を渡し、そ

れに綱をつけているので、流れる心配はないと分かっていますが、矢張り気持ちがよくない。やつと大沢煙草店で小憩。

この両岸の佐井部落では会場一棟、酒倉一棟、合わせて九戸が流失した。田地も大半流された。行方不明者二名、一名は壮年男子であったが、逃げ遅れて水に囲まれ脱出中に濁流に呑まれた。一人は小学五年の可愛い女生徒である。一旦逃げていたが、家に残した教科書を思い出し、引き返し遂に還らなかつた。

佐井部落は東西にわかれ、両部落とも日高川を中にしてかなり高い所にある。普段は日高川は両部落のはるか下を流れているのだが、何しろ奥地のこととて川幅が狭いため、今度の様な大雨になると、平時の予想のつかぬ所まで水が来る。殊に酒倉を流した大沢酒造店付近がひどい。この付近だけで数戸流失している。大沢煙草店は酒屋より一段高い所にあるが、それでも天井が浮いた。一旦浮き上がった天井が、水が退いて又旧通りおさまったが、その時すきまに挟まったラムネ瓶がまだそのまゝになっている。大沢家の時計は七時十五分でとまっていた。

### 川中中学校

ここも佐井と同様随分高いと思われるが、矢張り駄目であった。三佐で数戸、田尻で六戸ばかり流れた。三佐・田尻の中間にある川中中学校は教室内で床上四尺三寸、運動場で六尺近くと推定される。よく流れなかつた。

### 川中第一小学校

運動場にまだ材木が十四本転がっている。子供に聞くと、二宮金次郎の銅像がつかつたと云うので測つて見ると、教室で床上三尺六寸・運動場で約四尺浸水である。

### 下田原、三十木

田尻の対岸小釜本へは矢張り渡船なので、とう／＼行かなかつた。漸く今春ぐらいでなかつたか、竣工したばかりの吊橋も流された。小釜本の小瀬貞助氏は、「川中村誌」編纂の志あり、多年資料を蒐集されていると聞いているので、お伺いしたかつたが農繁期でもあり、船もなかつたので他日を期した。

田尻から下田原への道は、余り広くはないが路面が滑らかで、人通りも少なく、水害前実に気持ちの良い静かな道であつたが、今は数町の間すっかり破壊され、假道が出来上つたばかりであ

る。所々に家ほどもある巨岩が、山から転がり出てドカリと据わっている。道は日高川の東岸を縫うているのだが、谷と云う谷からは土砂が一杯押し出して路を潰している。杉の木が根を洗われて、横倒しになっている。成程この調子で根つきの木がどんく流されて来たのだなあとと思う。

下田原は戸数二、三十戸の淋しい部落である。このうち七戸が流失、水田十町歩のうち残ったのは二反歩位と云う。全耕地の割に被害率の多いこと、矢田村若野と同様である。地形もよく似ている、総じて川の屈曲部にある部落はどこでも被害が大きかった。将来完全な治水法が構じられない限り、こうした土地が幾十年目かに水害を受けることは宿命のような気がする。

上田原までの道がまた荒れている。ここもやっと假道が出来たばかりだか、部落はその割に被害は少なかつたようである。

三十木は非住家とも十七戸流失した。耕地の数字は知らぬが、被害は大きい。殆んど下田原、若野と似たものと思われる。無論三十木橋はない。河原となりはてた地に、家の礎や石臼などがポツンと残っているのも、当時の激しさを物語っている。

(完 二八、一〇、一八踏査)

## 七一八水害覺書の二頁

「紀州新聞」昭和二八年十一月五日掲載

### 天田橋上の二十四時間

1

今夏の水害で流失した天田橋は、工費十八万円で昭和六年十一月に竣工したものであった。これも今度流されたが、野口橋は八百三十万円の工費であった。また九月廿五日の台風で吹き落とされたのだとまで悪口を云われた程お粗末であった天田橋は、尙千五十万円の工費と報じられている。いつの間にもどこでなくなったのか知らぬが、金の値うちも変わったものである。

私のように毎日川渡りをして勤めていると、橋の有難さがしみじみとわかる。それだけまた、オートバイが通っただけでぐらぐらと揺れる現在の假橋は、まことに頼りない。少し大きな雨が降ればキット落ちるに違いない。だから来年の夏は大方渡船の御厄介になることだろうと、今から覚悟をきめている。渡船も毎日乗る身になると、風流などと澄ましてはいられぬ。

何しろ彼処は天下の幹道だから、お粗末でも橋は一日でも早い方がよい。そのかわり本橋は中々一寸できまいから、もう一本假橋を用意してもらいたい。つまり假橋の假橋である。風速十数米の台風で飛ばないような、せめて野口橋程度の假橋がほしい。皮肉ではない、心から当局各位にお願いする次第である。余談はこの位にして、さて七月十八日午前、延長一八六米、巾員五、五米、一部Iゲタ鉄筋コンクリート近代式を誇る天田橋も、刻々に増水する激流に堪え切れず大半流失した。この時流れ残った橋上には、逃げおくれた附近住民男女約百数名が、恐怖と、飢と、寒さに戦慄の一昼夜を過ごしたのであった。以下体験者の談であるが、私が聞いたのはほんの一部の人であるから、多少の思い違いや誤りがあるかも知れない。

## 2

七月十八日朝は、夜来の豪雨がまだかなり激しく降りつゞけて居り、多量の雨を含んだ雲が、重苦しく垂れこめていた。

天田橋附近、堤防沿いの家々の人達が起き出でた頃は、たぶん午前六時過ぎと推定される時刻には、まだ堤防へ数尺の余裕があった。(同日午前六時下山路村福井橋流失の電話により、速刻日高川の出水状況を視察した菅原町長は、この時刻頃天田橋で十尺以上の裕ゆとりがあったと語っている……)。本紙七月二十五日記事)

そんな工合で、各家庭では大きな水だとは思っていたが、二、三時間後まさかあのような大事になるうとは思わぬから、たいして気にもとめず、主婦達は朝餉の支度をし、子供等も学校へ行った。ところがその後水は刻々増加した。

筆者の同僚で松原村新浜に住むSは、この朝七時五十分に家を出た。途中一カ所より道をして五、六分立話をしたと云うから、多分午前八時前という時刻に、尾上橋を渡り西川堤防へ来た。この時まだ西川堤防では三、四尺の余裕があったが、既に御坊町大浜通り西川改修記念碑附近の低地には、野水のためトラックが一台運転台まで没してエンコしていた。

これは大変だと思ったが、まだ天田橋を渡り向の専売公社へ出勤する気で自転車を飛ばした。天田橋西詰めまで来てみると、河流は早くも堤防上に溢れていた。気丈夫な男なので、それでもまだ橋を渡るつもりで半分近くまで自転車を走らせた。もうこの時は天田橋上に一寸ばかり水が上がり、自転車のリムが没していた。橋は絶え間なく無気味に揺れ、流木がズシン／＼と橋桁にぶつかっていた。通行人は全くなかった。たった一人雨の中を若い事務員風の女性が、傘もさ／＼ずに塩屋側から走って来るのに出逢った。顔色は真白で全く生きた色はなかった。その悲壮な顔つきを見ると流石のSも気味が悪くなった。その上例え橋を無理に渡ったとしても、塩屋側、中紀木工近辺の道路は浸水で、通行不能だろう……と考えたので、半ば頃から急に自転車の向きをかえて引き返した。

引き返して見ると、もう天田橋西詰の道路は濁流が洗うように越し、中町と万寿沢町と堤防が合流する三叉路のあたりには、大きな流木が流れついていた。それが押しよせて来た激流にころころと転がされ、滝のような水に中町の方へ流された。驚いて自転車をあわて／＼踏んだ。一気に電々公社(旧郵便局)の前まで逃げて来たが、既に水は道路上一尺余りになっていた。だから天田橋は八時十分頃までは持ちこたえていた。恐らくそれから間もなく八時半頃までの間に流失し、小字古屋敷方面の堤防もまたその頃に決潰したものだと思われる。

### 3

ここで話は一寸横道に入るが、紀勢西線和佐鉄橋の流失時間、その他がわかったので書き留めておく。即ち、

和佐鉄橋は七月十八日午前七時二十五分流失した。これは前々回に書いた和佐駅前花家の柱時計が七時四十五分で止まっていたことから考えても大体うなづける。

次に日高川常水時における河川面と鉄橋橋桁との間隔は、川中心附近で約七米である。鉄橋流失直前河流はこの橋桁にさ／＼えられ、鉄橋上流に夥しい流木が集まったと云うから、当時上和佐及び入野方面の水位は、約廿五、六尺に及んでいた計算になる。

従って前々号に、上入野岩屋の淵における水位を、三十尺位であったと思われる旨書いたのも、あまり見当違いでない。何故なれば、同所は日高川の屈曲部であり、和佐鉄橋附近に比較してはるかに川幅が狭いからである。

また和佐駅に立ち往生した列車は、七時二十一分和佐駅発和歌山方面行きの車であり、濁水は車内に及

び、減水後線路上には、およそ一尺五、六寸も泥土が堆積していた。

さらに先日入野岩津寅一氏に聞いた話には、日高川鉄橋は入野側と和佐側では数尺の高低があると云うことであつたが、これは事実であつて、和佐側は入野側よりも約三米八〇低くなつてゐる。以上は筆者が和佐駅長に教示を乞うたのに対し、和佐駅ではわかりかねるとあつて、わざわざ田辺保線区に照会され、同保線区からよせられた回答に基づくものである。この機会に厚く謝意を表したい。

#### 4

さて天田橋が流失し、名屋方面の堤防決潰時刻がおよそ八時三十分頃までの間であろうと思われ、これを記したが、当時名屋方面の状況はどんなであつたらうか。

大体大字名屋は、御坊町のうちでも比較的低地で、十八日朝も午前六時頃から、そろそろ浸水してゐた。日高川の水が高くなつて、川口方面西川から逆流したためであらうと思われる。

この附近は製材工場が多く、そこから積み出される木材や薪は、臨鉄日高川駅や中央貨物前に山のように積まれてあつた。それが堤防決潰の瞬間、一時にパツと散乱した光景は、あたかも麦藁細工か何かが飛び散つたように、見事なものであつたと一目撃者から聞いた。

さて、前記S君は八時十分頃に、橋も堤防も危しと、一目散に中町方面を北に逃げたことは既に記したが、天田橋附近の人々は、そう簡単にはゆかなかつた。と云うのは彼等には家があり、家財があり、家族がある。その為手間どつてゐるうちにも水は愈々増して、最早中町方面へ逃げる事が出来なくなつた。そこで一同は期せずして天田橋西詰めにあつた紀伊肥料会社の事務所、土屋氏の家に集まつた。この家は比較的丈夫であつたし、広くもあつたので、一同はここでしばらく状態を見ていた。そのうちにも水は益々猛威を逞しくし、遂に両側を石畳で固め、上部をコンクリートで舗装し堅牢を誇る堤防の一角を突破した。一角を破つた奔流はみるみる滝となり、瀬となり一尺、二尺と決潰口を広げて行つた。

こうなると堤防も脆い。堤防沿いの十戸程を一挙に屠り、多くの人の立てこもつてゐた土屋氏事務所に迫つた。家の敷地が瞬く間にえぐられた。家がきしぎしと鳴り出し、人々は全く生きた心地はなかつた。

この時分までこの一群には自ら二派があつた。即ちここは危険だから天田橋上へ逃げようとする者と、橋こそ危ないからここに止まろうと主張する一派であつた。

ところが事ここに至つては、橋が危ないとか、危なくないとか議論の余地はなくなつた。最早橋より外に身を置く所がなくなつたのである。

人々はまだ盛んに降っている雨の中を、無論傘などあろう筈はなく、着の身着のまゝ橋上に逃げた。

## (續)天田橋上の二十四時間

「紀州新聞」昭和二十八年十一月六・七日掲載

同時に今まで避難していた事務所は、大きな水煙を上げて激流の中に没した。時に七月十八日午前九時とも云い、十時とも云う人がいるが、大体九時半頃までではなかったか？

愈々これから一昼夜にわたる、恐怖の橋上生活がはじまったのであるが、この時分になると各所の堤防が決潰したため、幾らか減水したのか、橋上へは水は乗らなかつた。それでも雨は小止みもなく降る。傘はない、一同濡れ鼠である。おまけに前後左右ただ水、水、水、橋へは絶え間なく流木がぶつかつて、その度に流石の鉄橋も不気味な音をたて、慄える。

はるか上流から家が流れて来る。材木に縋つたまゝの男女が救いを求め乍ら流されて来る。然も何とも手の施しようもないのだ。それどころでない、此方の身が危いのだ。この一群の中に多くの子供達もいたが、余りの怖ろしさに泣き声も出さず、空腹を訴える子もなかつた。

中には流れついた縄切れを拾い、死なばもろ共と、親子しつかり結び合わせた者もあつたと云う。全く凄惨とも何とも形容の言葉もない、地獄図絵の展開である。

これは和佐鉄橋でも同じことであつたらしいが、天田橋に於いても、木材などに縋つて流れてきた人も、うまく橋の落ちた個所を流れた人は大抵助かつたが、橋桁へぶつかつた人はすべてそこで水底に吞まれて、再び姿を見せなかつた。何とか橋へよじ登れなかつたかと聞くと、どうしてくゝ矢の様な速さで流されているのだから、思いもよらぬと云うことであつた。

午後三時頃になってやつと雨もやんだ、水も幾らかひいた。人々はやゝ愁眉をひらいた。と同時に俄に寒さと飢がひしひしと迫つて来た。然し天田橋は濁流中に孤立して何ともしようはなかつた。減水したとは云えまだ前後左右は濁流が渦を巻いているのだ。

折からどこかの飛行機が一機低く飛んで来て、橋の上を一周した。

「アッ救援機が来たッ」。

子供達は一斉に喜んだが、飛行機と雖も何も手の施しようはなかつた。人々は恨し気に飛行機の飛び去つた空を眺めるのみであつた。

この頃御坊町へは、松原村・和田村の漁船が多数出動して、盛んに活動していたし、やゝ気分に余裕のできた町民は、流れ残った天田橋上に数拾名の人々が、取り残されていることを知ったが、橋の両端の水が物凄く、近よる術も救出の方法もなかった。

それから幾時間かたった。たぶん六時頃であったと思うと云うが、とにかく十八日夕方のことである。この時分水はもう余程低くなっていた。ここから一、二町下手に、これも大きな大きな被害を受けた工場だが、西川製材所と云うのがある。

この西川製材所が、この騒ぎの中で、どこでどう工面したもののか、握り飯の炊出しを作った。そして天田橋の上の人々に届けようと云うのだ。然し橋と崩れ残った堤との間隔は十四、五間ある。普通の方法では到底とどかぬ。そこで握り飯の一つ一つを新聞紙で包み、堤防から力の限り橋を目がけて投げるのであった。朝から一粒の米も食べていない一同は、固唾を呑んで手をさしのべたが、握り飯は中々届かぬ。そのまま河中に落ちたり、欄干に当たって碎けるものもあった。うまくとどくのは十中の二、三個だ。それでもその二、三個の握り飯が、握り飯にこもる人情がどれ程橋上の人々を感激させたか。

私は昔から臍まがりで、所謂人情美談という奴は虫が好かぬ。よく調べてみると飛んだ誇張があったり、第一美談特有の臭気が我慢できない。然しこの話は自然であり、どこかユーモラスでもあり、しかも余り知られていないようだから、聞いたまゝを紹介しておく。

そのうち橋上の人々にとっては、長いような短いような混乱の一日が暮れて混乱の夜が来た。何と云っても昼間は明るく、気の紛れることもあった。日が没してからはたゞ漆のような闇があるばかりであった。体は濡れたまゝであった。無論寝るどころではない。ここからの細かい模様を聞き洩らしたが、如何に夜明けを待ったか、想像に難しくない。

かくて奇しくも橋上に一夜を明かした老若男女老百式人は、(この数字も一説に六十余人と云う人もあり、はつきりわからない。誰かゞ橋を降りる時数えたのに、百式人あったというので、しばらくこれに従った。)明けて七月十九日午前八時半頃、全員無事に救出された。

私は災害の翌十九日午後はじめて彼地に至り、以来毎日あの附近を通勤しているのだが、その度に河中にポツンと残った橋を眺め、一体橋上の避難者はどうしてあの高い所から脱出したのかと少なからず疑問としていた。ところが本記事を書くについて聞いて見ると、予想通り十九日朝はまだ水流が速く、とても船を近づける事ができなかつた。それで最初はロープを投げたりして、最後に縄梯子や普通の梯子を渡し、それを傳つて脱出したのであった。

「怖かったでしょう」と、遭難者の女性に聞くと、  
「怖いも何も、ただもう橋から降りたい一念で、全く夢中でした。」と答えた。

(終り)

## 七一八水害覺書の二頁

「紀州新聞」昭和二十八年十二月八日掲載

### 藤井のはなし

#### 一、法徳寺堤防

矢田村土生領と藤田村藤井領の境界に近い法徳寺堤防が、今次の水害でまた切れた。またと云うのは明治廿二年にも決潰し、その後も屢々切れているからである。

もつとも今回は明治水害の時よりも、いくらか上手であり、決潰口もはるかに小さい。古老の話では明治水害には、法徳寺から藤井堤防の中程、瀬戸佐太郎氏邸附近まで決潰したと云うから約五百米に及んだ計算になる。この為、藤井部落上出方面の人家十二、三戸が流失し、半壊した家も多かった。当時の模様をもつと詳しく知りたいと思ひ、明治四十四年に編纂された「藤田村郷土誌」を取り出して見たが、徒に形容詞の羅列があるばかりで、家が何軒流れたとか、どれ程耕地が流失したか少しもわからない。ただ老人達の記憶によるほかはない。

話が少し脇道へそれた、もとへ戻そう。

筆者が実測したところによると、今回の決潰地点は紀勢西線土生川鉄橋の下流八十米であった。これを明治水害の五百米に比べると、約六分の一ぐらいになる。明治水害には道成寺石段の七段まで浸水したが、今次は二段半にとどまった原因は、明治になかった紀勢西線の線路があったからでもあるが、決潰口の小さかった事も挙げねばならぬ。

さて、この法徳寺堤防の決潰時間も、人によって区々で一向はつきりしないが、この堤防に極めて近く、大きな関係をもつ道成寺駅長の回答によると、午前七時二十分と云う。事実御坊町午前七時発

## 二、水害写真

の川上行き南海バスが、異状なくここを通過しているのだから、少なくとも七時十分頃までは無事であったと考えられる。このバスはここから真直ぐに早蘇村玄子まで上ったが、玄子から先は最早水のため進行不能であった。それで玄子から引きかえして御坊へ戻るべく、上川の水門（通称関門）まで来たが、そこから先は既に水が堤防上に溢れて進めなかった。それでさらに向きを変えて土生まで来たと思う頃堤防が決潰したこと等から考えると、七時二十分と云う時刻はほぼ正確と見てよからう。何れにしても藤井以南ではこの決潰が一番早かった。

近頃はカメラが普及しているので、こんな場合は非常に役立って、今次災害でも多くの貴重な記録写真がおさめられた。御坊公民館では十月十五日から、水害写真の展覧会を開催し、やがて水害記念写真帳を作る計畫だと云うが、まことに時宜を得た試みと云わねばならぬ。筆者も数十枚の写真を集め、一冊の写真帳をつくっているが、中で藤田町藤井瀬戸佐一郎氏撮影の数枚がもっとも優れている。優れているというのは芸術的にどうのと云うのではない。一番迫力があり、当時の生々しい光景を捉えていると云う意味である。

十八日午前六時頃瀬戸氏の近所に住む土木建築業の小池猶藏氏が

「野口橋が危いッ！今のうちに写真を頼む！」

と飛びこんで来た。そこで佐一郎氏は雨中カメラを持って飛び出し、刻々に移りゆく光景を撮影したわけであるが、そのうちの第一枚目は、水がまさに橋上に及ばんとする直前で、橋の上流には夥しい流木がかゝっている。本年十月五日野口村教育委員会から表彰された、野口小学校教諭鈴木良女史が、しばらく橋畔でためらっていたが、やがて決然と必死の強行渡橋をしたのも、この頃だろうと思われる。

第二枚目は濁流が既に橋上に及んでおり、堤防上にも水が乗りはじめている。その時分、水は橋にさゝえられて、橋の上流と下流では二尺ぐらいの差があった。だから野口橋附近の人々は、橋が落ちたなら水が低くなる、だから橋が落ちるまでガンバレと、堤防上へ土俵を運んだりした。二枚目の写真にはこの危急の中で、懸命に活躍している人々の姿がおさめられている。

第三枚目、既に野口橋が切れた。延長二百八米のほぼ中央部と思われる点で、橋桁にして一桁か二桁程が先ず切れた。待ちかまえていた瀬戸氏はこの瞬間シャッターを切った。時に七月十八日午前七

時四十分。この時間は野口橋橋畔に近い小池佐平翁が時計を見ていたと云われるから、先ず間違いはない。同時に上流一杯につかえていた流木が、一時に切れ口から溢れ出た。

第四枚目、最早野口橋は跡形もない。たゞ滔々たる激流が物凄い勢いで川一杯となり、高さ二十数尺と推定される藤井堤防に溢れて、堤防沿いの人家を一呑みにしそうな勢いで狂いたつのみ。この三枚目と四枚目の写真の撮された間は、時間にして大体四十分もあつたであらうか。即ち野口橋の一部流失から、完全流失まで三、四十分ばかりであつた。たぶん午前八時二十分頃であらうか。これも小池佐平翁の話である。

それにしても、野口橋は我々の期待以上に強かつた。昨昭和二十七年五月この橋ができた時、世間ではとても一年は持つまいと評判したし、筆者なども一水出れば、橋杭の半分も増水すれば忽ち流失するだろうと考えていた。それが半分はおろか、橋杭の九分どころまで浸水してもビクトモせず、水が橋上に及んでも猶しばらく持ちこたえた。

聞くとところによると、橋杭を設計通り正直に深く打ちこんでいたためと云う。流されはしたが、あそこまで持ちこたえたことは、設計者も工事人も一寸自慢してよいと思う。儲け主義で世間の目はごまかせても、自然の目はごまかせぬ。

### 三、藤井堤防

矢田村大字土生を起点とし、川口に至る堤防は、何れも日高平野数千町歩の耕地と、七カ町村の死命を制するものであるが、今度は各所で決潰した。

一番上手の法徳寺堤防が八十米が、午前七時二十分決潰したことは既に記したが、これにつゞいて藤井小池佐平商店附近、二股堤防の起点で約六十米決潰している。これも人によって区々であり、九時頃と云う人もあり、八時半という人もあるが、野口橋完全流失と殆んど前後していたと云うし、八時半説がほど正確かと思われる。

この辺りは堤防の幅も厚く、割石で頑丈に積みあげていて、一見して決潰しそうには見えなかつたが、聞いてみると裏手の方が弱かつたらしい。堤防一杯になる前、既に人家の庭へ盛んに噴水したくらいで、水が溢れ出してから脆かつたという。

ここは決潰口が小さかつた割に人家が密集していたので、住家十一戸と倉庫二棟ほどが流失した。明治水害には主に上出方面の被害が多かつたが、今度はその逆に下出方面が損害を受けた。

ここから更に下つて、二股堤防の旧製紙工場の所がまた切れた。大正十年（一九二一年）以来二度目であつて、決潰口は三百三十米、この線で一番大きく切れている。時刻はこれも八時半か四十分頃と云うが、この頃が最も水勢の激しい時刻で、堤防が決潰したと云うより、むしろはち切れた観があり、切れるべき箇所は何れもこの時刻前後に切れ、流れる橋はすべてこの時分に流されたらしい。

ここを突破した水は忽ち出島外新田の耕地を一呑みにし、人家五戸を瞬時にして流し、更に第二堤防に突きあたり、二カ所に亘り二百米ほどを決潰した。かくて第一、第二の堤防を突破した水は愈々水勢を増し、ここから真直ぐ西南に向かい、藤井・吉田・出嶋・小松原・財部・丸山・島・御坊・田井・入山と日高平野一帯を泥海と化した。

#### 四、藤井の人々

年中日高川の畔に住む藤井の人々は水に敏感だ。中でも小池佐平翁の如きは、明治水害にも、大正十年水害にも遭遇しているので、朝来水勢のただならぬを見て、御坊町の取引先各所へ電話で警告したり、刻々に高くなる水を見まもつていた。七時前まだ堤防へ一米ぐらいの余裕があつたが、八時頃店舗が危なくなつたので本家へ移り、ここで十時頃までいたが、十時消防団の誘導で専念寺に避難した。これより余程前、八時頃から日高川常水時に二十数尺と推定される藤井堤防は総越で、各所は決潰寸前の危期であつた。この当時の凄惨な光景は、前記瀬戸佐一郎氏が二、三枚カメラにおさめているが、この写真は瀬戸氏が自家の土蔵の屋根に馬乗りになつて撮影したものであると云う。

ちようどこの前晚、即ち七月十七日夜から十八日朝へかけて、宿直にあつていたため苦い経験をなめた藤井郵便局員某氏は、えらい水とは思つたが、まさかこれほどの事とは知らぬから、悠々と睡つていたところ、同宿の者に起こされた。起こされて見ると成程ひどい水であつた。それでもまだまだ大丈夫だと思つていた。そのうち水が来た。急いで郵便物を処理し、そこらを片附けた。もう堤防は総越してあつた。

その時分でも堤防が切れるとも、危いとも思わなかつたと云う。空中戦に出ても自分だけは大丈夫だと思ひ込む、同じ心理だろう。最後に深い水中を泳いで瀬戸佐一郎氏邸へ避難した。

このように最後まで藤井部落にとゞまつた人もかなりあつたが、大部分の人は家を捨て、避難した。矢田村土生の薬草研究所や道成寺、藤井の専念寺、旭化成株式会社が主な避難先であり、中には遠く小松原九品寺や御坊町の変電所に逃れた人もあつた。

## 五、明治水害の挿話

今回の水害が激しかっただけに、常に比較されるのは明治水害であるが、どうも色々の点を総合して考えると、矢張り今次の方が大分大きかったらしい。

その一例に藤井堤防は明治水害以来、二尺づゝ二回嵩置している。その上またコンクリートで二尺防水壁をもうけた。つまり都合六尺ばかり高くなつた計算になるが、然も今次の水はその防水壁をも突破している。

明治二十二年水害に藤井の某氏が川船に乗つたまゝ九品寺へ逃げた。途中で水竿を泥にとられ、流れにまかすより外はなかつた。幸いに舟は九品寺近くへ流れたが、どうしたことか動かなくなつた。闇をすかして見ると、かすかに九品寺の白い土塀が見える。やれやれと思ひ大声で救いを求めると、九品寺から声あり、

「舟を捨てゝ歩いて来い！」

と。——半信半疑怖々泥水の中へ飛び込んで見ると、なんと水は脛にも充たなかつたと云うのんびりした話がある。何時の間にかやらアマゾン河口に入っていることを知らずに、僚船に水を求めたところ、  
「汝のツルベを下ろせ」とたしなめられた、と同じ趣向の話である。何処かの悪戯者の創作かも知れぬ。

明治水害に藤井部落の状況を、矢田村土生から眺めていたという老翁の話に、あの時夜が明けて見ると、藤井の周囲は夥しい流木の山であつた。法徳寺堤防が切れ、藤井が危機にさらされたとは知らぬから、なんと藤井の人は材木を沢山拾つたものだと言つた。

今次の水害でもその通りで、筆者の村から藤井部落は一望だが、まさかあれ程荒れているとは思わなかつた。十八日夕刻すでに藤井堤防が切れ人家が流され、天田橋流失の噂を聞いたが、半信半疑であつた。十九日朝御坊町の知人を訪ぬべく、藤井まで来て始めて驚いた。あの時は藤井堤防上には流木がごろ／＼しており、中筋通りは泥水で一杯であつた。藤井全戸数二百三十戸のうち、床下浸水にとどまつたのは、わずかに旭化成工場附近約二十軒のみであつたと言うから、以てその惨害の程がうかゞわれる。

(完)

## 土木責任者に望む

「紀州新聞」昭和二十八年十二月二十三日掲載

### 天田橋はあれでよいのか！

#### 1

私は頭の古い郷土研究の徒で、年中シミの喰った古文書をひねくって居れば機嫌のよい男である。従って政治問題や、社会問題に嘴を容れる気は毛頭無い。

そんな事は盗ッ人にも三分の理屈で、場合によっては白を黒とも云えるし、自ら他に人があるからである。然し今度は別だ、事人命に関する問題だし、一郡の産業経済に重大な影響を及ぼす事柄であるからである。その上日高の大衆は、何故かこう云う事におとなしい。毎日何千人かの人が渡舟の中でブツブツ云い、陰で愚痴をこぼすが、一向輿論として発展させようとはしない。陰で世迷言を幾らくりかえしいも、役所のお偉方や、県議諸公には分かるまい。敢えてペンを執った所以である。

#### 2

周知の通り天田假橋は本月十四日夕刻落ちた。幾ら假橋とは云え、半年もたゝぬうちに二度目である。最もこれは当然の話で、こう云う方面に全く知識のない私でさえ、十一月十五日本紙上「七・一八水害覺書」の中で、恐らく假橋は来年夏までもつまいと予言しておいた。それにしても、それは出水のために落ちると考えたので、まさかトラックのぐらいで落ちるとは思わなかった。然し世間の目は怖い。あの假橋が竣工した当時から、巷間既にトラックでも落ちるだろうと噂があつた。十<sup>じゅうもく</sup>目の視る所狂いはなく、果たせるかなである。

橋が落ちるや、土岐御坊土木出張所長は、「管理者として全く申し訳ない」と話している。（大毎和歌山版十二月十六日）、世俗に

「すまんですんだら、警察いらぬ。」（「御免で済んだら、……………」）と云う諺がある。幸いに今回は死傷者がなかったからよいようなものゝ、万一死者でもあれば如何したであらうか。全く申訳ないぐらいではすまないのである。

然もあの直後、御坊土木出張所は年内に復旧させると、誇らし気に語っていた（本紙十二月十六日記事）。私はあれを読んだ時も、奇異の感にうたれた。何故なら十三號台風で大半流失した時でさえ、約半月で復旧した。今度はたった二桁か三桁なのに、年内と云えば矢張り半月を要する計算になるからだ。当局は此の交通の要所を何と見ているのか。これ程大衆が迷惑しているのに、年内などと悠長にかまえて居られる心臓に呆れたのであった。果たして十五日通常県会席上、笹野議員から質問あるや五日間で復旧する事になった。成程御坊土木出張所は水害復旧工事で不眠不休の努力をしている事はよくわかるが、やれば出来るではないか、さてこんな事を何時までくりかえしてもはじまらない。本論に移ろう。

### 3

落下した天田假橋も関係各位の尽力によって、廿二、三日には開通見込みの由で、これはまことに結構であるが、この機会に註文がある。

私は橋の利用者で、目下渡し船の御厄介になっているが、素人の私の観察したところでは、せつかくの假橋だが、このまゝでは近い将来に又落ちる危険が多分にある。

幸いにして今回は死傷者がなかったが、次もそううまくゆくかは、誰も保証は出来ぬ。その時になって、責任じゃ何じやと騒いでも後の祭りである。そこで対策として、

第一案Ⅱもう一本第二の假橋を用意する事。トラックで落ちたり、バラック建ての家さえ無事であるのに、橋が吹き落とされたと言うようなものでなく、せめて旧野口橋程度の假橋をもう一本架けること。予算がないと言うのか。予算がなければ人の十人、廿人死んでもよいのか。これが出来ないなら、

第二案Ⅱ重量制限を厳守せよ。橋の両渡口に検問所を設けて。重量制限を嚴重にやって貰いたい。然も一時に三台以上は通さぬこと。これでは河杉田辺運送御坊営業所主任が言われた如く、通さぬと同じ結果となるかも知れぬが、人命には代えられぬ。不便を忍ぶよりほかはない。毎日通行する者にとっては、何時トラックと無理心中させられるかも知れぬのだ。危険は各自の身近に迫っているのだ。嘘だと思ふ者は橋桁を見よ。それも出来ねば、

第三案Ⅱ定期検査の励行。

毎週日を定めて、専門家に検査をさせる。危険とわかれば、通行を一日、二日禁じてもやむ

を得ない。即刻補修工事をする。但しこれは判定が困難だし、効果も保証し難いが、やらぬよりはよからう。

災害がおこつてからでは、百の名案も役にたゝぬ。通行者の一人として、当局各位の真剣な考慮を望む。

(昭二八、一二、一九稿)



## をよんだ俚謡

「紀州新聞」昭和二十九年一月五日掲載

### 1

○鳶山から熊野谷見れば、はだか馬かよ鞍がない

これは徳川季世日高地方で行（謡）われた俚謡で、誰でも知っている話だが、昔、野口村の庄屋某、鳶山に登り、真下の熊野谷を見下ろして、その貧困さを嘲笑した唄である。

後この唄が、子守女に至るまで唄われるに至り、熊野村の人々は歯ぎしりをかんで口惜しみ、一致協力勤労に努めた結果、程なく野口村第一の富裕部落となり、白壁の蔵が建ち並んだ。

熊野部落が貧（九）しかったと云うのは事実だが、それは部落の人々が特に怠情であつた所為ではない。これについて、明治四十四年（一）編纂の「野口村誌稿」に云う。

大字熊野、明治以前田三六町歩ナリシヲ段々池ヲ掘リ、山ヲ開墾シテ今日ノ如ク増加シタルナリ。

旧高四百八十八石八斗四升、昔ハ上々田、上田、中田、下田、下々田アリテ上々田モシクハ上田八年貢高クシテ耕作スルモ収支相償ワズ、酒ヲツケ、山ヲ添エテ遺リ貰ヒセシ程ナリシガ、明治八年（二）地租改正ナリテ、凡ソ昔ノ半額トナリタレバ、其ノ後大ニ価値ヲ生ジ來リ、今日ニテハ其ノ田一反歩ニ付、五、六百円ノ売買ヲナスニ到ル

と。つまり徳川苛政の罪であつた。

然し、これに似た話は日高のあちこちにあつて、農地法改革前までは、日高第一の、否、県下切つて大地主と云われた湯川村小松原の橋本太次兵衛氏等も、成程先々太次兵衛氏が傑物であつたからでもあるが、矢張りこの時代に人々の持てあました田地を、酒添えてとは云わぬが、次々と安く手に入れて大をなしたのだと云う。

○馬がもの云うた、○○さんの馬が、株井峠をいやと云うた

株井峠は船津村高津尾と同村姉子に跨がり、標高二六二米、上下約一里県道御坊―川上線第一の難所であつて、御坊から川上、寒川方面に到るには、どうしてもこの嶮を越さねばならぬ。

ここに隧道が出来たのは何時ごろの事であろうか、「日高郡誌」第三編食貨誌に

郡道下山路、船津線中の株井峠（船津村高津尾同姉子間）に延長百十八間の隧道を掘鑿すべく大正十一年（一九一一年）には該工事の第一着手として先づ高さ六尺幅六尺の導坑を掘鑿すといふ。

とあれば、大正十一年以後であることは確かである。とに角、今ではトラックや自動三輪車が一日何拾台となく通い、旅人はバスの中から窓外の紅葉を賞しながら、楽々と越えるが、それまでは草鞋がけで歩くより術はなかつた。

ましてや物資はすべて馬力や牛車で輸送されたものだ。更に其れ以前は一つ一つ馬の背によつて運ばれたが、これをゴンダ馬とよんだように覚えている。そのゴンダ馬か、馬力馬か知らぬが、流石に株井峠の嶮には一汗して、

「株井峠はもういやじゃと」云つた訳である。

最後に少し色っぽいのを一つ。

○馬がもの云うた新助はん馬が、○○さんなら乗しよと云うた

この唄は死んだ私の祖母が時々うたっていたから、明治中頃から大正の初めにかけて唄われたのかも知れない。

新助はんは、矢田村矢田谷の豪農で代々馬を愛育していた。新助はんの近所に○○さんと云う評判の美人あり、村の若衆にさわがれた。そこで新助はんの馬も、○○さんのような美人なら喜んで乗せましようと思つたのである。

この馬、ヒョットすると、アプレ青年のように牝のことばかり考えていたのかも知れぬ。

# 御坊市への希望

「日高新報」昭和二十九年二月十二日掲載

日高郡最初の、然もただ一つの市制施行地グレート御坊の誕生を迎えた市民はもとより、郡民の慶びと期待は大きい。それだけに市政当局者の責任は重大である。

由来、御坊市には多士済々、今更実地にうとい私共があれこれ云うのは、恰も釈迦に説法のソシリを免れないが、強いて希望を述べるなら

## 一、工場誘致

今迄も屢々試みているかに伝えられたが、此の機会に本腰を入れるべし。日本国そのものが工業立国以外に生きる道はない如く、御坊市も工業都市となるより他に繁栄策はない。正直に云って幾ら宣伝して見ても、観光地としては白浜に及ばず、勝浦に劣り大した望みは持てぬ。

それよりも工場である。大和紡績級の工場が今二つ、三つ設置されるれば、市は自ら発展し、夥しい失業者は吸収され、町は明るくなるだろう。市政参加にソツポを向いた附近村も今度は向こうから合併を申し出るに違いない。

只その為には、市当局はあらゆる犠牲を払う可きであり、市民特に地主階級は目先のみには拘泥せず、積極的協力をなすべきである。

## 二、文化設備の充実

従来の御坊町時代の文化面はお話にならなかつた。総合グラウンド一つなかつたではないか。公会堂一つなかつたではないか(だから何か会合と云えば、學校か寺院を借りるより他はなかつた)。

公民館あれど名前ばかりで、水害遭難者の假住宅となり、忽ち警察署の移転先となり、折角有能の職員を擁し乍ら、其の力を發揮せしめる余地を与えなかつたかの觀あり。

旧御坊町の発祥地とも云う可き御堂さんも、水害で荒らしたままではないか。  
町誌一冊、水害誌一冊、小竹神社誌一冊出せなかつたではないか。

以上この機会に追々片つけて貰いたい。人はパンのみによつて生きるものに非ず。暴言多謝、ただ御坊市を愛するのみ。(完)

# ウサギもツノ姫物語

「紀州婦人新聞」昭和二十九年二月二十五日掲載

## 1

この春中学校を卒業しようという娘の話である。親の口からはおかしいが、学校でも余り出来ない方ではない。

「お父ちゃん、

夕飯の後で娘が話しかけた。

「此の間から二葉亭の「平凡」を読んでいるのだけど……」

「うん」

「どうしても分からない所があるの！」

「どんな所だい！」

「あのね、読んでいると方々に、ウサギもツノ、ウサギもツノって書いてあるの、ウサギもツノって何なの……」

「へエー、ウサギもツノだって？」

私は一寸考へた。そして昔読んだ「平凡」のあらすじを辿って見た。がそんな事は何処にもあつたとは思えない。そのうちハハーンと考へついた。

「何だ！ウサギもツノだって！あゝあれはお前、兎も角、トモカクって読むんだよ」

私は大声をあげて笑つた。兎も角をウサギもツノと読むなんて、奇想天外、正に我娘ながら近來の傑作である。以来ウサギもツノ姫とよぶことにしている。

さて、中学も終えようと云う年になって、然も余り出来ない方でない生徒が、兎も角の読み方を知らぬとは、是は実に由々敷問題であり、現代小学校乃至中学校のあり方が、なんて息巻く気は毛頭無い。何故なら次のような一例もあるからである。

## 2

「うちの嫁はんがね、」

近所の婆さんが来ての話である。

「この間葉書を書いていっているのです。どんなことを書いたのかと、ひよいと見ると、色々と並べ立てた。最後に“足借らず”と書いているのです。」

「悪しからず」の心算でせうね。“足借らず”、成程、それでも、あしからずは、あしからずですけど。このお婆さんは六三制の卒業生では無論ない。してみるとウサキもツノも、強ち現代国語教育の欠缺のみ云へぬではないか。(完)

## 地主の今昔

「紀州新聞」昭和二十九年十一月三十日掲載

この前明治<sup>(一八八九年)</sup>二十五年の県下の長者番附表を本紙に載せたが、今度塩屋町の名家山田栄太郎氏から明治十二年の和歌山縣地租一覽表を借り受けたので、日高郡の部だけを掲載する。

明治十二年は今から七十五年の昔で、明治六年新政府による地租改正の勅令が出て、全国的に土地の丈量と地價の評価が行われ、この前後から従来の米による物納が金納に替わったもので、その結果がこの一覽表となつたものである。

当時地價の最高をしめたのは田地と宅地であつたから、自然田地を多く持ったものが上位にあつて、山林所有者は今日程目立っていない。その後昭和<sup>(一九四六年)</sup>二十一年、二年の農地改革法案によつて大地主の大半は土地を手放したが、それにしても約八十年の歲月は如何にこの順位を狂わしてしまつた事か、一見して今昔の感に堪えない。

当時御坊でうたわれた唄に“樽屋金持ち、紀小竹屋地持ち、横町伊兵衛さん娘持ち”  
と云うのがあつた。樽屋は云うまでもなく東町上田氏であり、紀小竹屋は本表第二位の小竹佐兵衛氏をさし、横町伊兵衛さんは、今の岩本氏である。こうして唄にまでうたわれた両家は既に昔日の面影なく、地租額千円余を持ち県下第一の大地主で、本表トップの橋本氏も亦農地改革法案で大きな打撃を受けた。厳しい時の流れである。

なおこの表は地租五十円以上のものを載せている。こゝでは長くなるので百円以上にとゞめた。

明治十二年二月調査(地租金額、住所、氏名の順)



〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
小中	印南	大又	御坊	小池	東本庄	印南
玉井	夏見	原見	中川	寺井	東	山西
伝太夫	安兵エ	莊太朗	藤蔵	助八	善七	藤七

あとがき

〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
東岩代	猪内川	印南	吉田	財部	和田	和
有本	川口	玉置	塩路	細田	津村	津
安兵	市平	善七	善兵エ	団蔵	藤右	藤
					工	門

父長一郎は自分が「紀州新聞」外、地方紙に投稿した記事を、スクラップに貼り付け遺していた。その数二十七冊以上あるが、「矢田村誌」、「日高路の碑巡礼」など、既に出版したものもあり、それ等を除き追々照会して行きたいと思う。

内容は随想あり、古老からの聞き取りあり、郷土研究先人の話の他に、行政を批判したもの等色々あるが、当時の日高地方の世相を知るため掲載している。また当時としては気にせずにつかえた被差別部落表現や、差別につながる記述含がまれ、屋号・氏名など実名で出ている箇所があるが、修正等を加える事により資料としての価値を損ない、また歴史的研究の資にすることを妨げることになるのを考慮し原文のまま掲載しています。

随想、古老の聞き取り話、先人郷土史家の話、自分の調査・研究等に分類すべきだが、取り敢えず投稿年月日順にしている。

平成二十四(二〇一二年)五月十三日(日)

清水章博